

第四編 音韻變化の諸原因

一

凡そ、種々の言語變化、殊に音韻變化に對して、個人の意志が極めて無力なものであるといふこと、即ち、それらの現象が個人の意志の力で如何ともなす能はざる必然性によつて動かされて行くものであるといふことは、屢言はれてゐることである。例へば、A. Dauzat に據れば、意志は概して言語の上に何の働きをも及さないものである。何故なら、民衆の大部分は、ただ意思交換の目的さへ果されれば満足してゐるもので、言語形式それ自體を批判しようなどといふ氣を起すことは無いからである。もし言語記號そのものに注意が向けられるならば、意志は勿論音韻なり文法なり語彙なりを變改することが出来る道理であるが、そんな下心が起つたとしても、言葉の上の習慣を變改することは非常に困難なので、その望みは直ちに阻止されてしまふ。個人が自分の言葉使ひを變へようと意識的に望むのは、主として他の社會階級の言語や他の方言を學ぼうと力める場合だけである。ところが、自分の言語に無い音を習得することは、殊に成人にとつては非常に困難なことであるから、その希望は結局抑壓されることが多い。例へば、十九世紀の文法家たちは、パリの言語に於ける „l mouillé” (古くは ⟨Λ⟩ であつたが、當時は既に ⟨j⟩ に變化してゐた。例へば *travailler*→*travayé*) を ⟨Λ⟩ に復歸させようと大いに努力したが、結局徒勞に終つた。之を要するに、意志が言語變化に與ることは極めて稀である。凡そ、言語變化に於ては、個人がその環境たる社會的慣習に同化することこそ有れ、社會的慣習が個人によつて變改されるといふことは決して無い。何故なら、物の言ひ様を少しでも變へれば、忽ち、他人に理解されることが困

難になるからである。勿論、個人の創造は語彙の領域に於て比較的多數に認められることは事實であるが、比喩にせよ新語創造にせよ、それが他人にも理解されるためには、やはり既存の類似の現象や類似の語に倣つて作られ、その言語の一般的及び時代的の傾向に従ふことが必要である。^(註 1)

但し、Dauzat がここで意志 (volonté) と言つてゐるのは、言ふまでもなく、明瞭に自覺された個人の意圖を指すものである。個人は、通常、意思交換以外には何物をも意圖してゐない。併しながら、その意圖を實現するためには、現存する言語制度を利用しなければならない。言語は即ち意思交換のために存する道具である。さらば、言語によつて意思交換を行ふ人は、その道具の良否について何らか感想無きを得ない筈である。ところが、現存する言語制度は、歴史的產物であり、現代人の希望に應ずる道具としては未だ完全なものではない。即ち、我々は所謂「言語に絶する」情景や感慨を経験すること屢である。我々は、内心に於ては、自分の意思をもつと容易にもつと適切に言ひ表し得るやうな言語制度を求めること甚だ切である。併しながら、言語制度は社會的約束である故、個人が勝手に之を變更することは出来ない。變更すれば、忽ち理解困難に陥るか、或は他人の嘲笑を招く。そこで、不満足ながらも、現存の制度に従ひ、之を利用するより外は無い。かかる不満も、個人的一時的のものであれば、すぐ忘れられてしまふのであるが、それが社會全體の要求として永續するに至れば、つひには、止むに止まれぬ心的傾向として、多くの人々の言語行爲(音の方面ならば發音運動)を、欲求された一方向へ無意識的に引きつけるやうになり、その果には、言語制度(音の方面から言へば音韻)そのものをさへ變化せしめるに至る。音韻論にかけての先覺者である E. Sapir が“drift”と呼んでゐるのは、つまりなやうな社會的な潜在的傾向を意味するものに外ならない。

同氏は言ふ。なる程、言語は、それが實際に使用される限りに於て(話さ

れ聽かれ書かれ讀まれる限りに於て)のみ存在するものである。如何なる重大な言語變化も、最初は個人的變異から發したものである。これは確かに事實であるが、併し、さればとて、個人的諸變異ばかりを漏れ無く集めて研究したところで、その言語の底を流れる一般的 drift が理解されるものではない。個々の變異そのものは、譬へば海の波が一進一退何のあても無い動搖を見せてゐるのと同様な、亂雑な現象に過ぎない。之に反して、drift は固有の方向を持つてゐる。換言すれば、個人的諸變異の中、或一定の方向へ動くもののみが、drift を體現し、之を進行させてゐるのである。それは、あたかも、灣内の波の動きは種々さまざまであるが、その中の或一部のもののみが潮の動向を示してゐるのと、同じことである。一の言語の drift は、可能なるべきあらゆる個人的諸變異の中から、或一定の特殊な方向に向ふものを、話手が無意識的に選擇することによつて構成される。この方向は、主としてその言語の過去の歴史から推知することが出来る。長い年月の間には、drift として示された新しい特徴は、つひには一般の普通な言語制度の一部になつてしまふ。併し、その初に溯れば、それは久しい間ただ少數の人の言葉の個人的傾向に過ぎなかつたのである。既存の言語制度を固執する心と、之を破壊しようとする drift との争は、左のやうな場合によく認められる。“Who did you see?”といふ文を讀む人は、誰しも之を「不正」な言ひ方と思ふに相違無い。併し、それなら一體何と言つたらよいのか。無論 “Whom did you see?”と言へば「正しい」言ひ方には相違無い。けれど、何となく窮屈な感じがする。之に反して、“Who did you see?”と言へば、自然ではあるが、傳統的な言語感情が之に反抗する。我々は、意識的には “Whom did you see?”の方を正しいと思ふが、無意識的には “Who did you see?”と言ひたくてたまらない。それは何故かと考へて見るに、第一、實際の言語感から言ふと、who は、人稱代名詞 I, you, he, she, it, we, they よりも、寧ろ疑問代

名詞及び關係代名詞 which, what, that の方に近い親縁關係を持つものとして感ぜられる。然るに, which, what, that に於ては, 目的格は主格と同形である。故に, 獨り who の場合にのみ目的格を主格から區別することは, 不釣合のことと感ぜられる。第二, who は, 疑問詞としては, which や what のみならず, 更に where, when, how 等とも心理的に關係してゐる。然るに, これらの語は, いづれも語形變化を有せず, 又常に強調を以て發音される。實際, 英語國民の感じから言ふと, 文の中での強調的要素たる疑問代名詞や疑問副詞は, 不變化語たるにきまつてゐる。それ故, whom の語尾 m は無用の長物であり, 却つて表現的效果を減殺するものである。第三, I : me, he : him, she : her, we : us, they : them のやうな語形の對立は, 現代英語では, 語の順序と密接に關係してゐる。即ち, me, him, her, us, them のやうな目的格形は, 必ず動詞の後に來るものである。ところが, “Whom did you see?” の whom は, 目的格の形を持ちながら, 而も, 一般の疑問詞の場合 (What are you doing? When did you go? Where are you from?) と同じく, 必ず文の頭に立つ。かかる語形と語序との間に存する矛盾を除くためには, “Who did you see?” といふ言ひ方が自然に要求されることとなる。第四, “Whom did you see?” は, 發音がいささか困難である。即ち, 強調される whom は, 半長母音の後に唇的子音が着くといふ, 甚だ重苦しい形を持つてゐる。その上, 後に續く語が did である。what did や when did に於ける t, n から d への移行がごく軽く滑かに行はれるのに對し, whom did に於ける m から d への移行が甚だ不圓滑なものであることは, 明白である。かかる發音上の困難は, “Whom did you see?” に對する不人氣を, いよいよ増し加へることとなる。我々が, “Whom did you see?” の方を正しいと信じながら, 而もなほ何となく “Who did you see?” と言ひたくてたまらないのは, かやうな諸原因が相融合して

生じた無意識的欲求、即ち drift が然らしめてゐるのである。^(註 2)

かかる内心の不満は、いつまでもただ隠れてのみは居ない。たとひ傳統的言語制度の壓力はどれ程強くとも、“Who did you see?” を使用する人々がいつしか次第に増加し、つひにはその形が社會一般に認められ、新に言語を習得する小兒たちも、この形を記憶して、それを典型的の言ひ方と信ずるに至るであらう。かかる drift の働きは、文法や語彙の方面のみならず、音の方面に於ても亦同じことである。即ち、我々は音韻制度を直ちに破ることは出来ないので、現在の音韻制度に對する不満は、言語の理解を困難ならしめない範囲内で、まづ發音運動の中に漏らされる。例へば、音韻制度の要求する典型的發音が餘りに面倒であると感ぜられる場合には、必ずしもその要求通りに發音を遂行せず、言語の理解を困難ならしめない範囲内に於て、出来るだけ樂な發音で間に合せようとする。かやうな不満も、單なる個人的一時的のものである場合には、それが發音運動の中に漏らされるにしても、その場限りのことに過ぎないが、それが社會全體の欲求として永續するに至れば、つひには、止むに止まれぬ心的傾向として多くの人々の發音運動を、欲求された一方向へ無意識的に引きつけるやうになる。かくて、發音運動の上に、その社會全體に通ずる一般的傾向を生じ、その果には、各成員の頭の中に存する音韻觀念にさへ影響して之を或方向に變化せしめ、或は、新に言語を習得する小兒たちの頭の中に從來のものとは稍異なる音韻狀態を成立せしめるに至る。

註 (1) A. Dauzat: La philosophie du langage, 1920, pp. 64—65.

(2) E. Sapir: Language, an Introduction to the Study of Speech, 1921, pp. 165—172.

二

さて、かやうに音韻變化は最初は發音運動の上の或傾向から起るものであるが、發音運動は言ふまでもなく言語行爲の一要素である。それ故、音韻變化の意味を理解するためには、どうしても之を言語行爲の目的に關聯させて考へなければならない。言語行爲の目的は、之を話手の側から見れば表現であり、之を聴手の側から見れば理解である。併しながら、理解は寧ろ受動的な行爲であり、理解の内容及び手段は専ら話手の表現意圖によつて決定される。理解を要求することは、表現そのものの本性である。話手は表現を發する人であり、聴手は表現を受ける人である。それ故、言語行爲の目的は、理解を要求する表現であると言つて差しかへ無い。

さて、表現の具體的内容は、之を主目的と副目的との二つに分つことが出来る。主目的とは、話の表面上の用件であつて、これは常に話手に明瞭に自覺されてゐるものである。副目的とは、例へば、自己の品位を損ぜざらんがための心遣ひ、自己の學識を誇示しようとする欲求、相手や傍聴者の不快を招かないやうにとの遠慮、或は自己心中の憤懣を何となく漏らさうとする氣持などがこれである。この副目的は、話手に明瞭に自覺されることは寧ろ例外的であり、通常は話手自身にも氣付かれてゐないものである。もつとも、話手自身に自覺されないと言つても、それはやはり或内容を表現しようとする欲求である。従つて、單なる自然的な感情表出とは違ふ。それで、時には、話手自身が自覺しない副目的を、聴手が看破することもある。

さて、談話の當事者としては、言ふまでもなく、「話手」と「聴手」とが存在しなければならない。然るに、その「聴手」は、更に之を分つて「話相手」と「傍聴者」との二つにすることが出来る。言語行爲の内容や形式は、勿論話手の意圖によつてきまるものであるが、その際、話手は話相手

と傍聴者とに對する關係を顧慮しなければならない。例へば、或事件について語るにしても、その直接關係者に向つて語る場合と第三者に向つて語る場合とによつて、話しぶりが違ふ。これは話相手に對する顧慮の相違によるものである。又、お母さんが子供を叱るにしても、臺所で叱る場合とお客様の前で叱る場合とによつて、叱りやうが變つて来る。これは傍聴者に對する顧慮の相違によるものである。

勿論、實際問題としては、話相手と傍聴者との區別が不明瞭なことも無いではない。例へば、四五人の友だちが集つて雑談に耽る場合、話手たる甲は、乙・丙・丁・戊の四人に向つて話しかけてゐるやうでもあるが、また主としては四人の中の乙を相手としてゐるやうにも見える。この場合、話手たる甲に對する丙・丁・戊の立場は、話相手なのか傍聴者なのか、不分明である。又、演説や論文などについても、同様の例が少くない。即ち、その著書は、主としては學生に讀んでもらふために公表されたものであるが、必ずしもその他の讀者のことが念頭に置かれてゐないわけでもない。かやうな場合には、話手たる著者に對して、學生以外の讀者は、話相手なのか傍聴者なのか、その區別が不分明である。かくの如く、實際問題としては同一人が話相手の立場と傍聴者の立場とを幾分づつ兼ねてゐる場合があるとは言へ、話相手と傍聴者との二つが概念上區別され得ることについては、何の疑も存しない所である。

さて、然らば話相手と傍聴者との相違は如何なる點に在るか、と言へば、その主要な點は左の通りである。話手は、話相手に向つては、話の聴取並に理解を強要し、命令的な態度に出るが、傍聴者に對しては、何物をも強要せず、命令的態度を以て臨むことが無い。一般に、大勢の人に向つて話しかける場合には、話相手と傍聴者との區別が不分明になり易いが、それは、聴取し理解する責任が多數の人の肩の上に分たれる結果として、聽手各個人の責任感が稀薄になるからである。

談話の常態に於ては、話手が話相手に向つて理解を強要する内容は、専ら表現の主目的のみである。表現の副目的は、通常は話手自身に自覺されてゐないものであるから、その理解が強要される筈は無い。副目的の理解は、話相手に對してすら、決して強要されず、ただ期待されるのみである。

表現の副目的は、話手が話相手なり傍聴者なりの理解をひそかに期待してゐるものであるが、その期待する心持も通常は話手自身に明瞭に自覺されてはゐない。之に反して、表現の主目的は、話手によつて常に明瞭に自覺されて居り、且その強要の方向は斷乎として話相手の方に向つてゐる。傍聴者に對しては、話手は、主目的の聴取や理解を、期待することもあり、忌避することもあり、又成行に任せることもある。その場合々に應じて、表現のし方にも相違を生ずるわけである。

さて、表現の主目的は、話の當面の用向きであるから、談話の度毎に變るものである。各人各社會に固有の氣質や趣味のやうな持續的欲求は、無自覺の間に副目的として不斷に漏らされる。それ故、音韻變化の原因を考へるに際しては、表現の副目的も亦決して輕視すべからざるものである。

既述の通り、言語行爲の目的は、一口に言へば、理解を要求する表現に在る。従つて、音韻變化の原因も、亦當然この表現といふことを中心にして考察され分類されなければならない。音韻制度を變化させる drift の方向は種々さまざまであるが、その根底をなす欲求は、總括すれば大體左のやうに分類し得る。

A. 表現の目的に關係あるもの

I. 表現手段を簡易ならしめる欲求

1. 發音を容易ならしめる欲求
2. 記憶の負擔を輕減する欲求

II. 表現手段を有效ならしめる欲求

1. 發音を明瞭明晰ならしめる欲求

2. 言語單位の自己統一を明瞭明晰ならしめる欲求

3. 種々なる表現効果を目指す欲求

B. 表現の目的に關係無きもの

1. 言語活動以外の隣接領域に起つた變化の影響

II. 身體的又は精神的素質の變化

以下、その各について説明を加へることとしよう。

三

音韻變化が次第に發音を容易ならしめる方向へ進むことは、最も普遍的な傾向として、早くから學者の注意を惹いてゐる所である。併し、これに對しては、懷疑的な見方をする學者も無いではない。

例へば、E. Sievers は曰く、「すべての音韻變化は發音の容易化を目ざしての努力から起るものであるといふこと、換言すれば、音韻變化は常に力の減少(音の弱まり)に基くものであり、決して力の増大(音の強まり)に基くものではないといふことは、今日でもなほ非常に人氣ある見解である。多數の言語史的現象がこの『弱まり』の標題の下に收められ得ることは認められるが、併し、主張されるやうな一般的問題としての話とすれば、この見解は斷じて誤である。その缺陷は、音韻發展のさまざまな歴史的に證せられた方向を、ほんのちよつとでも眺めれば、明かになることである。例へばラテン語 *patrem* に對するイタリア語 *padre* の如く、本來の *Tenuis* が *Media* に變じたこと、即ち *Fortis* が *Lenis* になつたことや、又、例へば之に相當するプロヴァンス語 *paire* フランス語 *père* の如く、此の *Lenis* が更に全く消失したことの如きは、確かに『弱まり』といふことが出来る。併し、例へばゲルマン語の領域には、これとちやうど正反對の發展系列が存在する。ここでは、*ddj* が單純な *j* から生じてゐる(例へばゴート語 *twaddjē* が **twaijē* から出てゐること等)し、すべて本來の *Media* は *Tenuis* 又は *Affricata* に變じてゐる(例へばギリシ語 *δέξα* ラテン語 *decem* に對するゴート語 *taihun* 古代高地ドイツ語 *zēhan* の如く)。これは、母音の領域についても同様である。同一言語が(たとひ年代の異なるものはあるにもせよ)、例へば二重母音を長母音に單純化することと本來の單純母音を二重母音化することとを同時に示してゐる例(ゴート語 *mais*, *laun* に對する古代高地ドイツ語 *mēr*, *lōn* と、ゴート語 *hēr*; *fōr*

に對する古代高地ドイツ語 *hiar*, *fuor* との如き；或は、ラテン語 *aurum* に對するイタリア語 *oro* と、ラテン語 *bonum*, *Petrum* に對するイタリア語 *buono*, *Pietro* との如き、等)はかなり多い。デンマルク語の如き言語は、この點に於て殊に興味ある現象を示してゐる。即ち、デンマルク語は、語頭の *Tenuis* を非常に強い *Aspiration* を以て發するが、之に反して、語中及び語尾では、母音の後に於て、*Tenuis* をごく弱い *Spirant* に變じ、或は全然消失させてしまふ。^(註 1)」と。

併しながら、*Sievers* の此の見方は、餘りに變化の結果にのみ拘はれ過ぎてゐる嫌が無いではない。同氏は、もし二重母音の單純母音化が勞力の輕減ならば、單純母音の二重母音化は必ず勞力の増大でなければならない、といふ風に考へるのであるが、事實は必ずしもさうではない。兩者共に勞力の輕減を意味することが可能なのである。

例へば、ラテン語の *aurum* がイタリア語の *oro* に變化したことは、*a* と *u* との相互同化の結果であり、無論勞力の輕減であるが、同様に、*bonum*, *Petrum* が *buono*, *Pietro* に變化したこともやはり勞力の輕減である。即ち、卑俗ラテン語の *(bɔ:no)* *(pɛ:tro)* を發音するに當り、最初から口を大きく開いて *[bɔ:no]* *[pɛ:tro]* と發音するよりは、徐々に口を開いて *[boɔno]* *[pestro]* と發音する方が寧ろ樂である。それ故、*[oo]* *[ee]* のやうな發音が漸次廣く行はれるやうになつた。これがそもそも二重母音化の發端であつたと考へられる。さればこそ、二重母音化は、閉音 (*e:*) (*o:*) の場合には起らず、ただ開音 (*e:*) (*ɔ:*) の場合にのみ起つたのである。

次に、原始ゲルマン語の **ai*, **au* が古代高地ドイツ語の *ē*, *ō* に變化したことは、二つの母音要素の相互同化によるものであり、無論勞力の輕減であるが、原始ゲルマン語の **ē*, **ō* が古代高地ドイツ語の *ia*, *uo* に變化したことも、少くとも二重母音化の發端に於ては、やはり勞力の輕減を

意味するものである。原始ゲルマン語の *ē, *ō の系統に屬する音韻を表す古代高地ドイツ語の綴字は、e → ea → ia → ie, o → oa → ua → uo といふ順序で變遷を示してゐる。^(註 2) さて、原始ゲルマン語の *ai, *au の系統に屬する音韻も、古代高地ドイツ語ではやはり e, o と綴られてゐるが、^(註 3) これらは、少くとも最初の間は、現代フランス語に於ける père, cor の è (ē:) o (ō:) のやうな開音であつたらう。之に對して、原始ゲルマン語の *ē, *ō から出た古代高地ドイツ語初期の e, o は、現代ドイツ語に於ける See, so の ee (ē:) o (ō:) のやうな閉ぢた緊張した母音であつたことと思はれる。然るに、ゲルマン語の常として、長母音に於ては強音は常にその初の部分に置かれる。その結果、時を経るにつれ、(ē:) (ō:) の末尾の部分が弛緩して (èè) (òò) となり、(ea) (oa) となつた。これがそもそも二重母音化の發端であつて、^(註 4) 明かに勞力の輕減を意味してゐる。

事情は一つ一つの場合によつてそれぞれ相違してゐる。それ故、「二重母音の長母音化が勞力輕減を意味するものならば、長母音の二重母音化は必ず勞力増大を意味するものでなければならない。」などといふ風に簡単に片付け得るものではない。

* * *

音韻變化に於ては、單に窮極の結果だけから見れば勞力の増大のやうに見えるものでも、その過程を細かく分析して見る時は、結局は漸次勞力の輕減を求めて變化して行つたものである場合が多い。F. de Saussure も言つてゐる。「k が ts になつた場合(ラテン語 cedere → イタリア語 cedere を参考せよ)、變化の兩端の項のみを考へる時には、勞力の増大があつた様に思はれる。けれども連鎖を丹念に作つてみるならば、恐らく別の印象を得るに違ひない。即ち、k は後行母音に同化して口蓋的 k' と成り、次いで k' が ky に移つた。併し發音法は一向難しく成らない。k' に絡んだ二要素がきつぱり分化したから。次いで ky から順次に ty, tχ',

tš と成り、努力は却つて益々減少する。」と。^(註 5)

蓋し、音韻變化に於て働く勞力輕減の欲求は、決して理性的な計畫によるものではなく、言はば本能的なものである。それは、遠い先々に於て結果すべき難易状態を豫想するものではなく、ただ目先の安易さを求めて動くものに過ぎない。例へば、中世フランス語の *roi* (*roi*) が *(roē)* に變化したのは、*(oi)* の *i* 要素に於ける舌面隆起の努力を節約したものである。併し、その結果として生じた二重母音 *(oē)* は、從屬的要素の方が主的要素よりも開いてゐるといふ、甚だ不自然なものであつた。そこで、音節構造上の安定を得るためには、どうしても更に *(roē)* *(rwe)* の方向へ變化せざるを得なかつたのである。^(註 6)

O. Jespersen も言つてゐる。「或一點から見て發音の容易化であるものが、他の點からは却つて發音に或困難を齎し得ることも、稀ではない。例へば、弱い母音の分節をやめた結果として、屢子音の累積を生じ得ること、或は、非口蓋的子音を *[i]* 又は *[j]* と結合する代りにそれを口蓋化するこ^(註 7)と、等を考ふべきである。この事實は、併し、『安易の原理』(Bequemlichkeitsprinzip) が此處にも認められるといふことを、何ら妨げるものではない。何故なら、人は、たとひその最短路がかなり不安易なものであるといふことが後から示されるやうな場合でさへ、その目的に一層安易に到達するためには最短路を採るものであるから。」^(註 8)

*

*

*

音韻變化に於て、甲音と乙音とのいづれが發音容易であるかは、その場合々々の條件に應じて變るものである。例へば、無聲破裂音 *k* は、普通一般の場合には、無聲摩擦音 *χ* に比して、發音に一層大なる勞力を要すること、疑が無い。併し、條件の如何によつては、*k* は却つて *χ* よりも發音容易となる。

例へば、ドイツ語 *Fuchs*, *Luchs*, *Dachs*, *wachsen*, *sechs*, *Büchse* 等

に現れる *chs* は、原始ゲルマン語の音韻群 * χs から出たものである。この χs は、高地アレマン方言 (Hochalemannisch) では今日も保存されてゐる。併し、低地ドイツ方言 (Niederdeutsch) 及び西方中部ドイツ方言 (Westmitteldeutsch) の大部分では、*ss* 又は *s* に變化してゐる。例へば、低地ドイツ方言に於ける *wassen* (*wachsen*), *wüs* (*wuchs*), *Das* (*Dachs*), *Fos* (*Fuchs*), *Osse* (*Ochse*) 等や、上部ヘッセン方言 (Oberhessisch) に於ける *wisst* (*wächst*), *wesse* (*wechseln*), *Deisel* (*Deichsel*), *Nolebesse* (*Nadelbüchse*), *kräst* (*krächst*) 等の如く。之に對して、南部ブランデンブルク方言 (Südbrandenburgisch)・ビンネンフランク方言 (Binnenfränkisch)・プファルツ方言 (Pfälzisch)・テューリングン方言 (Thüringisch)・東方中部ドイツ方言 (Ostmitteldeutsch), 及び上部ドイツ方言 (Oberdeutsch) の大部分では、標準語 (Schriftsprache) に於けると同様、古代の χs は *ks* に變化してゐる。^(註 9) これらの諸變化中、 $\chi s \rightarrow ss \rightarrow s$ が勞力の輕減を意味することは、何人にも疑ふ餘地が無い。併し、さらば $\chi s \rightarrow ks$ の方は勞力の増大であるか、といふと、決してさうではない。これもやはり勞力の輕減なのである。そもそも、音韻群 *ks* を發音する場合には、*s* に於ける舌葉 (Zungenblatt) 部の狹路は、*k* の閉鎖のうちに既に作つておくことが出来る。故に、*k* から *s* への移行は、ごく自然に滑かに行はれる。之に反して、 χs の場合には、 χ が閉鎖音でないため、*s* の狹路を χ の調音中に豫め作つておくことが出来ない。従つて、 χ の發音の完了した後に、舌を前進させて *s* の狹路を作る、といふ風にしなければならない。ここに於て、*k* から *s* への移行がごく容易且自然に行はれるのに對し、 χ から *s* への移行は、相當困難であり、且不自然なものである。故に、 $\chi s \rightarrow ks$ の變化は、勞力の増大ではなくて、明かに勞力の減少を意味してゐる。即ち、かかる條件の下に於ては、一般の原則に反し、*k* は χ よりも發音し易いのである。^(註 10)

*

*

*

原始セム語の《θ》は、アラム語では《t》に變つてゐる。^(註 11)又、原始ゲルマン語の《θ》は、デンマルク語・スウェーデン語及びアイルランド英語等では《t》に變化してゐる。これらの場合、筋肉活動の勞力は明かに増大して居り、發音容易化の一般的傾向に反するが如くであるが、H. Sweet に據れば、これ實は心的怠惰の結果である。即ち、舌と上顎との間に適當な距離を保つ^(註 12)の勞を省いたものである。

《θ》は、《s》の直後では殊に發音しにくい音である。かやうに極めて相近い位置で作られながら而も性質の違ふ二つの摩擦音を、相續けて而も正確に發音し分けるためには、發音器官の調節に非常に細かい注意を要すること勿論である。さて、《θ》を發する際には舌尖が齒に強く接近するが、その接近運動を今一步進めて完全に閉鎖してしまへば《t》となる。《st》は、心理的には《sθ》よりも遙かに發音容易である。そこで、古代英語の *nospyrl* (nosu 鼻 + pyrel 孔) 中世英語の *nosethirl* は近代英語の *nostril* に變じ、古代英語の (pȳ) læs þe は中世・近代英語の *lest* に變じたのである。^(註 13)

之を要するに、發音の難易は、ただに筋肉活動の勞力の大小からのみ論ぜらるべきものではない。Saussure も言つてゐる通り、生理的視點(分節の問題)と心理的視點(注意の問題)との雙方から考察する必要がある。^(註 14)以下、この問題について、今少し考へて見たいと思ふ。

いつれの言語に於ても、《c》《j》は不安定な音韻で、容易に《cc》《jj》; 《ts》《dʒ》類の Affricata に變じてしまふ。この種の變化は、原始インドイラン語にも、原始スラヴ語にも、古代ロマンス諸言語にも、古代英語にも、アラビア語諸方言にも、近代支那語にも、近代琉球語にも起つてゐる。元來、《c》《j》は、發音に要する筋肉活動の勞力から言へば、特に多量を要するといふわけではない。併し、硬口蓋前部の閉鎖が除去される瞬間に

は、強烈な息が自然と齒縁に當るので、どうしてもその發音が Affricata 的になり易い。《c》《f》を正確に發音することの困難は、ここに存する。その困難は、これらが《cc》《ff》又は《tʃ》《dʒ》に變化してしまった曉には取除かれる。故に、この變化は明かに發音の容易化である。但し、その容易化は、筋肉活動上の勞力輕減よりは、寧ろ注意緊張の必要の輕減に存するのである。

次に、舌尖振動音 r を發するためには、相當に強い息を舌尖に吹きつけることが必要であり、そのためには、振動を起すに先立ち、豫め鼻腔への通路を閉鎖して、息を口腔に集中することが必要である。それ故、《mr》《nr》のやうな「鼻音韻プラス r」を完全に [mr] [nr] の形で實現することは極めて難事であり、餘程よく注意しないと [mbr] [ndr] のやうな形になつてしまふ。(英語のスコットランド方言では、《r》は一般には振動音に發音される。併し、Henry (henri) のやうな場合に《n》の後で強い振動音を用ゐる時は《hendri》と聞え易いので、かやうな場合には《r》を摩擦音 [ɹ] に發音する人が相當多いといふ。^(註 15)) 然るに、かかる發音上の困難は、《mr》《nr》が《mbr》《ndr》に變化した曉には除去されてしまふ。この種の音韻變化は、各國語にその例が甚だ多い。例へば、ラテン語の numerum, generum は、フランス語の nombre, gendre に變つた。原始ゲルマン語形 *temro (ゴート語の動詞形 timrjan) から、古代ノルド語 timbr 古代英語 timber 古代ザクセン語 timbar 古代高地ドイツ語 zimbar が出た。古代英語の punor (Gen. punres) から、中世英語 punder 近代英語 thunder が出た。古代ギリシヤ語の *μεσημυρία (μέσος+ἡμέρα) は μεσημβρία に變じ、*ανρ-ος (ἀνῆρ の Gen. 形) は ἀνδρός に變じたのである。この種の變化は、無論發音の容易化であるが、その容易化たる所以は、筋肉活動の勞力輕減よりは、寧ろ注意緊張の必要の輕減に存するのである。

*

*

*

以上の場合と同じく心理作用に關係するとは言ひながら、これらと趣を異にするものに、所謂精神物理的現象たるリズムの問題がある。W. Wundt^(註 16)の言ふが如くば、生活體は元來リズム的の素質を持つてゐるものである。さらば、自然なリズム的傾向に反抗して行爲するよりは、リズムの波に乗つて行爲する方が(生理的にも心理的にも)樂であることは、言ふまでもない。さて、發音運動に於ける筋肉張緩のリズムは、小にしては音節の構造に關係し、大にしては語句のアクセント (Druck) に關係する。

そもそも、音節は分節リズムの單位であつて、之を聽覺的方面から見れば Sonorität の増減に基き、之を發音運動の方面から見れば筋肉の張緩に^(註 17)基く。發音に要する張力 (Grammont の所謂 “tension”) の大小は、各音に固有の調音法に應じてそれぞれ異なつてゐる。Sonorität についても亦同様である。例へば、[i] は [e] よりも性來 Sonorität が少く、發音に要する張力も亦少い。併し、わざと特に大なる張力を以て強く發音するならば、[i] にも [e] より大なる張力と Sonorität とを與へることが出来る。例へば、中世高地ドイツ語の ie (ie) に於ては、i はわざと特に大なる張力を以て發音され、e を壓倒して「母音點」(“point vocalique”) となつてゐたものである。併し、性來、i は e よりも自然的張力並に自然的 Sonorität に於て劣つてゐるので、i を中心として e を從屬させるためには、(生理的にも心理的にも)特別な努力を要する。それよりは、音韻の中心を、張力及び Sonorität の自然的中心に一致させる方が、遙かに樂である。それ故、發音容易化の欲求は、つひに「母音點」の移動を來し、(ie) は (je:) に變化するに至つた。現今、この (je:) は je と綴られてゐる。^(註 18)この變化については、現に英語の hear の發音が [hiə] [hje:] の間を動搖してゐる事實を思ひ合すべきである。

以上は同一音節の中で起つた「母音點」の位置の移動の例であるが、二つの音節が相融合して一つの音節を作る際にも、「母音點」の位置は、自

然的張力(從つて Sonorität)の一層大きい方の母音要素に歸する傾向がある。例へば、古代フランス語の *reïne*, *guaïne*, *haïne* は三音節語であつて、強音はいづれも *i* に置かれてゐた。然るに、その後第一音節と第二音節とが相融合して *ei*, *ai* の二重母音を作つた時には、*e*, *a* はその自然的張力(及び Sonorität)の優越によつて「母音點」を得、*i* は從屬的地位に貶せられた。後世、この *ei*, *ai* は變じて單純母音 *e* となり、現今の *reïne*, *gaïne*, *haïne* を生ずるに至つたのである。^(註 19) ラテン語からロマンス諸言語への發達の途上には、この種の現象は甚だ多かつた。^(註 20) 例へば、ラテン語 *filíolum* が、イタリア語 *figliuólo* 古代プロヴァンス語 *filhól* 古代フランス語 *filluél* (現代の *fil-leul*) スペイン語 *hijuólo* に發達してゐるが如き。^(註 21)

語に於ける強音の位置が音韻論的に固定されてゐない現代フランス語では、語句の發音に際し、各音節の強弱がリズムの關係から決定される傾向が甚だ強い。但し、習慣上、各句 (P. Passy の所謂 “*groupe de force*”) の最終の音節 (*a* を含むものを除く) は強く發音されることが普通であるから、例へば、*l'ami de Pierre* [*la-mid-pjɛ:r*] の場合には *l'ami* の第一音節を第二音節よりも稍強く發音し、之に反して、*l'ami d'Alfred* [*la-mi-dal-fred*] の場合には *l'ami* の第二音節を第一音節よりも強く發音することにより、音節を強弱交互ならしめようとする傾向がある。^(註 22)

英語に於ても、若干の語は、例へば *He couldn't speak Chinese—a Chinese mán*; *Just fiftéen—fifteen yéars* のやうに、強音の位置がリズムの關係で移動する。*eleven* の如きも、中世英語では、*éleven* と *eléven* との間を動搖してゐた。現代英語に於ける唯一の形 *eléven* は、多分 *eléven mén* のやうな場合、又は *tén*, *eléven*, *twélve* と數へる場合の形から出たものであらうといふ。^(註 23) なほ、*combíne* に對する *còmbinácion*. *exhibit* に對する *èxhibítion* のやうな場合、副アクセント (Nebendruck)

は、本来リズムの関係から生じたものであること、言ふまでもない。

(註 24)
 卑俗ラテン語からフランス語への發達途上に起つた母音脱落現象も、多くは發音のリズムに關係を有し、往時強音節の直前直後の音節(語頭ならざるもの)が特に弱く發音されたことを示してゐる。左記の諸例は、A. Darmesteter が「第五——第十世紀の Gaul に於ける卑俗ラテン語の發音」(註 25)といふ章の中に記してゐるものである。

cálámum	→ calmum
cólāphum	→ colphum
*érēmum (古典形 erēmum)	→ ermun
cáměra	→ camra
cálidum	→ caldum
móbilem	→ moblem
cóllōcat	→ colcat
sábūlum	→ sablum
tábūla	→ tabla

又

cerě-béllum	→ cer-vel, cerveau
blasphē-máre	→ blas-mer, blâmer
bonī-tátem	→ bon-tet, bonté
dormī-tórium	→ dor-toir
collō-cáre	→ col-chier, couchier, coucher
*taxō-nária	→ tais-nière, tanière
*tremŭ-láre	→ trembler
matū-tinum	→ *mattin, matin

次に、卑俗ラテン語に於ては、すべて開音節の短母音は長母音に變じ、閉音節の長母音は短母音に變じた。例へば、古典的ラテン語の短母音 ě は、

fēr-rum (イタリア語 *fërro*), cēr-tum (イタリア語 *cërto*) のやうな閉音節では保存されたが, dē-cem (イタリア語 *diēci*), pē-trum (イタリア語 *piētro*) のやうな開音節では長母音に變じた。又, 古典的ラテン語の長母音 *i* は, fi-nem (イタリア語 *fine*), di-co (イタリア語 *dico*) のやうな開音節では保存されたが, vil-la (イタリア語 *villa*), scrip-tum (イタリア語 *scritto*) のやうな閉音節では短母音に變じた。これは, 言ふまでもなく, リズムの關係から, 各音節の主觀的長さを均等化しようとする傾向の現れである。^(註 26)

中世高地ドイツ語から近代高地ドイツ語への過渡期に起つた母音伸長 (Vokaldehnung) 及び母音短縮 (Vokalverkürzung) は, その發生條件が稍複雑であり, 未だ不明確の點も無いではないが, H. Paul に據れば大體に於てやはり音節の長さの均等化への傾向 (Tendenz zur Ausgleichung der Silbenquantität) を現してゐるものであるといふ。^(註 27) 即ち, 短母音の伸長は主として開音節に於て起り, 長母音の短縮は主として閉音節に於て (殊に子音群の前で) 起つてゐる。但し, 以上は標準語 (所謂 Schriftsprache) についての話であるが, 他の高地ドイツ諸方言の状態は必ずしもこれと等しくない。

例へば, 東部スウイス (Ostschweiz) では, 古代ドイツ語の短母音は, 複音節語の場合には, lēdig, zēni (= *zehn*), Häber (= *Hafer*), bāne (= *bahnen*), Bible (= *Bibel*), böre (= *bohren*), Stübe のやうに, 開音節にも保存されてゐる。之に反して, 本來の單音節語の場合には, 閉音節に於てさへ母音の伸長されてゐることがある。即ち, 單一な軟子音 (weicher Konsonant) の前に立つ母音が, Hōf, Glās, Tōr のやうに長くなつてゐるのである。又, 東部シュヴァーベン方言 (Ostschwäbisch)・バイエルン方言 (Bayrisch)・東部フランク方言 (Ostfränkisch)・南西部テューリングン方言 (Südwestthüringisch)・シュレズィエン方言 (Schlesisch) 等では, 子音群で終つてゐた

本來の單音節語の母音が伸長されてゐる。例へば、パイエルン方言に於ける Kôpf (=Kopf), Grif (=Griff), Trütz (=Trotz), Tisch (=Tisch) 等の如く。然るに、同じ語根から出た本來の複音節語に於ては、短母音が保存されてゐる。例へば、Trütz——trützeg ; Tisch (=Tisch 單數)——Tisch^(註 28) (=Tische 複數)等の如く。

之を要するに、右の諸方言では、單音節語の母音を伸長する傾向が甚だ顯著である。この事實は、疑も無く、語句のアクセント (Druck) が構成するリズムの要求に應じて、語の長さを均等化しようとする傾向の現れである。例へば、Sievers に據れば、同じドイツ語の長母音の中でも、heilig, tote の母音を „einfach lang” とすれば、heil, tot の母音は „überlang”^(註 29) であり、heilige, tötete の母音は „unterlang” であるといふ。而して、この見解は、E. A. Meyer により、實驗的にも既に證明されてゐる。即ち、「期待される通り、單音節語の母音は、その他の關係がすべて相等しい場合には、二音節語の母音よりも常にいくらか長い。」^(註 30) のである。

英語についても、D. Jones が同様の觀察をなしてゐる。例へば、'eiti:n-
'nainti:n'twenti (eighteen, nineteen, twenty) と唱へる場合の ai は、
'eit'nain'ten (eight, nine, ten) と唱へる場合の ai 程には長くない。又、
wi:l'sta:ti'mi:djətliifjuə'redi (we will start immediately if you are
ready) の中の二音節 'sta:ti は、長さには五音節 'mi:djətliifjuə に^(註 31)
匹敵するものである。

かやうに、發音を容易ならしめる欲求は、音韻變化の原因としては、最も廣い範圍にわつて現れて來るものであるが、併し必ずしもこれが音韻變化の原因の全部ではない。

- 註 (1) E. Sievers: Grundzüge der Phonetik, 4. Aufl., 1893, S. 244 f.
- (2) H. Naumann: Althochdeutsche Grammatik, 2. Aufl., 1923, S. 23 f., 127, 141, 142 u. 155.
- (3) 但し、かやうに長母音化したのは、*ai 系統の音韻については *χ の前に来る場合、*au 系統の音韻については *χ 及び歯音の前に来る場合に限る。これらは、最古の遺文には ae, ao と綴つた例もある。Naumann 前掲書 (註 2) S. 24, 25, 126, 142 f. u. 155 参照。
- (4) かくして發生した二重母音 ea (ea) oa (oa) が、更に ia (ia) ua (ua) となり、ie (ie) uo (uo) となつた過程の總體が、果して勞力輕減一點張りで説明し盡されるものかどうか、そこまでは今問題とする所ではない。ここでは、ただ、此の二重母音化現象の發端が勞力輕減の欲求から起つたものである事實を示し、二重母音化が勞力輕減の欲求からも起り得ることを示せば足るのである。(古代高地ドイツ語の uo (uo) は、中世には (u:) となり、從つて u と綴られるやうになつた。古代高地ドイツ語の ie (ie) は、中世には未だ保存されてゐた。現今では、音は (i:) に變つてゐるけれども、綴は ie のままである。)
- なほ、右と類似の音韻變化は、低地ドイツ諸方言にも起つてゐる。就中、オランダ語に關する Jan te Winkel の左の記述は、變化の過程を考へる上に參考となることが多い。「西部ゲルマン語の長音 o は、中世オランダ語では既に二重母音化されてゐた。例へば古代北部フリジア方言に於ける uo の如く。oe といふ綴は一層一般的であつた。これは恐らく、閉ぢた o の後に後續音(Nachklang)を伴つたものを示してゐるのであらう。西部フラマン人は、唇音及び喉音の前では ou と書いた。それ故、多分、閉ぢた o の後に u 類の後續音を伴つて發音されたものと思はれる。ブラバント人及びリンプルク人は ue と綴つた。即ち、u (高地ドイツ語の u の音)の後に後續音を伴つてゐたものであらう。近代オランダ語では、ue は單純母音化されて u (高地ドイツ語の u の音)となつた。併し、oe の綴は依然として保存されて、今日ではそれが唯一のものとなつてゐる。」(Grundriss der germanischen Philologie, herausgegeben von H. Paul, 1891 所收 Geschichte der niederländischen Sprachen, S. 652.)
- (5) F. de Saussure: Cours de linguistique générale, 2. éd., 1922, p. 205. 譯文は小林英夫氏譯「音語學原論」(昭和三年) 302—303 頁に據る。
- (6) W. Meyer-Lübke: Historische Grammatik der französischen Sprache, I, 4 und 5. durchgesehene Auflage, 1934, S. 80.
- O. Jespersen: Lehrbuch der Phonetik, 3. Aufl., 1920, S. 197.
- (7) これは、例へば、スラヴ諸言語に於て、p, b, m, r 等の子音が、後續する i, j 類の要素によつて口蓋化された結果、(p') (b') (m') (r') 等のやうな、構造の複雑な、發音の面倒な音を生じてゐるやうな類の事實を指してゐるのであらう。

- (8) O. Jespersen: Zur Lautgesetzfrage, 1904 (Phonetische Grundfragen, 1904 所収), S. 181.
- (9) H. Reis: Die deutschen Mundarten, 2. Aufl., 1920, S. 57 f.
 但し, machst, höchst のやうな場合には, 標準語では現今 ch と s とが別々に發音される。既にストラスブルクの人 Oelinger (その著書は 1574 年に成つた)は, wachs 等が waks 等の如く讀まれ, 従つて des tachs, des bachs, machs gut 等の場合の chs とは發音が相違する由を述べてゐるといふ。併し, 現今, 方言によつては, hökste (höchste), näkste (nächste) のやうに言ふ所もある。(H. Paul: Deutsche Grammatik, Bd. I, 1916, S. 308 参照)。
- (10) 原始ゲルマン語の *χs は, 英語では早くから ks (x と綴られる)に變化してゐた。もつとも, 現代諸方言の中には neist (next) ausn, ousn (oxen) のやうな形も存在するが, それは個別的の問題に過ぎず, これらは ks の k が後世消失した結果と見られ得るものである (Wright)。古代ノルド語では, 長母音と s との間に挟まれた χ は早く消失してしまひ, その他の場合, *χs はやはり ks に變化した。オランダ語は, 低地ドイツ語の一部として, 原始ゲルマン語の *χs を ss, s に變化させてゐる。この變化は, 古代ザクセン語 (Altsächsisch) 末期から既に起つてゐたことである。
- (11) C. Brockelmann: Semitische Sprachwissenschaft, 2. Aufl., 1916, S. 64. 原始セム語 (Ursemitisch) の *p は, 古代アラビア語 (Altarabisch) の p, エチオピア語 (Äthiopisch) の s, ヘブライ語 (Hebräisch)・アカド語 (Akkadisch) の š, アラム語 (Aramäisch) の t に對應するもの。之に對し, て, 原始セム語の *t は, これら諸言語の t に對應するものである。
- (12) H. Sweet: The History of Language, 5. ed., 1920, p. 30.
- (13) pȳ (=for the reason) lās (=less) pe (=that, rel. pron.)
- (14) Saussure 前掲書 (註 5) p. 205.
- (15) W. Grant: The Pronunciation of English in Scotland, 1914, p. 43.
- (16) 「我々の意識は元來律動的の素質を持つてゐるものである。しかし, 斯んな風になるといふことは, 單に意識のみに固有な特質が其原因になつて居るのではなくして, 寧ろ我々の精神物理的組織の全體と密接な關係を持つて居るものである。意識が律動的に組立てられて居るのは, 生活體が一般に律動的の組立を持つて居るからである。例へば心臓の運動, 呼吸の運動, 歩行の運動, 皆それぞれ正しい律動に従つて居るのである。」(Einführung in die Psychologie, 1911, S. 3 f. ^{リトムス}譯文は速水泥博士譯「^{ヴン}心理學要領」(昭和六年第十版)6—7 頁に據り, 卑見を以て多少の改訂を加へた。)
- (17) 「音韻體系」第八章參照。
- (18) Paul 前掲書 (註 9) S. 314 f.
- (19) Meyer-Lübke 前掲書 (註 6) S. 115 f.

- (20) A. Zauner: Romanische Sprachwissenschaft, I, 4. Aufl., 1921, S. 78.
- (21) この種の變化一般については, なほ Jespersen 前掲書 (註 6) S. 196 f. を参照せられたし。
- (22) P. Passy: Les sons du français, 10. éd., 1925, pp. 52—53.
- (23) O. Jespersen: A Modern English Grammar, Part I, 3. ed., 1922, p. 158.
- (24) 卑俗ラテン語のアクセントのリズム性については, C. H. Grandgent: Introduction to Vulgar Latin, 1907, pp. 66—67 を参照せられたし。
- (25) A. Darmesteter: Cours de grammaire historique de la langue française, première partie, 11. éd., pp. 92—93 et 96.
- (26) Grandgent 前掲書 (註 24) pp. 75—77 参照。
- (27) Paul 前掲書 (註 9) S. 160 u. 169.
- (28) Reis 前掲書 (註 9) S. 60 ff. Kopf, Griff, Trotz 等の末尾の子音音韻が古く二重音 (Geminat) であつたことについては, Paul 前掲書 (註 9) S. 285, 277 u. 339 を参照せられたし。なほ, Tisch は古代高地ドイツ語 tisc (sc は sk の音) から出てゐる。
- (29) Sievers 前掲書 (註 1) S. 277.
- (30) E. A. Meyer: Zur vokaldauer im deutschen (Nordiska Studier tillegnade Adolf Noreen på hans 50-årsdag d. 13 Mars 1904 af Studiekamrater och Lärjungar), S. 352.
- (31) D. Jones: An Outline of English Phonetics, 2. ed., 1922, pp. 106—107.

四

記憶の負擔を軽減する欲求は、音韻體系の成立に重大な關係を持つものであり、その働きの概略は、既に「音韻體系」第一章に述べた所であるから、此處では繰り返すことを避ける。

さて、發音を容易ならしめる欲求と、記憶の負擔を軽減する欲求とは、相表裏して働くものである。もし前者のみにして後者無くば、音韻體系は非常な混亂に陥り、つひにはその用をなさなくなるに至るであらう。

第一、發音を容易ならしめる欲求から、音韻の分化は頻りに起りつつあるのであるが、一方、記憶の負擔を軽減する欲求から、語義の相違を區別して表すに重要ならざる音韻上の區別は、機會ある毎に廢棄せられ、音韻の併合が行はれて行く。それ故、同一言語の所有する音韻の總數は、無限に増加して使用者を困らせるやうなことは無いのである。

第二、音韻の横の體系を織り成す所の、音韻相互の連帶關係は、發音を容易ならしめる欲求から、屢破壊される。もしかゝる破壊作用のみが繰返し起るならば、音韻體系は遠からずして支離滅裂に陥る筈であるが、一方では、記憶經濟の欲求から新しい連帶關係が絶えず結成されて行くので、危惧されるやうな大混亂は未然に防止される。例へば、スラヴ諸言語の一部では、原始スラヴ語の g が(發音容易化の欲求から)摩擦音韻 γ に變じた結果、本來存在した所の $k:g$ の連帶關係が破壊された。併しながら、新に生じた音韻 γ は、(記憶經濟の欲求から)他の音韻 χ との間に連帶關係 $\chi:\gamma$ を結成したので、 γ は孤立せず、體系は新しい形で再建されることとなつたのである。^(註1)

さて、音韻の横の體系を作るものは、既述の通り記憶經濟の欲求であるが、之に對して、音韻の縦の體系を作る諸法則は、主として^(註2)發音容易化の欲求から生じてゐる。例へば、現代北京官話では、(i) は (ts) (ts')

《s》の直後には立つことが出来ないものであるが、この法則は、近代支那語に於て、(i)の直前の(ʈs) (ʈs') (s)が、發音容易化の欲求により、(i)の口蓋性に順應して、すべて(çç) (çç') (ç)に變じたことから生じたものである。それ故、發音容易化の欲求は、音韻の横の體系に對しては寧ろ破壊的な影響を及すが、音韻の縦の體系の成立に對しては立派に建設的な役割を演ずるのである。

發音を容易ならしめる欲求及び記憶の負擔を輕減する欲求は、何れも表現手段を簡易ならしめる欲求に屬するものであるが、表現手段の簡易化は、^(註3)勿論、(部分的な例外を除き)一般に言語行為の目的たる表現の有效性を損ぜざる範圍内で實現されるものである。例へば、發音容易化や記憶經濟の欲求に基く諸變化は、概して、必要な意義の區別を不可能ならしめない範圍内に於て起る。^(註4)又、語形の自己統一の意識が音韻變化の進行過程に影響することは周知の事實であつて、發音容易化や記憶經濟の欲求に基く諸傾向も、語の中での位置の相違に應じ、種々その實現される程度や方向を異にするやうになる。それらの諸點に於て、表現手段簡易化の諸欲求は、以下に述ぶべき表現手段有効化の諸欲求と交渉を持つこととなるのである。

註 (1) R. Jakobson: Prinzipien der historischen Phonologie (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 4, 1931), S. 255 f., Beisp. 22. u. 26.

(2) もつとも、音韻の縦の體系を作る諸法則の、必ずしも全部が發音容易化の欲求のみから生じてゐるわけではない。例へば次章に述ぶべき發音明晰化の欲求等から生じてゐる場合もある。

(3) 言語地理學者によつて屢引用される有名な例がある。即ち、フランス南部地方に於ては、雄鶏と猫とは、各ラテン語の gallus 及び cattus の系統を引く語によつて表されてゐるのであるが、Gascogne 地方では、この二つの語は、音韻法則上當然の歸結として、共に gat といふ形になつた。然るに、等しく家に飼はれる動物の中で、雄鶏と猫との二つが同じ名で呼ばれることは甚だ不便なので、この二つの gat の中、猫を表す gat のみが保存せられ、雄鶏を表す gat は廢れて faisan (雉) 又は vicair (助祭)のやうな語が之に代るやうになつた。この場合、例へば雄鶏を vicair といふ語で表すことは、語末の ll が t と同音化するより以前から既に存したものであるかも知れず、或

は同音化以後に生じたことであるかも知れないが、その點は今は問題としない。兎に角、何れにしても、同音化の起つた當初に於て、雄鶏の *gat* と猫の *gat* とが、たとひ暫時にもせよ、同時に使用されて、屢聽手を困惑させたことは勿論である。即ち、この場合には、一の意義を他の意義から區別して表す音韻體系の機能が、音韻變化の結果部分的に破壊されたわけである。但し、その結果生じた缺陷は、勿論、他の語の充用によつて容易に補はれ得る程度のものであつた。

- (4) 音韻變化や新語借入の結果として同音語 (Homonym) を生ずることは、必ずしも常に、必要な意義の區別を不可能ならしめるものとは限らない。「衝突が起る爲には、先づ此の二箇の同音語の意味が絶對的に相容れないものでなければならない。他方から云へば、一語彙は、多少共類縁のある幾つかの意味を持つても少しも差支へないものである。一語の多義性は、一言語にとつて邪魔なものではないからである。次に、衝突が起る爲には、二箇の同音語の意味は同一範疇のものでなければならない。又語の使用頻度が少ければ少い程、衝突の危険は少い。それ故羊の内臓寄生蟲の名稱 *douve* (ラテン語 *dolva* [肝蛭] から由來) の様に稀に使用される語は、城の堀を指す *douve* (ラテン語 *doga* から由來) と衝突する危険性は決してない。フランス語には此種の同音語は多いのであるが、例へば *chant* [歌] と *champ* [田] の様な抽象語と具象語間の同音、*le somme* (睡眠) と *la somme* (金額) の様に文法上の性が異なる二語の同音、更にもつと種類の異なる *faux* [偽りの] と *faulx* [鎌] の様な形容詞と名詞との同音の爲に困らされた事は決してなかつた様である。」(A. Dauzat: *La géographie linguistique*, 1922, p. 69. 譯文は松原秀治氏譯「言語地理學」(昭和十三年) 77 頁に據つた。)

又、B. Trnka に據れば、同音語の存在がどの程度まで許容されるかは、各言語に於ける語の、文の中での意義的獨立性の程度如何に關係を持つてゐる。例へば、英語では、或一語を作つてゐる音韻連鎖の意義は、その文の中の他の分肢に依存する所が甚だ大である。之に比すれば、チェク語に於ては、語を作つてゐる音韻連鎖の意義は、それだけ單獨に切離されても、既に比較的に決定されてゐる。そこで、言語心理上の習慣から、英語使用者に於ては、同一の音韻連鎖を、文の中で種々異なる意義に結びつけることが、容易に出来るので、同音語の存在が餘り苦にならない。之に反して、チェク語の場合には、同音語の存在は不便を感じしめる程度が大きい (*Bemerkungen zur Homonymie—Travaux du Cercle Linguistique de Prague* 4, 1931—S. 154 f.) といふことである。

五

W. Wundt は、意識内容の明瞭さ (Klarheit) と明晰さ (Deutlichkeit) とを區別して、前者はその内容自身の把握に好都合な程度を意味し、後者はその内容を他の心的内容から明確に區別して把握するに好都合な程度を意味するものとなした。^(註 1) この二つの概念は、確かに區別せらるべきものであるが、實際問題としては、両者は屢相關聯してゐるものである。

音韻變化に於ては、理解を容易ならしめるため、發音の明瞭さを欲求する傾向が認められる。例へば、兩唇音 (p) が唇齒音 (f) に變化して行くことは、世界諸言語に共通の傾向であるが、その原因の一つとしては、後者が前者より鋭い摩擦を持つ、といふ事實を擧ぐべきであらう。

發音明瞭化の一層明白な例は、ウェイルズ語に於ける無聲の流音及び鼻音に就いて見ることが出来る。無聲音韻 (l) (r) (m) (n) (ŋ) は各 ll, rh, mh, nh, ngh と綴られてゐるが、北部ウェイルズに於けるその發音について H. Sweet の説く所は左の通りである。「rh, ngh, nh, mh は、現今では綴字通りの出氣音 (aspirates) [rh] [ŋh] [nh] [mh] になつてゐるが、^(註 3) 本來は單純な無聲音 [r] [ŋ] [n] [m] であつたに相違無い。何故なら、その由來から見れば rh は ll と並行してゐた筈であり、その ll は今もなほ單純な(非出氣的な)無聲音であるし、又 ngh- が c- から生じて來た所の所謂 “nasal mutation”^(註 5) の過程は、ng- が g- から生じて來た過程と並行的であつたに相違無いからである。これらの音の出氣化 (aspiration) は、疑も無く、その音を一層聞え易く (more audible) しようとする試みの結果である。何故なら、殊に無聲の鼻音は、非常に強く發音されない限り、耳に殆ど聞えないからである。これらに對し、本來の (l) 音は又違つた手段で一層聞え易くされてゐる。^(註 6) 即ち、これは強い單側音的な口蓋化された摩擦音 (a strong unilateral palatalized hiss 即ち ll) に發達してゐるの

(註 7)
である。」と。

又、現代フランス語では、母音音韻を直後に伴はない子音音韻の發音が、兎角不明瞭になり易いので、それを防ぐため、その子音音韻本來の調音の後に [ə] を加へてその響を特に明瞭ならしめることがある。例へば、Ouest-Ceinture を [westəsɛ:ty:r], un ours blanc を [œnursəblā], lorsque を [lɔrsəkə], c'est Max を [sɛmaksə], un arc を [œnarkə] と發音するが如き。^(註 8) 又、現代東京人の發音に於て、多數の音節を連續して無聲化することを避ける傾向の如きも、^(註 9) 消極的ながら、やはり發音の明瞭さを欲求する心理の現れと見られる。

次に、發音を明晰ならしめる欲求は、二つの場合に分けて考ふべきである。^(註 10) 一は H. Frei の所謂「記憶的關係」(rapports mémoriels) に關するもの、他は同氏の所謂「話線的關係」(rapports discursifs) に關するものである。

この中、まづ、記憶的關係の上で明晰を欲求する傾向について考へて見よう。

原始ゲルマン語の p 音は、アングロサクソン語を除く他の西部ゲルマン諸方言では、歴史時代に入る少し前に d に變化した。この d はやがて d に變化したのであるが、その閉鎖音化は、まづ上部ドイツ (oberdeutsch) 諸方言に起り、ついで中部ドイツ (mitteldeutsch) 諸方言に入り、最後に低地ドイツ (niederdeutsch) 方言たる古代ザクセン語 (Altsächsisch) に^(註 11) も及んだのである。古代ザクセン語に於てかやうに d の閉鎖音化の遅れたことについては、自らその理由がある。即ち、上部・中部ドイツ諸方言では、古來の Media は早くから Tenuis に變化しようとする傾向を示してゐた。そこで、當時閉鎖音化の傾向を示してゐた d は、本來の d が t に變ずるや、その跡を追つて d に變化した。従つて、この場合には、d → d の變化は、何ら語形の混同を來すこと無くして起り得たのである。

第四編 音韻變化の諸原因

之に反して、低地ドイツ方言では、現今に至るまで、古來の Media は Media として少しも動かない。ここでは、もし d が閉鎖音化するならば、忽ち本來の d と同音になつて、語形の混同を來すこととなる。それ故、低地ドイツ方言では、かかる事情が、d の閉鎖音化傾向に反抗して、暫時その實現を遅延させたのであらうといふ。これ、B. Trnka の説である。^(註 12)

卑俗ラテン語の u は、イタリア語・スペイン語・ポルトガル語等では原形のまま保存されたが、フランス語・プロヴァンス語 (Provençalisch)・ガロ＝イタリア語 (Galloitalisch)・西部レート語 (Westrätisch) では ü に變化してゐる。さて、卑俗ラテン語の閉音節に於ける o は、フランス語やプロヴァンス語では、記録時代の最初期にはなほ保存されてゐたが、その後漸次 u に變つて行つた。ところで、ロマンス語全領域の中に於て、この o → u の變化の起つた地域が、上の u → ü の變化の起つた地域とかなりよく一致してゐることは、注意すべき事實である。^(註 13) それらの諸言語では、卑俗ラテン語の u は早くから ü の方向へ變化し始めてゐたので、その後 o が u に變化しても、これと相混同する恐れは無かつたわけである。之に對して、イタリア語・スペイン語・ポルトガル語等では、卑俗ラテン語の o は、今もなほ o 類の音價を保つてゐる。それらの諸言語に於て、もし卑俗ラテン語の o が u に變化したとすれば、卑俗ラテン語の u の系統の音韻と相混じて、言語の理解に不便を來すからである。(我が國でも、エ列の母音が思ひ切つて i に近い音價を持つ方言に於て、キ・ギ・シ・ジ・チ・ヂ・ニ・ヒ・ビ・ピ・ミ・リ等の母音が中舌音 i に變化してゐるため、イ列とエ列との混同の避けられてゐるやうな例が少くない。^(註 14) もつとも、地方によつては、イ列の母音とエ列の母音とを全く相混同してゐる所も無いではないが。)

次に、史前アングロサクソン語の (k) (g) は、語頭に於て諸前舌母音の前、語中に於て (i) (i:) (j) の前、語末に於て (i) (i:) の後に立つ場

合には、口蓋化されて ⟨c⟩ ⟨j⟩ に變つた。而して、この ⟨c⟩ ⟨j⟩ は、古くは c, g と綴られてゐたが、中世英語の初期以來、當時のフランス語の綴 ch ⟨ʃ⟩ g, ge ⟨dʒ⟩ を借りて寫されてゐるので、その時代には既に Affricata 化してゐたことが分る。例へば、原始ゲルマン語 *kilpam → 古代英語 cild → 中世英語 child → 近代英語 child ; 原始ゲルマン語 *keusan → 古代英語 ceosan → 中世英語 chesen, chusen → 近代英語 choose ; 原始ゲルマン語 *sangjan → 古代英語 sengan → 中世英語 sengen → 近代英語 singe 等。

然るに、近代英語の初期にも亦 ⟨k⟩ ⟨g⟩ の口蓋化が起つた。即ち、1653 年 Wallis の記す所に據れば、當時の英語では can, get, begin の類は cyan, gyet, begyin のやうに發音されてゐた。併し、call, gall, go, gun, goose, come 等の場合には、この y は挿入されなかつたといふ。なほ、同じ本の 1665 年頃の版の記載に據ると、can を kyan と發音するのは南部イングランドの特色であり、北部イングランド及びスコットランドでは kan と發音される、とある。略同様な口蓋化の事實は、第十八世紀に於て Sheridan (1780) Elphinston (1787) Walker (1791) の諸家、第十九世紀に入つては Odell (1806) Batchelor (1809) Hill (1821) Rapp (1840) 等の諸家によつて記載されてゐる。かかる口蓋的 k, g は、最初は後に續く前舌母音の影響によつて生じたものであるが、card, kind, skirt のやうな場合には、その前舌母音が中舌母音又は後舌母音に變じてしまつた後までもなほ保存されてゐたのである。^(註 15)

史前アングロサクソン語に於ける ⟨k⟩ ⟨g⟩ の口蓋化と、近代英語に於ける ⟨k⟩ ⟨g⟩ の口蓋化とは、共に前舌母音の影響から起つたものであつて、その條件は互によく似てゐる。殊に、兩者共に母音 *ǣ*, *ā* の前舌化に伴つて起つた點まで同じことなのである。史前アングロサクソン語に於ける *k'af, *k'eres の頭音は、最初は後に續く前舌母音 a, e の影響によ

つて口蓋化されたものであるが、その口蓋性は、後には却つて母音の音色に影響を與へ、*ceaf*, *cieres* と綴られる位にまで發展したのである。それと同様に、近代英語に於ける *can*, *get* の頭音は、最初は後に續く前舌母音の影響によつて口蓋化されたものであるが、その口蓋性は、後には *cyan*, *gyet* と聞える位にまで過分の發展を示したのである。

併しながら、古代英語(アングロサクソン語)の (c) (ɟ) がやがて Affricata (tʃ) (dʒ) にまで發展したのに對し、近代英語に發生した口蓋的 *k*, *g* は、結局單純な破裂音たるに留まつた。(世界諸言語の實例の示すところ、(c) (ɟ) の Affricata 化は殆ど必至の勢と見られるに拘らず。)のみならず、第十九世紀も末に向ふに従ひ、口蓋的 *k*, *g* は漸次廢れて、恐らく社會の一半に古來その勢力を維持し來つたものと思はれる所の普通の後舌的 *k*, *g* の使用が、再びその勢力を回復するに至つた。

さらば、近代英語に於ける口蓋的 *k*, *g* は何故 Affricata 化まで達しなかつたか。思ふに、古代英語の (c) (ɟ) が Affricata 化された時代には、英語には未だ (ʃ) (ʒ) 類の音韻が無かつたので、(c) (ɟ) が Affricata 化しても、何ら意義の理解に不便を來す恐れが無かつた。それ故、Affricata 化は、この場合には何ら抵抗を受けずして進行することが出来たのである。之に反して、近代英語は、最初から既に別に音韻 (tʃ) (dʒ) を持つてゐたので、新に發生した口蓋的 *k*, *g* を Affricata 化させるならば、意義の區別 (*kill—chill*, *cart—chart*, *guest—jest* 等)に支障を來す恐れがあつた。それ故、此の度はそれに氣がねして、自然的な Affricata 化の傾向が抑壓されたものと思はれる。

以上は、發音を明晰ならしめる欲求の保守的に働いた例である。次には、同じ欲求が進歩的に働いた例を挙げよう。

(註 16)
A. Sommerfelt に據れば、古代ノルド語の強音節に於て短母音に従つてゐた短子音は、現代ノルウェー語ではすべて長子音に變じてゐる。例へ

ば, son, vin, vit, spil は各 *scenn, vænn, vætt, spæll* となつた。之に對して, 古代ノルド語の長子音 *tt, dd, nn, ll* は, 現代のノルウェイの多くの方言では, 口蓋化されて *t't', d'd', n'n', l'l'* になつてゐる。例へば, *fall, mann, gadd, slutti* は各 *fal'l', man'n', gad'd', slut't'e* となつた。Sommerfelt に據れば, 古代の短子音 *t, d, n, l* 等が次第に長く發音される傾向を生じつつあつた時代に, 本來の長子音 *tt, dd, nn, ll* 等は, それらと區別するために, 特に強くしつかりと調音された。その結果として, 舌と上顎との接觸面が廣くなり, つひに口蓋化の現象を惹起するに至つたものであらうといふ。^(註 17)

これと類似の事情は, 古代高地ドイツ語に於ける所謂第二音韻推移 (*Die zweite Lautverschiebung*) に關しても認められるやうに思ふ。その際, *Media* が *Tenuis* に化することは, 確かに重要傾向の一つであつたが, 推移の最も廣範圍に互つて起つた上部ドイツ (*oberdeutsch*) 諸方言でさへも, 徹底的に完成されたものは *⟨d⟩ → ⟨t⟩* の變化だけであり, その他は概ね不徹底に終つた。古代の文獻について見ても, 綴字が *p—b; k, c—g* の間を動搖してゐる。^(註 18) 現今の上部ドイツ諸方言では, 大體, バイエレン (*bayrisch*) 方言 *⟨p⟩ ⟨t⟩ ⟨g⟩*, アレマン (*alemannisch*) 方言 *⟨b⟩ ⟨t⟩ ⟨g⟩* である。^(註 19) 現代の文語 (*Schriftsprache*) は音韻推移の點では古代の東部フランク (*ostfränkisch*) 方言の状態に近いのであるが, この方言では問題の音は *b, t, g* となつてゐた。^(註 20) さて, 然らば, 上部ドイツ諸方言に於ても東部フランク方言に於ても, 何故齒音の場合にのみ推移が完全に起つたのかといふと, それには理由がある。即ち, 第二音韻推移の起つた時代には, 一方では原始ゲルマン語の *⟨θ⟩* の系統を引く *⟨ð⟩* 音が閉鎖音化する傾向を示してゐた。^(註 21) そこで, それとの混同を防ぐため, 本來の *⟨d⟩* は「これこそ本來の閉鎖音であるぞ。」とばかり特に強く調音されたので, つひに *Lenis ⟨d⟩* が變じて *Fortis ⟨t⟩* となつてしまつた。(原始ゲルマン語以

來の (t) は當時既に (ts) に變じてゐたから、(d) が (t) に變ずること
 については何の氣がねもいらなかつたのである。) かくて、本來の (d) が
 既に (t) に變じてしまつてから後に、本來の (ð) は始めて (d) に變化
 した。^(註 23) この新しい (d) 音は、摩擦音から變化した音であるから、比較的
 調音の軟い音で、(t) とは明瞭に區別されてゐたのである。之を要するに、
 (d) → (t) の變化傾向は、(ð) → (d) の變化によつて惹起せらるべき語形
 の混同を避けようとして特に促進された。然るに、唇音や後舌音の場合に
 は、この (ð) → (d) に比すべき事情が何ら存在しなかつたので、^(註 24) (b) (g)
 は特に急いで (p) (k) に變化する必要が無かつたのである。

又、前にも述べたが、英語のスコットランド方言では、(r) は一般には
 振動音に發音される。併し、Henry (henri) のやうな場合に (n) の後で
 強い振動音を用ゐる時は (hendri) と聞え易いので、かやうな場合には
 (r) を摩擦音 [ɹ] に發音する人が相當多いといふ。^(註 25) これは、音韻群 (nr)
 を音韻群 (ndr) から明確に區別しようとする欲求から、スコットランド方
 言に於ける完全な (r) の具有すべき振動をわざと抑壓したものである。
 かやうな傾向がもし一般化するならば、將來は音韻の分化へと發展して行
 くことも可能であらう。

次には、話線的關係の上で明晰を欲求する傾向について述べよう。^(註 26)

中世英語に於ける名詞の複數語尾 -es の尾音は、古くは sones (sunes)
 lockes (lokes) のやうな無聲音であつたが、音韻法則に従ひ、近代英語の
 初期には (sunez) (lokez) のやうな有聲音に變じた。^(註 27) ついで母音の脫落
 及び子音の同化が起つて、現今のやうな sons (sunz > sanz) locks (loks
 > loks) の形が發生したのである。但し、語幹の尾音が (s) (z) (ʃ) (tʃ)
 (dʒ) のやうな音韻である場合 (kisses, roses, wishes, witches, bridges
 等) には、母音の脫落は起らなかつた。何故なら、もし (kisez) (ro:zez)
 (wifɛz) (witʃɛz) (bridʒɛz) の類を [kiss] [ro:zz] [wiʃs] [witʃs] [bridʒz]

のやうに發音するならば、語尾がよく聞えず、單數形との區別が不明確になるので、話手はさやうな發音を力めて避けたことであらう。従つて、(e)はこれらの場合には遂に脱落しなかつた。

(註 28)

以上は、發音を明晰ならしめる欲求の保守的に働いた例である。次には、同じ欲求が進歩的に働いた例を挙げよう。

その適例は、所謂 Hiatus を避ける傾向の上に見ることが出来る。例へば、サンスクリット語に於ける $bhi+i=bhiyi$, $bhū+i=bhuvī$, $śaknu+anti=śaknuvanti$ の如き、いづれも、二つの母音の相融合しようとする自然的傾向に抗して、兩者を明確に引き離しておかうとする努力の現れである。日本語にも、ニヤウ(似合ふ)シヤワセ(爲合せ、幸)の類がある。謠曲の中には、アリヤケ(有明)イリヤイ(入相)など、その例が甚だ多い。

原始インドゲルマン語に於ては、齒音で終る形態論的要素の後に、*tで始る第二の形態論的要素が接續する場合、そこに生ずべき *-tt- は、實際上常に *-tst- を以て置き換へられてゐる。例へば、語根 *sed- に接尾辭 *-to- のついた形は、*set-to- なるべき筈の處、實際上 *setsto- を以て置き換へられてゐたことは、サンスクリット語 *sattāh* アヴェスタ語 *hastō* ラテン語 *sessus* 等の示す所によつて明かである。語根 *wid- に *-to- のついた形は、*wit-to- なるべき筈の處、實際上 *witsto- を以て置き換へられてゐたことは、アヴェスタ語 *-vistō* ギリシャ語 *-Fίστος* 古代アイルランド語 *-fess* 古代高地ドイツ語 (gi)wiso 等の示す所によつて明かである。なほ、ギリシャ語 *Εἶδμεν* (我々が知る)に對して、ギリシャ語 *Εἶστε* (汝等が知る)古代スラヴ語 *věste* (同)の存在することをも思ひ合すべきである。有聲音の場合にも、事情は全く同じことである。例へば、語根 *ded- に *-dhi のついた形は、*ded-dhi なるべき筈の處、實際上 *dedzdhi を以て置き換へられてゐたことは、サンスクリット語 *dehī* アヴェスタ語 *dazdi* 等の示す所によつて明かである。語根 *wid- に *-dhi のつ

いた形は、*wid-dhi なるべき筈の處、實際上 *widzdhi を以て置き換へられてゐたことは、ギリシア語 *F%oθ* の示す所によつて明かである。^(註 29)

以上のやうな比較言語學者の所説にしてもし信すべくば、原始インドゲルマン語の或時期に存在したと推定される所の音韻群 *tt に於ては、二つの t は各別々の破裂を有したものだと思はれる。而して、二つの形態論的要素を明確に境界づけようとする努力から、第一の *t の破裂が特に強く發せられた結果、つひにはそこに獨立の一音韻 *s を生ずるに至り、*tt はつひに *tst に變化するに至つたものと思はれる。*dd が *dzd に變化した過程についても、それと全く同様に考へられる。

古代英語の抽象名詞 *strengþu*, *lengþ*, *hælp*, *trēowþ*, *slāwþ*, *geogop* の類は、現代英語では *strength*, *length*, *health*, *truth*, *sloth*, *youth* のやうな形となり、即ち、綴は變つても依然接尾辭の ⟨θ⟩ 音を保存してゐる。然るに、*hiehp*, *gesihþ*, *drūgap*, *piefp* の場合には、現代英語 *height*, *sight*, *drought*, *theft* の形となり、即ち、同じ接尾辭の ⟨θ⟩ が ⟨t⟩ に變じてゐる。今、その變化の跡を辿ると、まづ、*height* の古代英語形は *hīehþu*, *hēahþu*, 中世英語形は *hezpe* (*heghthe*), *highte* で、近代英語時代に於ても第十七世紀頃には *h(e)ighth* の形が並用されてゐた。*sight* は、古代英語形に於て既に *gesihþ*, *gesiht* 兩形が並用せられ、中世英語形は *sight* であつた。*drought* の古代英語形は *drūgap*, 中世英語形は *drogte*, *drougte* であるが、中世英語初期には *druhhpe* と記した例もあつて、古代英語形からの橋渡しをなしてゐる。なほ、*sleight* はスカンディナヴィア系(アイスランド語 *slægð*) の語であるが、語の成立から言へば前記の諸語と變り無く、その中世英語形は *sleighthe* であつた。最後に、*theft* の古代英語形は *piefp*, *pēofþ*, 中世英語形は *pefte* である。かやうに、變遷の時代こそ一様でないが、接尾辭 -þu, -þ の ⟨θ⟩ 音は、^(註 30) 摩擦音韻の後ではいづれも ⟨t⟩ に變化してゐる。思ふに、⟨%θ, %θ⟩ ⟨fθ⟩

のやうに二つの摩擦音韻が直接相續く場合には、聽覺上、一から他への移行が甚だ不分明になり、種々の聽き誤りを生じ易い。そこで、その危險を防ぐため兩音韻の對立を一層明確ならしめようとした發音上の努力が、終に ⟨θ⟩ を ⟨t⟩ に變ぜしめるに至つたものである。

同様に、現代英語の序數詞 fifth 《fifθ》 sixth 《siksθ》 に於ては、自身と相類似した摩擦音韻の後に立つ ⟨θ⟩ が甚だ聽き取りにくいので、基本數詞との混同を防ぐため、[fiftθ] [sikstθ]^(註 31) のやうに發音して特に ⟨θ⟩ の存在を明確ならしめる傾向がある。

近代ギリシヤ語では、古代ギリシヤ語の二重母音 au (av), eu (ev) は、av, ev の音に變化してゐる。例へば pavo (παύω), avrio (ἀβριο), dulevo (δουλεύω) の如し。この av, ev は、無聲子音の前では更に af, ef に變化してゐる。例へば aftos (ἄτος), pseftis (ψεύτις) の如し。然るに、この af, ef は、s の前ではすべて ap, ep に變化してゐる。^(註 32) その結果として、動詞の活用 (Präsens—Aorist) の上に左のやうな交替が現れてゐる。παύω—ἐπαφα, δουλεύω—ἐδούλεφα, πιστεύω—ἐπίστεφα 等。これらを、古代ギリシヤ語形 παύω—ἐπαυσα, δουλεύω—ἐδούλευσα, πιστεύω—ἐπίστευσα 等と比較する時は、右の交替は結局 vs → fs → ps の變化によつて生じたものであることが分る。而して、この音韻變化 fs → ps は、主として、二つの摩擦音韻の結合から成る音韻群 fs の不明晰を避けようとする欲求から生じたものと思はれる。

同様の變化は、ドイツ方言の leipse, repsen, wipse (<lefse, refsen, wefse) や、古代ノルド語の repsa, ups (<refsa, ufs)^(註 33) に於ても見ることが出来る。

古代ギリシヤ語では、Attika 方言に於て、ρ, ε, ι の前の η が α に變化した。^(註 34) そこで、Ionia 方言 πρήσσω, χώρη, ἴησομαι, γενεή に對する Attika 方言 πράττω, χώρᾱ, ἰᾷσομαι, γενεᾶ のやうな對立を生ずるに至つ

たのである。これらの中、 $\rho\eta$ が $\rho\bar{\alpha}$ に變じたのは最も古い。これは、前舌面の凹みを必要條件とする ρ に對し、前舌面の隆起を必要條件とする η を調和させ、發音を容易ならしめるために起つた同化現象である。然るに、 $\varepsilon\eta$, $\epsilon\eta$ が $\varepsilon\bar{\alpha}$, $\epsilon\bar{\alpha}$ に變じたのは、それよりも時代が遅れて居り、且その原因も全く違ふ。思ふに、當時この方言では相接觸する二つの母音を一つに融合させる傾向が強かつたので、一面では、明晰を欲求して之に反抗する傾向をも生じた。かくて、 $\varepsilon\eta$, $\epsilon\eta$ に於ける二つの母音の差異を誇張して、 $\varepsilon\bar{\alpha}$, $\epsilon\bar{\alpha}$ となし、兩音韻の對立を明確ならしめたものである。

註 (1) W. Wundt: Grundriss der Psychologie, 15. Aufl., 1922, S. 252.

(2) 「音韻體系」編第五章參照。

(3) O. Jespersen も亦左のやうに言つてゐる。「キムリ語 (Kymrisch 即ち ウェイルズ語)では、無聲の鼻音が大きな役割を演じてゐる。即ち、この言語に特有の語頭音交替に關與するが故である。例へば pen, tad, cefn に對する fy mhen (mein Kopf), fy nhad (mein Vater), fy nghefn (mein Rücken) の如し。私がこれらの語の發音を聞いた回数は多くはないが、その限りでは、これらの音は、ちやうどドイツ語やデンマルク語で嘲弄的に言ふ [ŋhe:] 'ne' の場合と同様な、「無聲の鼻音」+「母音の口腔位置を通じて呼出される無聲の息」であるやうに思はれた。」(Lehrbuch der Phonetik, 2. Aufl., 1920, S. 89.)

(4) ウェイルズ語では、原始ケルト語の sl, sr は各 ll, rh に變化してゐる。ウェイルズ語では、原始ケルト語の l, r は、語頭で母音に先立つ場合には各 ll, rh に變じてゐる。それは、文の中で -s に終る語の直後に立つ場合、その s によつて語頭の l, r が無聲化された結果であるが、かうして生じた ll-, rh- の形が一般化されてすべての場合に用ゐられるやうになつたものと考へられる。(J. M. Jones: A Welsh Grammar, Historical and Comparative, 1913, pp. 135, 147 and 162.)

(5) “nasal mutation” とは、原始ケルト語の mb, nd, ŋg 及び mp, nt, ŋk が、ウェイルズ語に於て各 mm, nn, ŋŋ 及び mmh, nnh, ŋŋh に變化した事實を指す。この種の變化は、ただに一語の内部に於てのみならず、文の中で緊密に相結合してゐる二つの語の間に於ても起つたのである。例へば Bangor に對する ym Mangor (現今では yn Mangor と綴られる)の如し。なほこの “nasal mutation” を惹起した當の鼻音は、記録以前に既に消失してしまつてゐる場合もある。例へば數詞 naw (九)の本來の末尾音の如き。naw mlynnedd < *noqam mliandfjas < *neun bl-. (Jones 前掲書 註 4) pp. 167—175.

- 上の表記法では、*ŋ* は [ŋ] の音を現し、*h* はその前の鼻音の無聲であることを表してゐる。)
- (6) W. Ripman は左のやうに言つてゐる。「多くのウェイルズ人は單側音的な [ɹ] を用ゐるが、閉鎖の解放が顯著に聞え、即ち、繼續音的 *l* の前に明かな閉鎖音的 *l* が存在するやうに思はれる。」(The Sounds of Spoken English, 1921, p. 60.)
- (7) H. Sweet: Spoken Northern Welsh, 1882—4 (Collected Papers of H. S. arranged by H. C. Wyld, 1913.), p. 508. なお、「音韻體系」篇第五章 註 19 を参照せられたし。
- (8) P. Passy: Les sons du français, 10. éd., 1925, p. 86.
- (9) 佐久間鼎博士著「日本音聲學」(昭和四年) 231 頁。
- (10) H. Frei: La grammaire des fautes, 1929, p. 33. 譯語は小林英夫氏に従ふ。
- (11) H. Paul: Deutsche Grammatik, Bd. I, 1916, S. 106 f.
- (12) B. Trnka: Bemerkungen zur Homonymie (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 4, 1931.) S. 155 f.
- (13) A. Zauner: Romanische Sprachwissenschaft, I. Teil, 4. Aufl., 1921, S. 46.
- (14) 八重山方言の如きは、その最も顯著な例である。
- (15) O. Jespersen: A Modern English Grammar, Part I, 3. ed., 1922, pp. 349—350.
- (16) A. Sommerfelt: Sur le rôle des éléments moteurs dans les changements phonologiques, remarques sur la palatalisation des consonnes (Psychologie du Langage, numéro 1—4 de 1933 du Journal de Psychologie.), pp. 323—325.
- (17) 引用者言ふ。二重子音 *ll*, *nn* に於て、舌の口蓋に觸れる面積が、單純な短子音 *l*, *n* の場合よりも廣くなる傾向があるといふ事實は、スペイン語の音韻史上にも現れてゐる。即ち、スペイン語では、ラテン語の二重子音はすべて單純な短子音に變じたけれど、本來の單純な短子音との區別は、音質の上に残つた。スペイン語に於ては、母音に挟まれたラテン語の *l* ([l]) *n* ([n]) が各原形を保存してゐる (*colorem* > *color*; *luna* > *luna*) のに對し、ラテン語の *ll* ([ll]) *nn* ([nn]) は何れも口蓋音 *ll* ([ʎ]) *ñ* ([ɲ]) の形に變つてゐる (*villa* > *villa*; *annum* > *año*) のである。(Zauner 前掲書 (註 13) S. 110 参照。)
- (18) H. Naumann: Althochdeutsche Grammatik, 2. Aufl., 1923, S. 146 ff. u. 156 f.
Paul 前掲書 (註 11) S. 105.
- (19) H. Reis: Die deutschen Mundarten, 2. Aufl., 1920, S. 123 ff.
- (20) Naumann 前掲書 (註 18) S. 131 f.

- J. Wright: *An Old High German Primer*, 2. ed., 1906, p. 39.
- (21) Naumann 前掲書 (註 18) S. 40, 129 f., 145 u. 156.
- (22) 第九章註 5 参照。
- (23) これらの音韻變化の結果, アレマン方言では, 本來の Media b, d, g の中で, d は早くから Tenuis t に變じて連帶の外に逸脱してしまひ, それに代つて, 新に ð から生じて來た d が, 本來の b, g と一組になつて, 新なる連帶 b, d, g を形作るやうになつてゐたのである。例へば, Notker (1022 年歿) の音韻體系の如きがそれである。(Naumann 前掲書 (註 18) S. 148 f. 参照。)
- (24) 英語 thing ドイツ語 Ding; 英語 day ドイツ語 Tag。これに對して, 英語 free ドイツ語 frei; 英語 bear ドイツ語 Bär; 英語 hound ドイツ語 Hund; 英語 goose ドイツ語 Gans。かやうなわけで, 高地ドイツ語に於ては, 原始ゲルマン語の無聲摩擦音韻 f, þ, ɣ の中で, ただ þ のみが一般的に弱音 (Lenis) 化し閉鎖音化した。f, ɣ の場合には, 之と並行するやうな變化は起らなかつたのである。
- (25) W. Grant: *The pronunciation of English in Scotland*, 1914, p. 43.
- (26) 近時のフランスの學者たちは, 以下に述べるやうな種類の現象を “*différenciation*” と呼んでゐる。(M. Grammont: *Traité de phonétique*, 1933, pp. 229—238.)
- (27) Jespersen 前掲書 (註 15) pp. 188—189 参照。
- (28) 所謂 “*différenciation préventive*” (Grammont 前掲書 (註 26) pp. 237—238.)
- (29) A. Meillet: *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 7. éd., 1934, p. 131.
- (30) Jespersen 前掲書 (註 15) p. 46 参照。但し實例は私がいろいろ増補した。
- (31) D. Jones: *The Pronunciation of English*, 2. ed., 1919, p. 17.
- (32) A. Thumb: *Handbuch der neugriechischen Volkssprache*, 2. Aufl., 1910, S. 16.
- (33) E. Sievers: *Grundzüge der Phonetik*, 4. Aufl., 1893, S. 261.
- (34) E. Kieckers: *Historische griechische Grammatik*, 1925, S. 25 f.
- A. -C. Juret: *Phonétique grecque*, 1938, pp. 99 et 108.

六

言語單位(語又は形態部)の自己統一を明瞭明晰ならしめる欲求の現れとしては、近代官話に於ける重念の發達に、その適例を見ることが出来る。

周知の如く、支那語は古くは一語一音節を原則としてゐたが、語彙を豊富にし又同音語の存在による不便を避けるために、古來複合語が多く作られてゐた。然るに、近代に至つては、複合語の發生や利用が愈盛になると同時に、他面には音韻變化の結果として同音の語根が激増し、そのため、現今ではもはや古への一語一音節の原則を維持することは到底不可能となり、日常普通の語彙(助辭を除く)は大部分複音節語となつてゐる。かく複音節語が一般に用ゐられる以上、それを構成する各音節を平等に並列するのでなく、そのいづれか一つに強音を與へて他を之に従屬せしめ、語形全體に自己統一を與へることが、當然の要求として起つて來た。かやうに或音節に強音を與へることを重念といふ。例へば、「月亮」「太陽」「告訴」「知道」等は第一音節を重念し、「護照」「條約」「方針」「目的」等は第二音節を重念する。又、「莊子」は、第一音節を重念すれば村莊の義となり、第二音節を重念すれば人名となる。「兄弟」は、第一音節を重念すれば弟の義となり、第二音節を重念すれば兄弟(兄と弟)の義となる。(官話に存する所のかやうな重念の組織は、吳方言や福建方言等には通用しないので、恐らく近代の發達に係るものと想像される。)かかる重念の發達した結果として、重念されない音節の發音(殊にその四聲)が不明瞭になり易く、就中重念音節の直後の音節に於てさうであるが、之によつて起る損失は、よし有るとしてもごく僅少に過ぎず、語形全體の自己統一を明示し得る利益は、それを補つて餘あるものである。^(註1)

そもそも、語形の自己統一を表す手段としては、例へば日本語に於けるが如く、高低アクセントも或程度までは役立ち得るのであるが、強弱アク

●第四編 音韻變化の諸原因

セントは直觀に訴へるに更に一層有效である。

原始インドゲルマン語に於けるアクセントの主要素は、長短と高低とであつた。各母音音韻には長音と短音とが區別されてゐた。而して、各語を構成する諸音節の中の或一箇は特に高く、之に對して、他の諸音節はいづれも低かつた。もしその高い音節が長母音音韻又は二重母音音韻を含む場合ならば、音調の上で、Akut, Zirkumflex の二種類に區別されてゐた。かくて、原始インドゲルマン語の音調は、一語の中に高さの頂點を唯一つ持つといふ定まりにより、語形の自己統一を示す機能を果しつつあつた。これらの特色は、古代ギリシヤ語にも、大體そのまま保存されてゐたのである。

然るに、社會生活の繁忙化は、自ら談話の速度の増大を促し、所要の觀念を出来るだけ簡易な手段で有効迅速に傳達することを要求するに至つた。そのためには、一音々々の發音の正確さは犠牲にしても、語そのものを一丸として直ちに把握させることが必要である。ここに於て、語の核心となる一音節を特に強く發音し、之を中心として他の諸音節を從屬させることにより、語の全形としての統一を固くするやうになつた。然るに、原始インドゲルマン語以來、各語に於ける音の高さの頂點は、音の強さの點から見ても、自然いくらか強く發音されたものに相違無い。^(註2) 今や、この傾向は一層強められ、本來は高さの頂點であつた箇處が、今は強さの核心として言語意識に映ずるやうになつた。ギリシヤに於て、言語の強弱リズムに基いて詩を作つた最初の人、第四世紀の Gregor von Nazianz ^(註3) であつたといふ。かかる状態に於ては、語を構成する諸音節の中の或一つが強音を持つて、語の核心となり、強音無き諸音節が之に從屬せしめられる。これ即ち近代ギリシヤ語の實狀である。

ゲルマン諸言語は、強弱アクセントの發達の上から見れば、ギリシヤ語よりも更に一段の進歩を示してゐる。即ち、原始ゲルマン語に於ても、強

音の位置は、古くは、近代ギリシヤ語の場合と同様、原始インドゲルマン語に於ける、高さの頂點に相當する處に在つたことは、Verner の法則の示す所によつて明かである。然るに、その後強音は語の第一音節に移つた。^(註4)而して、語の第一音節は通例語根の部分であつたから、その結果、語の意義の上の核心と強さの上の核心とが相一致することとなり、語の内部的統一は始めて全うせられたのである。原始インドゲルマン語の状態から出發してここに至るまでの變遷は、畢竟、意義的單位たる語の形の内部的統一を目ざしての諸音韻の凝結過程である。強弱アクセントの昂揚された結果としては、弱音節に於ける諸音韻の音性や音長の實現が不完全になり、歴史的には、語形を短縮し、弱音節に現れ得る音韻の種類を減少せしめるに至るのであるが、それらの現象から生ずべき不利益は、語形の内部的統一といふ利益によつて補償されて餘が有る。實に、この變遷は、全體が部分を征服して行く過程であり、手段を犠牲としての目的の勝利を意味するものである。

註 (1) 所謂重念の有する統一効果は、場合によつて種々の程度がある。二音節語について見ると、その第一音節を重念する場合は、第二音節を重念する場合に比すれば、概して統一効果が大きい。これは、意義の側からも音の側からも言ひ得る所である。例へば、哥哥(兄) 妹妹(妹) 地方(場所) 點心(菓子) 工夫(暇) 明白(わかる) のやうな複合語は、意義上既に完全な一語であつて、文字を知らない民衆にとつては恐らく複合意識すら既に存在しない場合が有らうと思はれる。かやうな語に於ては、重念されるのは、多くはその第一音節である。すべて一語の第一音節が重念される場合には、第二音節は極めて弱く發音され、それに固有な四聲の上の特色は殆ど發揮されない位である。それ故、全體の印象の上から見ると、第二音節は全然第一音節に従屬してゐる。即ち、この種の複合語に於ては、意義上の統一が完全であるのに相應して、音の形の上の統一も亦完全である。之に對して、同郷(同郷) 綠草(綠の草) 書架(本棚) 酒缸(酒甕) のやうな複合語に於ては、構成要素たる一つ一つの語根の意義がなほそれぞれに明瞭であり、見様によつてはなほ各獨立の語と見てもよいやうな場合さへある。かやうな複合語に於ては、重念されるのは通例その第二音節である。すべて一語の第二音節が重念される場合には、語を構成する二つの音節の強さの上の差異は餘り大きくない。第二音節は勿論のこと、第一音節に於て

第四編 音韻變化の諸原因

もその四聲の上の特色はかなり明瞭に實現される。従つて、この種の複合語の中には、意義の上から見ても音の上から見ても、句(語群)との區別が餘り明瞭でないものがある。以上述べたやうな關係は、東西・兄弟のやうな語に於ては最も明かである。これらの語は、その第二音節を重念する場合には各「東と西」「兄と弟」を意味するのであるが、その第一音節を重念する場合には各「もの」「弟」といふ單一な意義を表す。なほ、第二音節が接尾辭的(又は助辭的)のものである場合には、重念されるのは無論第一音節の方である。桌子(テーブル)房子(家)花兒(花)我們(我々)別的(ほかの)靠着(倚りかかつてゐる)來丁(來た)の如し。この桌子・房子などの場合とは違つて、瓜子(瓜の種子)蓮子(蓮の實)銅子(銅貨)長子(長男)のやうな場合には、第二音節が重念される。これらの子は、接尾辭的のものではなくて、充實した意義を持つからである。孔子・老子のやうな聖賢の名の下につく子が重念されるのも、やはり同じ理由によるものである。E. Polivanov 曰く、「現代支那語では、力的語アクセント(die dynamische Wortbetonung)の機能は全然形態論的(ausschließlich morphologisiert)であり、音樂的音節アクセント(der musikalische Silbenakzent)の機能は全然意義論的(ausschließlich semasiologisiert)である。」(Zur Frage der Betonungsfunktionen—Travaux du Cercle Linguistique de Prague 6, 1936.—S. 78.)と。ここに力的語アクセントの機能が形態論的であると言つてゐるのは、即ち重念の持つ前記のやうな性質を指してゐるものと考へられる。

- (2) 勿論、音の長短に基くリズムを破壊しないやうな輕微な程度に於て。
 - (3) E. Schwyzer: Griechische Grammatik, erste Lieferung, S. 394.
 - (4) F. Kluge: Vorgeschichte der altgermanischen Dialekte (Grundriss der germanischen Philologie, herausgegeben von H. Paul, I. Band, 1891.), S. 337 ff.
- O. Jespersen: Language, its Nature, Development and Orgin, 1922, p. 272.

七

種々なる表現効果を現すために發音運動がさまざまの形をとることは、人のよく知る所で、これについては、既に「音韻觀念」第四章でも言及しておいた。それらは時として音韻變化の原因ともなる。アマリ(餘)がアンマリとなり、マシロ(眞白)がマッシロとなつたことの如きは、その例である。これらは、本來は程度の大きさを時間の長さによつて表した模倣的象徵手段であつたものが、屢繰返される間に、いつしかそのままの形で言語習得者の記憶に固定せられ、新しい語形を生ずるに至つたものである。^(註 1)

1600 年頃の英語の音韻状態では、beat, seat, heat の類の母音は (e:) であり、gate, hate, date の類の母音は (e:) であつた。而して、第十八世紀頃には、前者は (i:) に、後者は (e:) に變じてゐたのである。然るに、great は、本來は前者と同韻であつたのに、現今では後者と同韻になつてゐる。第十八世紀頃は、あたかもその過渡期であつて、前者の系統に屬する (gri:t) の形と、後者の系統に屬する (gre:t) の形とが、當時は並用されてゐた。併し、(gre:t) は當時から既に優勢な形であつて、現代では此の系統に屬する (greit) のみが保存され、(gri:t) の方は廢れてしまつたのである。さらば great は何故こんな不規則な語形を發達させたのであろうか。その理由についてはいろいろな説明が試みられてゐるが、思ふに、この語は常に特別の感動を以て重々しく發音される傾向があるので、その關係から獨特新形を發生せしめるに至つたものではなからうか。^(註 2)

^(註 3)
ドイツ語の東部スウィス (Ostschweiz) 方言では、既述の通り、本來の單音節語に於て、單一な軟子音 (weicher Konsonant) の前の母音が伸長されてゐる。例へば Hôf, Glâs, Tôr 等の如し。然るに、動詞の命令形に於ては、この伸長は起らず、却つて末尾の子音が伸長されて gib, nimm, höll (=hole), spill (=spiele) のやうな形になつてゐる。又、wohl は、ja

wöll の場合に限つて、特に wöll の形になつてゐる。これらは、^(註 4) H. Reis の説明に據れば、中世高地ドイツ語時代 (die mittelhochdeutsche Zeit) に於ける調子 (Betonungsweise) の相違から來たものであつて、これらの語句は、特に鋭い調子 (der scharfe Ton) で發音されたため、音韻史上特別な發達を示すに至つたものであらうといふ。

同様に、^(註 5) C. Brockelmann に據れば、ヘブライ語では、諸敘述形 (die erzählenden Formen) 及び諸名詞 (die Nomina) が Lentobetonung を有したのに對し、命令形 (der Imperativ) は Allegrobetonung を有した。そこで、原始セム語形 (die ursemitische Form) からヘブライ語形への發達に於て、両者は各相異なる道を探つてゐる。例へば、*gālā “offenbarte” > gālā. *līdā > lēdā „Geburt” に對する *gāšā > g^ešā „berühre”, *tinā > t^enā „gib doch” の如く。

これらは、いづれも、命令形の含む獨特の感情が、發音運動の上に現れ、やがて音韻變化の上にも反映したものと見られる。而も、その現れ方が、東部スウィス方言の場合とヘブライ語の場合のどちらに於ても、口調を短促ならしめるといふ點で、略相似た行き方を示してゐる所が面白い。

以上の場合、發音運動を通じて音韻變化に反映する所の欲求は、直接言語行為の主目的に關することであつた。^(註 6) それらの欲求は、その語自體の意義と必然的な關係を持つものであり、從つて、その影響の及ぶ範圍も、一二の語か、或は文法上特殊の範疇に屬する一群の語以外に出ることは無い。

然るに、同じく發音運動の上に現れる表現上の欲求にして、而も右とはいささか趣を異にするものがある。これらは、個々の語の表す意義とは無關係なものである。その働くや、極めて隱微ながらも普遍的であり、從つて音韻そのものの變化の方向を決定することにさへ與つて力あるものと思はれる。即ち、我々は、日常の談話に際し、めいめいの趣味に惹かれて、知らず識らず自分の發音運動に或獨特の傾向を與へてゐる。穩和な上品な

態度を好む人は、發音の野卑に流れる傾向を知らず識らず抑制しつつあるものである。例へば、我が國に於て、「唇をあまり大きく開くまいとの一種のたしなみから、ある婦人には『おつぼぐち』の習慣がある。この場合には、『ア』はかなり『ねいろ』をかへて『オ』に幾分近づくのである。^(註 7)」之と反對に勇壯活潑な態度を好む人に於ても、その氣持は自然と發音運動の上に反映する。所謂卷舌の r は、或獨特の心的態度を反映してゐるやうである。各個人に固有な音聲上の特色と言はれるものの中には、無論その人の解剖學的生理學的特色に基くものもあらうが、右のやうな無自覺的な趣味傾向に基く要素も少からず含まれてゐることと思ふ。この趣味傾向といふものは、言ふまでもなく、表現の副目的^(註 8)に屬するものである。表現の主目的は、當面の用件であるから、その場合々々によつて變つて行く。その人の性格に基く不斷の心的傾向は、寧ろ無自覺の間に言語行爲の副目的として絶えず働いてゐるものである。

然るに、人は社會的動物である。教養ある人が自分の發音の野卑に流れる傾向を知らず識らず抑制しつつあるといふことも、必ずしも自分自身の趣味にのみよるものとは言へない。寧ろ、主としては話相手や傍聴者の思ふ所を顧慮するのではなからうか。即ち、自分を野卑な人間と見られないための無自覺的努力の現れではなからうか。事實、同一人でも、相手の如何によつて態度が變る。高位高官の人に對しては恭しく語り、知人に對しては氣取つて語り、親友に對してはざつくばらんに語る。その場合々々の態度は、一々發音運動の上に反映するのである。かくて、各人の性向は相影響して、自らその時代その社會に特有な趣味傾向を作り出す。その時代その社會に特有な趣味傾向は、自らその社會に於ける發音運動の上の一般の傾向となつて現れるのである。

例へば、佐久間博士に據れば、「東京に於けるエの母音は、その調音と音色とに於て餘り固定してゐない。個人的に出入があり、社會的に傾向が

あつて、イギリス語南イングランド風の發音に於ける *men* の [ɛ] から同じく *air* の [e] までの間を動搖すると *Edwards* が説くのは、大體正しい。[ɛ] は寧ろ上品とか謹慎とかを想起させるやうな音で、教養ある社會には寧ろ多く [e] が行はれる。[e] は現在東京において廣く行はれ、いづれかといふと意氣な下町風を聯想させるものである。^(註 9) この例などは、個人的趣味の中から漸次社會的傾向を生じつつある場合を示すものである。かくして、各人の性向の相影響する所、或は階級、或は職業、或は性、或は年齢の異なるに従ひ、それぞれの社會圈に特有の發音傾向を作り出す。

O. Jespersen 曰く、「英語の音組織を甚しく變化させた音聲變化の或るものに關聯して昔の文法家は、婦人が男子よりも一段進んだ發音法を持つてゐたといふことを判然と述べてゐる。そしてこれらの記述を見ると皆母音を [i] の方へ上げることを指摘してゐるのは特色である。例へば *Sir Thomas Smith* (1561) は『比較的優雅な若い婦人共、及び同じ風にして都會人の様に話してゐると見せかけたがる様な人達』と云ふやうな文句を用ゐてゐる。また他の場所においても、『幾分優雅な婦人達』と云つてゐる。更に *Mulcaster* (1582) にも同様の事があり、また *Milton* の師 *Alexander Gill* (1621) は『まったく斯の様にして、何でもを微かに云はうとする我々の若い娘達』について語つてゐる。^(註 10)」と。

^(註 11) 既に述べた通り、第十七八世紀の頃、*kind*, *guide*, *card*, *guard*, *skirt*, *gird*, *sky* 等の *k*, *g* 音は、かなり口蓋的に發音される傾向があつた。*Elphinston* (1787) は、これらを綴字通り *k*, *g* と發音することを不雅なりと認めてゐる。又、*Walker* (1791) も、*card* を *ke-ard* のやうに發音するのを禮儀正しい發音としてゐるのである。^(註 12) これは、恐らく、同時代に進行しつつあつた *a* → *æ* (*hat*, *man*), *æ* → *e*: (*name*, *take*), *ε* → *i*: (*leaf*, *meat*), *æ*: *i* → *e*: *i* (*day*, *maid*) 等の變化(前節参照)と同一傾向に屬するもので、當時の南部イングランド人が明るい音色を愛好した趣味の現

れと見られるものである。

かかる一般的趣味傾向は、無論、他の文化的諸現象と等しく、一種の流行として、一の社會から他の社會へ感染し得るものである。もつとも、社會的に優越の地位を占めてゐる一地方又は階級の言語に於て、發音運動の上に或傾向が起る時は、その原因が格別或表現効果を目ざす欲求に基づくものでない場合でも、それが一種の流行となつて、他の社會へも擴つて行くことは可能である。^(註13)而して、他の社會が之を受け容れる過程は、結局は好ましいと感ぜられる方向へ自己の發音運動を知らず識らず惹きつけて行くものであつて、やはり「種々なる表現効果を目ざす欲求」の一例である。

註 (1) 「音韻變化の進行過程」編第四章をも参照せられたし。なほ、古代のインドゲルマン諸言語にも、語の感情的價值から子音音韻の二重音 (Geminat) 化した場合があると言はれてゐる。例へば

A. Meillet: Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, 7. éd., 1934, p. 134.

A. -C. Juret: La phonétique latine, 2. éd., 1938, pp. 89—90.

R. Loewe: Germanische Sprachwissenschaft, I, 3. Aufl., 1922, S. 77 ff.

(2) O. Jespersen: A Modern English Grammar, Part I, 3. ed., 1922, pp. 338—339.

E. Ekwall: Historische neuenglische Laut- und Formenlehre, 2. Aufl., 1922, S. 40 f.

(3) 第三章参照。

(4) H. Reis: Die deutsche Mundarten, 2. Aufl., 1920, S. 61.

(5) C. Brockelmann: Semitische Sprachwissenschaft, 2. Aufl., 1916, S. 62.

(6) 第二章参照。

(7) 佐久間鼎博士著「日本音聲學」(昭和四年) 82 頁。

(8) 第二章参照。

(9) 佐久間鼎博士著「國語のアクセント」20—21 頁, 「國語の發音とアクセント」71 頁, 「日本音聲學」83 頁に記された趣意を綜合して記した。

(10) O. Jespersen: Language, its Nature, Development and Origin, 1922, pp. 243—244. Jespersen の原註に曰く「『ai は男の使ふ二重音で充滿の響あり, ei は女の使ふ二重音で纖細の響あり, 共に意義も用法も同じである。女はかよわくて早く力を失ふ。男は少しもかよわくないので力を失はぬ。』」

第四編 音韻變化の諸原因

(Mulcaster) とある。故に、現在は卑俗の發音に對立する上品な發音となつてゐるものが其の頃女性の特色であつた。」(p. 243) と。以上、本文及び註、共に譯文は市河三喜・神保格兩先生譯「言語、その本質・發達及び起原」(昭和二年) 444—445 頁に據る。なほ、Jespersen 前掲書 (註 2) p. 245 をも參照せられたし。

(11) 第五章參照。

(12) Jespersen 前掲書 (註 2) p. 350.

(13) G. Tarde の所謂「超論理的」勢力の働きである。Tarde の學說については、「音韻變化の進行過程」編第三章を參照せられたし。

八

もつとも、甲方言に起つた發音運動上の或傾向が乙方言に影響を與へるのは、必ずしも「種々なる表現効果を目ざす欲求」にのみよるのではない。たとひ、甲方言が乙方言よりも文化的價値の低いものであり、乙方言を使用する人々は自覺的には甲方言を輕蔑してゐるやうな場合でも、彼等は内心無自覺的には（例へば發音を容易ならしめる欲求などから）却つて甲方言の發音に共鳴を感じてゐることがある。かやうな場合には、乙方言の發音状態は結局知らず識らず甲方言の方へ惹きつけられて行くことが有り得るのである。もつとも、その際乙方言に影響を與へるものは、甲方言に於ける單なる發音傾向でなく、既に確立した音韻状態であることもある。

フランスに於ける音韻變化の擴布状態について、A. Dauzat^(註1) は左のやうに述べてゐる。「語の放射に對して觀察される所とは反對に、音韻變化を擴布するものは必ずしも社會的中心地であるとは限らない。久しい以前から Gilliéron 氏が注意してゐたやうに、殊に北部フランスに於ては、町或は小都市の土語は、附近の土語に比すれば屢一層保守的である。何故なら、そこには、進化を制限し傳統的發音を一層よく維持するやうな諸力が、田舎に於てよりも一層強大なものとして、集つてゐるからである。Auvergne に於ける私自身の觀察も、亦この見解を確めるものであつた。即ち、Issoire, Champeix, Usson, Vodable 等の如き、現今或は昔時に於ける小中心地の方言は、音韻論的立場から見れば、明かに古風な性質を現してゐる。それ故、多くの改新は、田舎に於て發展してゐる。（例へば、前述の地域に於て、二つの母音の間の r を齒間的 z 又は之に近い音に變ずることは、隣接せる多くの田舎の町村の特色であるに拘らず、いづれの小中心地にも——Issoire にも Brioude にも Sauxillanges にも Auzon にも Usson にも——到達してゐない。）その代り、二三の現象は、その起原

に於て、又久しい間、専ら都會のものであつた。r の “grassement”^(註 2) の如きはその例であつて、これは一世紀以上の間バリその他若干の大都市のみの特有であつた。」と。古代のイタリアに於て、昔の au (ラテン語 causa, aurum 等) が *ō* に變じたのは、首都ローマよりも田舎の方が早か^(註 3) つた。我が國の音韻史上に於ても、上代の母音組織の崩壊、チの頭音の^(註 4) Affricata 化、ジ・ズとヂ・ヅとの混同、^(註 5) アウとオウとの混同^(註 6) の如き重要現象が、いづれもまづ田舎の或地方に起つて、然る後に都の言語に入つたのである。之を要するに、語彙變化は、多くはまづ或社會的中心地(多くは都會)に起つて、然る後にその影響が他地方へも及ぶのであるが、音韻變化は必ずしもさうとは限らない。重要な音韻變化の最初の發生地は、都會に在る場合もあるが、又田舎に在る場合も少くない。語彙變化と音韻變化との間に存するかやうな相違の由つて來る所を考へるに、左の二つの理由が存するやうである。

第一に、語彙變化は自覺的な創造や轉用や複合や借入の手順によつて生ずるが、音韻變化は無自覺の間に起る。自覺的手順の行はれるに際しては、新に採用される語の都雅であるか野卑であるかといふことが或程度まで自覺的に考慮されるのであるが、音韻の無自覺的變化に於てはさうでない。元來、その人自身の自覺せざる欲望は、無自覺的行爲の中に知らず識らず現れて來るものである。その欲望が自覺的に抑壓されればされる程、いよいよその不満は無自覺的行爲の方にそのはけ口を求めるやうになる。都會人は、發音の容易等の點では田舎の音に共鳴を感じずるが、それを真似れば野卑になる。故に、自覺的には寧ろそれから遠ざからうと力めてゐる。併し、内心は田舎流の發音をしたくてたまらない。一體、田舎の人が都會の標準音を學ぶことには、實用上の必要も認められるのであるが、都會人が、すべての點で有利なるに拘らず、田舎の發音を強ひて擯斥するといふことは、全く華飾の心から出てゐるものである。單なる虛榮心から實用上の利

益を犠牲にしてゐるのであるから、その不満は何時かは漏らされずにはゐない。それ故、都會人の發音も、終には、自ら擯斥してゐた田舎人の發音の方へ知らず識らず惹きつけられて行くやうになる。かくて、ローマ人は、かつて自らが田舎訛りとして卑んでゐた $\bar{o}$ (<au) の音を、いつしか規範的なものと認めるやうになり、又、アウとオウとの混同は、京都に於てもつひに一般的となるに至つた。^(註 8)^(註 9)

第二に、語彙は、歴史の進運、社會の變遷に應じて時々刻々に變らざるを得ないものである。社會生活上、語彙の變化は一刻も缺くべからざる緊要事である。従つて、その變化の種々相は、よくその社會その時代の特色を反映してゐる。之に反して、音韻の變化は、さし當つて、これ無くば用を辨じ得ない程の緊要事ではない。その原因となる所の諸欲求は、概ね、いづれの社會いづれの時代にも常に存在するやうな、一般的性質のものである。従つて、音韻變化は、語彙變化に比すれば概して個性に乏しい。勿論音韻變化と雖も全然非個性的なものではなく、各社會各時代の音韻變化に各獨特の個性が認められればこそ音韻史の成立も可能となるのであるが、之を語彙變化に比すればどうしても個性に乏しいものとは言はざるを得ない。音韻變化の諸原因の中でも、「種々なる表現効果を目ざす欲求」は最も個性的なものであり、「記憶の負擔を減ずる欲求」「發音を明瞭明晰ならしめる欲求」「語の自己統一を明瞭ならしめる欲求」の如きも亦各社會各時代に特有の音韻體系に拘束されるのであるが、最も普遍的なものとして多くの學者の重要視してゐる所の「發音を容易ならしめる欲求」の如きは、概ね機械的な様相を呈し、甚だ個性に乏しく、時の古今を問はず洋の東西を問はず、同じやうな變化が幾度となく繰り返されてゐる。かやうに個性に乏しいものであるから、或一方言に起つた發音上の或傾向又は音韻變化が、他方言を語る人々の共鳴を得ることは、極めて容易である。これが語彙の場合ならば、田舎風な物の考へ方や表現手段が都會人の氣に入ら

ないといふ風な障礙も起り得るのであるが、音韻變化の場合には、怠惰は人間全體に共通の傾向であるから、「發音を容易ならしめる欲求」が一度或田舎の方言に實現されるや、内心之に共鳴を感じてゐる隣接都市の言語が之に影響されることも、比較的容易と思はれる。勿論、都會に起つた發音上の或傾向又は音韻變化が、田舎の方言を語る人々の共鳴を得ることは、更に容易である。この場合には、高尚優雅と感ぜられる音を學ぶといふ自覺的無自覺的の動機さへも加はつて、その影響の受容は一層促進される。

さて、以上述べて來た所によつて知られる通り、まづ都會から起つて田舎へ及ぶ影響は、多くの場合、一種の流行と見らるべきものであつて、その影響を受け容れる動機は、高尚優雅なものを學ぶことによつて自分の趣味を満足させ、或はそれによつて自己の品位を高めようとするに在る。即ち、結局は「種々なる表現效果を目ざす欲求」の一つの現れである。

但し、その際、如何なるものを貴び、如何なるものを賤むかといふ、その標準は、多くは G. Tarde の所謂「超論理的」(extralogique) ^(註 10) のものである。即ち、學ばれる音それ自體の性質の優秀なるが故ではなくて、ただ、都會に行はれる音なるが故に、その故に雅なりと感ぜられ、教養ある人々に用ゐられる音なるが故に、その故に優れたりと感ぜられるに過ぎない。

之に反して、或發音傾向又は音韻變化が、まづ田舎に起り、その後都會にも現れるといふ風な場合には、その影響を都會人が受容した動機は、概ね「論理的」(logique) ^(註 11) のものである。即ち、その變化たるや、都會人にとつて實際に有益なものである。何故なら、都會人は常に都會人としての誇を持つてゐる。さらば、内心に切實な要求の無い場合に、何を苦んでか田舎者の發音を眞似ることがあらうか。その音韻變化は、たとひ田舎からの影響が無かつたとしても、都會にも早晚起るべき筈のものだつたのである。田舎からの影響は、ただその變化の實現や進行を促進したに過ぎない。(勿論、支配階級が田舎から興つて都會に入つたやうな場合や、非常に多

數の民衆が田舎から都會に流入した場合などのことは、又別である。)

以上は専ら都會と田舎とを對立させて考へたのであるが、都會自身(又は田舎自身)の中にも種々なる特殊の社會圈があつて、その若干のものは、或固有の發音傾向を發達させてゐる。そこで、それらの社會圈相互の間に又複雑な相互影響が行はれ、種々なる論理的又は超論理的の勢力が相爭闘する。

かくて、近代フランス語に於ける r 音の變遷の如きは、社會的に見ても複雑を極めたものであつた。フランス語の r は本來舌尖振動音であつたが、^(註 12)パリでは中世の末から漸くその振動が弱まり、第十六世紀頃には社會の一部(殊に女子の間)では母音間の r を z に變ずる傾向をさへ生じた。^(註 13)第十七世紀に入ると、この傾向は衰頽に向つたが、それと同時に社會の他の一部から從來の舌尖振動音の代りに懸壺垂振動音を用ゐることが流行し始め、同世紀の末には既に廣く行はれるやうになつてゐた。^(註 15)かくして、第十七世紀のパリは、あたかもこれら各種の潮流の交流する所となり、各社會層又は社會圈によつて異なる種類の r が行はれてゐたことは、當時の文獻によつて知られる。^(註 16)懸壺垂振動音 r は、P. Passy の考へる所では、最初は發音の缺陷であつたものが、氣取りやによつて模倣され、漸次擴つて行つたものであらうといふ。その起原の問題はさて置き、懸壺垂 r は、とかく弱まつた音を好む都會の人気に投じて、北部フランスの諸大都市に擴り、その結果、現今では舌尖 r はそれらの土地から全く姿を消してしまつた。パリでは、懸壺垂 r の振動が概して弱く、殊に若い人々の間には全く無振動の音が廣く行はれてゐる。舌尖振動音 r を用ゐるのは、ただ歌手や演説家や俳優だけである。それは、この音が懸壺垂音よりも一層響大きく調和的で、而も咽喉を疲れさせずに濟むからである。併し、田舎に於ては、パリから西方へ僅か五里ばかりも離れた所では未だ舌尖 r 以外の r 音を知らないのであるし、多くの小都市でもやはりさうである。「現今で

第四編 音韻變化の諸原因

も、恐らくフランス人殊に男子の大多數は、舌尖 *r* を用ゐてゐるものと信ぜられる。」と Passy は言つてゐる。

註 (1) A. Dauzat: *La géographie linguistique*, 1922, pp. 172—173.

(2) P. Passy: *Les sons du français*, 10. éd., 1925, pp. 97 et 104.

(3) 「au (áu と發音される) は、卑俗ラテン語では一般にそのまま残つてゐた。aura, gaudium, taurus の如く。ルーマニア語及びプロヴァンス語では au の形で、ポルトガル語では ou の形で、各保存されてゐる。フランス語でも最古の時代に au 音の未だ存在したことは *causa* > *chose* に於ける *c* の扱はれ方によつて分る。イタリア語及びスペイン語で古への au が *o* に變化したのは、本來の *o* が *uo* 又は *ue* に變化してから後のことであつた。」(C. H. Grandgent: *Introduction to Vulgar Latin*, 1907, p. 89.) かやうなわけで、ローマ市の言語に於て、au が普遍的に單音化したのはかなり後のことであるが、併し、ラテン語以外の古代イタリク諸言語では、au は早くから單音化して居り、その影響は西暦紀元以前から漸次ローマ市を侵しつつあつたのである。「ウンブリー語 (Umbrian) 及びファリスキー語 (Faliscan) は、ラテン語の au の代りに *o* を持つてゐた。これは一般に北部及び中部イタリアの諸方言に於てさうだつたのである。ポンペイ (Pompeii) の遺物にも若干その實例がある。もつとも、ポンペイはオスキー語 (Oscan) の領域に在つて、その地方では普通には au は保存されてゐたのであるけれど。*o* といふ發音は、ローマの周圍の田舎にも行はれてゐて、西紀前第一・第二世紀には市中にも入り込み、下層階級によつて用ゐられた。ウンブリー語の銘文には、*toru* 等の例がある。ラテン語でも、*Clodius* や *Plotus* の形は、第一世紀の銘文類には普通なものである。*Closa* 等の形は第二世紀に現れてゐる。」(同上)

(4) 古事記・日本書紀・萬葉集及びそれらと同時代の文獻に用ゐられた萬葉假名に於ては、キ・ギ・ヒ・ビ・ミ・ケ・ゲ・ヘ・ベ・メ・コ・ゴ・ソ・ゾ・ト・ド・ノ・ヨ・ロの假名が各二類に使い分けられて居る。例へば、カミ(上)のミには、美・彌の類のものを用ゐて、未・微の類のものを用ゐず、之に反して、カミ(神)のミには、未・微の類のものを用ゐて、美・彌の類のものを用ゐない。この種の使い分けは、當時の言語に存在した所の音韻上の區別を反映してゐるものと考へられる。但し、當時の文獻の中でも、東國方言を寫したものと考へられる所の、萬葉集の東歌・防人歌に於ては、この種の假名の使い分けがかなり混亂を示してゐる。橋本進吉先生の「國語假名遣研究史上の一發見」(大正六年十一月の「帝國文學」に發表され、後に日本古典全集の「假字遣與山路」の卷頭にも收められた)及び「上代の文獻に存する特殊の假名遣と當時の語法」(「國語と國文學」昭和六年九月號所載)を参照せられたし。

(5) チは、中央の言語では、鎌倉時代には未だ (ti) であつて、その後室町末期までの間に (tʃi) に變化したものである。併し、關東方言では、頭音の Affri-

cata 化は、奈良朝以前に既に起つてゐたやうである。ツも、中央の言語では、鎌倉時代には未だ (tu) であつて、その後室町末期までの間に (su) に變化したものである。奈良朝時代には、關東方言に於ても、ツの頭音は未だ單純な (t) であつたらしい。「方言」第五卷第三號(昭和十年)所載拙稿「奈良朝時代東國方言のチ・ツについて」を参照せられたし。)。

- (6) 橋本進吉先生の東大昭和二年度音聲史御講義に、左の趣意の御説が有つた由である。(岩淵悦太郎氏のノートに據る。)
「ジとヂ、ズとヅの混同は、足利末期から始まり、江戸初期に完成したものである。而して、これは東國方言の影響によるものではなかつたかと思はれる。それは、東國人の書いたものに、この種の假名の混用の程度が特に著しいやうに見えるからである。例へば大久保彦左衛門の三河物語(元和八年)の如き。それ故、これらの音の混同は、恐らく東國にまづ起り、然る後に關西の方にも擴つて行つたものではないかと考へられる。」
- (7) 室町末期には、アウ・カウ・サウの類は開いた o 音を含み、之に對して、オウ・コウ・ソウの類は閉じた o 音を含んでゐた。この兩者の區別は江戸時代初期に失はれたものであるが、元和頃には、京都では未だその區別を保存してゐたのに對し、東國方面では既にその區別が無くなつてゐたといふ。詳しくは岩淵悦太郎氏「才段の長音に於ける開合に就いて」(「文學」第一卷第八號、昭和八年)を参照せられたし。なほ、豐太閤の消息類には、兩類の假名の混用例が甚だ多い。
- (8) 既に Cicero は loreola, oricla, plodo, pollunum の形を用ゐてゐる。その他 suffōco (cf. faucēs), sōdes (=si audes) 等の如きは、古典時代には普通な形であつた。これらの ō (<au) 形は、個別的音韻變化によつて生じ、或は他方言から借入されたものと見られ、その音價はラテン語の古來の ō と同様な閉音 (o:) であつた。(個別的音韻變化の結果として新音韻を發生することの無いことは、「音韻變化の進行過程」編第二章に述べた通りである。) 之に對して、後世 au>ō の變化が普遍的音韻變化として起るに至つた際、新に生じて來た ō は、開音 (o:) であつた。それ故、古典時代及び帝政時代の頃生じた個別的音韻變化 au>ō と、その後起つた普遍的音韻變化 au>ō とは、歸結する所は完全に相一致したわけではないけれども、二重母音の單純長母音化たる點に於ては、何れも同一潮流に屬するものであり、古典時代・帝政時代に部分的に生じてゐた單純長母音化の傾向が漸次に普遍化するに至つたものと考へられるのである。
- (9) アウ・カウ・サウの類とオウ・コウ・ソウの類との區別が 假名遣書で問題とされ始めたのは、年月の明記されてゐるものについて言へば、寛永の初以來のことである。「すほりひろこりは其正字によるへし」(西三條實條「假名遣近道抄」)
- (10) (11) 「音韻變化の進行過程」編第三章参照。Tarde はなほ左のやうに述べてゐる。「吾人は更に次の事實を知つてゐる。或る方言 (dialecte) が、例へば

第四編 音韻變化の諸原因

ギリシャ若くは中世のフランスの如き一の領土に於て最初他の多數の方言と闘つて終にその對敵者たる諸方言に取つて代り、それらを俚語 (patois) の地位にまで逐ひやるに至つた場合に、その方言の斯くの如き特權の獲得は常に其の方言の内部的價值に基くといふわけではない。否、決して單一にその内部的價值にのみ負ふものではないのである。それは、最初その方言のみを話してゐた州の政治的勝利及びその現實的若くは推定的優越性に因るのである。Isle-de-France の言葉がフランス語となつたのは、これ全くパリの威信のお蔭である。」(Les lois de l'imitation, 2. éd., 1815, pp. 156—157. 譯文は風早八十二氏譯「模倣の法則」(大正十三年)に據り、卑見を以て多少の改訂を加へた。)

(12) Kr. Nyrop: Grammaire historique de la langue française, tome premier, 1914, p. 343.

(13) 同上 p. 360.

(14) 同上 p. 347.

(15) 同上 p. 344.

(16) W. Meyer-Lübke: Historische Grammatik der französischen Sprache, I. 4. und 5. durchgesehene Auflage, 1934, S. 157.

P. Passy: Petite phonétique comparée des principales langues européennes, 3. éd., 1922, p. 77. (或は同氏前掲書(註2) pp. 98—99.)

九

そもそも、音韻變化の原因は極めて複雑なものであつて、一つの音韻變化と雖も、多種多様な原因の結合によつて生じたものである。例へば、第十七世紀前半頃の京都の言語で《z》と《dz》とが相合して唯一つの音韻に歸したことは、發音上の細かい調節の困難を除かうとする心理的な發音容易化の欲求の現れであると同時に、又意義を區別して表すに重要ならざる音韻上の區別を撤廢して記憶の負擔を軽減しようとする欲求にも應ずるものである。原始ゲルマン語の音韻群 χs が北部ゲルマン諸言語・英語及び近代高地ドイツ諸方言で ks に變じてゐることは、第三章では之を發音容易化の欲求によるものとして説いたが、 χs を ks に變ずることによつて二つの音韻の對立を明確ならしめ得ることを思へば、これは一つには第五章に説いた所の發音明晰化の欲求をも満足させるものである。

さて、以上、前章までに扱つて來た原因は、いづれも言はば動的な積極的な原因であつた。然るに、この外になほ靜的な消極的な原因をも考へることが出来る。假に前者を「因」と名付けるならば、後者を「縁」と呼んでもよからう。

例へば、中世英語の《e:》の系統を引く音韻 (he, see, sweet, week, agree 等の e, ee) は、1500 年前後には既に《i:》に變化してゐた。之に對して、中世英語の《ɛ:》の系統を引く音韻 (cheap, heal, seat, even, scene 等の e, ea) は 1600 年頃に至つてやうやく《e:》の状態に達し、漸次口の開きを狭めて、第十八世紀中には遂に《i:》となり、前記の系統の音韻と全く合一するに至つたのである。O. Jespersen に據れば、この兩者の合一は、必要な意義を區別して表すためには殆ど何らの障礙をも齎さなかつた。否、それ故にこそこの合一は實現可能だつたのである、といふ。^(註 1) さらば、この合一は、意義を區別して表すために重要ならざる音韻上の區

別を撤廢することにより、記憶の負擔を輕減しようとする欲求から起つたものと見ることが出来る。併しながら、たとひ、二つの音韻の間の區別が、意義を區別して表すために重要でなかつたとしても、例へば現代英語に於ける《h》と《^(註2)h》との關係のやうに、兩者の性質が非常にかけ離れたものである場合には、合一は決して起り得ない。前記兩系統の音韻は、近代英語の初期以來漸次その性質が接近し來り、第十八世紀頃には恐らく既に《i:》對《I:》のやうな極めて相近いものになつてゐたればこそ、この合一は起り得たのである。然らば、この合一は、「記憶の負擔を輕減する欲求」が「因」となり、「兩音韻の性質上の類似」が「緣」となつて起つたものと言ふべきである。

又、卑俗ラテン語の *septe (古典的ラテン語 septem) がイタリア語の sette に變化したことは、言ふまでもなく、發音容易化の欲求に基くものである。併しながら、pt のやうに閉鎖音韻が二つ連續する場合には、第一音韻の破裂は、多くは發音されないし、たとひ發音されるとしても、極めて不明瞭にしか聞えないので、第一音韻が p, t, k のいづれであらうとも、聽覺上には大差が無いのである。かくの如き事情は、*septe が sette に變化することを容易ならしめる一つの「緣」となつたものであらうと思はれる。即ち、「發音容易化の欲求」といふ「因」の存する所へ、「聽覺上の類似」といふ「緣」が加はることにより、この音韻變化は始めて實現されたのである。

フランス語に於ては、r は、十五六世紀頃までは未だ舌尖 r のみであつたが、その後、懸壺垂 r を以て之に代へる傾向が、殊に都會に盛となつた。^(註3)その動的積極的原因は、發音容易化の欲求並に趣味上の欲求に歸せらるべきものと思ふ。即ち、舌尖 r に於ては、舌尖をわざわざ後方に捲き上げた上で振動させなければならないのに對し、懸壺垂 r に於ては、ただ舌根を少し高めて懸壺垂に觸れしめればよいのである。又、舌尖が振動

するためには舌の肉塊の大なる部分が之に伴つて振動しなければならないのであるが、懸壅垂は小形で而も柔軟であり、舌尖よりも樂に振動することが出来る。かやうに懸壅垂 *r* は舌尖 *r* に比して發音容易なるのみならず、その振動が舌尖 *r* よりも輕快な印象を與へるので、趣味上からも懸壅垂 *r* を好む人々が多くなつたものと考へられる。併しながら、もし懸壅垂の振動が聽覺上舌尖の振動と少しも似てゐないものであつたとすれば、前者を以て後者に代用することを、社會は容易に許しかねたであらう。故に、舌尖 *r* から懸壅垂 *r* への變遷は、兩者の聽覺的類似を「縁」として始めて現實化されたものと言ふべきである。

(註 4) 既述の通り、いづれの言語に於ても (c) (j) は不安定な音韻で、容易に (cc) (jz); (t) (dʒ) 類の Affricata に變化してしまふ。蓋し、硬口蓋前部の閉鎖が除去される瞬間には、強烈な息が自然と齒縁に當るので、どうしてもその發音が Affricata 的になり易いのである。併しながら、この事情は變化の「縁」であつて、「因」ではない。動的積極的な「因」は、第三章に述べた通り、發音容易化の欲求である。「因」たる發音容易化の欲求が、上に述べたやうな事情（「縁」）に觸れた結果、Affricata 化といふ形に於て具體化されたものである。(註 5)

同様に、いづれの言語に於ても、(mr) (nr) は不安定な音韻結合で、容易に (mbr) (ndr) に變化してしまふ。蓋し、舌尖振動音 *r* を發するためには、相當に強い息を舌尖に吹きつけることが必要であり、そのためには、振動を起すに先立ち、豫め鼻腔への通路を閉鎖して、息を口腔に集中することが必要である。それ故、(mr) (nr) のやうな「鼻音韻プラス *r*」を完全に [mr] [nr] の形で實現することは極めて難事であり、餘程よく注意しないと [mbr] [ndr] のやうな發音になつてしまふのである。併しながら、この事情は變化の「縁」であつて、「因」ではない。動的積極的な「因」は、第三章に述べた通り、發音容易化の欲求である。「因」たる發音容易

化の欲求が、上に述べたやうな事情（「縁」）に觸れた結果、破裂音韻挿入といふ形に於て具體化されたものである。

一般に、音韻變化について條件 (Bedingung) と稱せられるものは、畢竟一種の靜的消極的原因即ち「縁」である。例へば、古典的ラテン語 *caballum, habere* はイタリア語 *cavallo, avere* フランス語 *cheval, avoir* に變じたのであるが、之に對して、古典的ラテン語 *bonum, umbra* はイタリア語 *buono, ombra* フランス語 *bon, ombre* となつた。即ち、古典的ラテン語の *b* は、母音に挟まれてゐる場合には卑俗ラテン語の *v* に變じたのであるが、その他の位置では一般に原形を保存したのである。その際、「因」たる發音容易化の欲求は、あらゆる場合に存在したものであると思はれる。併し、この「因」は、「母音に挟まれてゐる」といふ「縁」に觸れて始めて顯はに發現し、音韻變化 $b \rightarrow v$ として具體化されることを得たのである。

註 (1) O. Jespersen: *Language, its Nature, Development and Origin*, 1922, pp. 285—286.

(2) D. Jones: *On Phonemes* (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 4, 1931.), p. 78 参照。

(3) 第八章参照。

(4) 第三章参照。

(5) これに似た「縁」が、所謂第二音韻推移 (Die zweite Lautverschiebung) に際して、極めて重要な役制を演じてゐる。即ち、古代高地ドイツ語 (Althochdeutsch) では、原始ゲルマン語本來の *Tenuis* が、*Affricata* 或は更に摩擦音へと變化しつつあつた。ところで、語頭の場合について見ると、*t* が *ts* に變化したのは最も古く、その地域も亦廣範圍に及んだのであるが、*p* が *pf* に變化したのは上部ドイツ (oberdeutsch) 諸方言一般及び中部ドイツ (mitteldeutsch) 方言のただ一部だけであり、*k* が *kχ* に變化したのは上部ドイツ諸方言だけにとどまつた。それは、主としては生理的物物理的理由によるものであつたと思はれる。即ち、[f] [s] [χ] の中で、摩擦の最も顯著なものは [s] であり、摩擦の最も微弱なものは [χ] である。従つて、[pf] [ts] [kχ] の中でも、*Affricata* としての特色の最も顯著なものは [ts] である。[kχ] は *Affricata* としての特色に乏しく、聽覺上 [k'] との距離が遠くない。それ故、古代高地ド

イツ語に於ても、Affricata 音韻として最も確立し易かつたものが ts であつたことは、當然の理といふべきである。

さて、かやうに本來の t が早くから ts に變化した結果、それと混同する恐れが無くなつたので、本來の d は何の遠慮も無しに t に變化することが出来た。之に反して、本來の p や k が Affricata 化しなかつた方言に於ては、それと混同する恐れがあつたため、本來の b, g が p, k に變化することは困難であつた。従つて、d → t の變化の起つた地域に比すれば、b → p, g → k の變化の起つた地域は極めて狭かつたのである。(なほ、d → t の變化が非常に廣い地域に互つて起らざるを得なかつたことに關する積極的理由については、第五章を参照せられたし。)

十

以上はいずれも「表現の目的に關係ある諸原因」に關することであつた。然るに、音韻變化の原因として果してどの位の重要さを持つかは未だ明かにされてゐないが、兎に角、理論上は「表現の目的に關係無き諸原因」も存在し得るのである。

その第一は、言語活動以外の隣接領域に起つた變化の影響の波及である。一體、言語活動は、生理的に見ても社會的に見ても、決して人間の働きの唯一のものではない。譬へば國家に於て立法・行政・司法の三機能が相協力し又相掣肘するやうに、言語活動も亦相協力し相掣肘する所の隣接領域を持つてゐる。例へば呼吸作用の如きがそれであつて、言語は息を以て語られる以上、自然的又は社會的原因から一民族の呼吸作用の上に起つた變化が、自ら好むと好まざるとを問はず、音韻史の上に實際上何らかの影響を與へるやうになることは、有り得べきことと考へられる。

A. H. Sayce は曰く、「誰でも熟知してゐる通り、外氣に曝されてゐると、聲が嘎れて粗くなるものである。又、山勝ちの土地では、肺が風土によつて訓練され強められる結果、音の發せられる活力にもそれ相應の影響(註1)が生ずるものである。」と。

同様の考へ方から、H. Collitz は、高地ドイツ語等の子音變化の原因を地理的條件に歸せしめ、之を左のやうに説明してゐる。「或る子音變化が地理的環境に基づくといふ事は、一寸目には如何に奇妙に見えようとも、この關係は容易く理解される。有聲破裂音から無聲破裂音へ變化する、及び無聲破裂音が摩擦音或は氣音へ變化するのは呼吸の烈しさが増すといふ共通の特徴によつて關係づけられてゐる。そこでこれらの變化の兩方に通ずる原因として、息が發音に用ゐられる工合の變化をあげていだらう。習慣的に大量の息を用ゐることは、肺臟の活動の増大を意味する。此處に

において我々は地理的即ち氣候的状況との關係の明かに解る點に達したのである。何とならば、何人も山間、殊に高い山間に棲息すると肺臟を刺戟することが多いことを否定はしまいからである。」^(註 2)

又、H. Sweet は曰く、「氣候の影響は、ヨーロッパ北部の諸言語に於て a が屢圓唇化されて o の方向へ變つて行く所に見ることが出来る。例へば、英語の stone が古代英語の stān から來てゐるが如き。之に對して、南部の諸言語では、a は一般に保存されてゐる。故に、この場合に於ける a の圓唇化は、疑も無く、北方の冷たい霧勝ちな空氣の中で口を大きく開けることを嫌ふことの結果である。」^(註 3)

これらの説明が、その名ざしてゐる所の具體的事實の説明として、果して正當であるかどうかは、大いに疑問であらう。併し、一般問題として、人生に於て言語活動に隣接する諸領域に起つた變化が、發音運動に影響を及し、引いては音韻史の上にも何らかの形でその跡を留めつつあるといふことは、充分考へ得る所である。これは、呼吸作用のやうな生理的問題ばかりではなく、社會的關係についても考へ得る所で、例へば、社會生活の繁忙化につれて、人が一般に氣忙しくなり、その結果物の言ひやうが自然に速くなつて、その影響が音韻狀態の上にも及ぶといふことの如きは、有り得べき一つの場合である。

但し、音韻變化の原因は極めて複雑なものであつて、例へば、同一の事情が甲乙二つの言語に存在するとしても、甲言語ではその事情が顯はな結果を生むが、乙言語では他の事情に妨げられて結果の上に發現しない、といふこともある。又、相異なる二つの原因が全く同じ結果を生むことも有り得べきである。故に右の如き諸原因によつて惹起された音韻變化を、具體的實例につき、明確にそれと定めて指摘することは困難であるが、さればとて、それらが音韻變化に影響を與へ得ることの可能性を、頭から否定し得るものではない。

「表現の目的に關係無き諸原因」として第二に考へ得るものは、人の身體的又は精神的素質の變化である。自然的及び社會的環境の影響は、久しきに互つて働く時は、終にはその中に生きる人々の身體的及び精神的素質をさへ變化させるに至る。例へば、一定地域の米國人の身長は、平均的に見て、米國人自身を派生させたヨーロッパ人の身長よりも高いのであるが、E. Pittard は、その原因を、ヨーロッパとアメリカとに於ける農民の勞働狀態並に睡眠時間の相違に歸せしめてゐる。^(註 4)我が國の都市では、明治以後社會生活の變化に伴ひ、女子の體格が餘程大きくなつたといふ。又、生存競争の激烈さは、近年壯丁の體格を漸次低下させるに至り、識者をして憂へしめてゐる。この種の素質の變化が、各時代に於て、發音器官や言語中樞に對し、たとひ隱微なりとも何らかの變化を生ぜしめてゐることは無いであらうか。殊に、異人種間の雜婚混血が行はれる場合には、身體的及び精神的素質の上に大なる變化の起る可能性が多い。^(註 5)併しながら、民族の素質の變化は、必ずしも常に身體的原因のみから起るものとは限らない。例へば、文化的混血過程とも言ふべき二重言語狀態（所謂 “bilinguisme”）の如きは、民族心理の微細な點にまで立入つて、深刻な影響を齎すものと言はれてゐる。^(註 6)更に又、民族自身の絶えざる向上への努力も、その素質の改良に與つて力あるものと考へられる。これらのさまざまの原因によつて生ずべき身體的又は精神的素質の變化が、音韻變化の上に何らかの影響を與へ得ることは、想像するに難くない所である。

本項では、民族素質の變化と音韻變化との關係について考へた。さて、その素質の問題と密接な關係ありと考へられる所謂 Substrat の問題については、次の章で詳しく論ずることとしたい。

註 (1) A. H. Sayce: The Principles of Comparative Philology, 2. ed., 1875, p. 199.

(2) この論は American Journal of Philology 39 (1918), p. 413 に出てゐる由であるが、私は未だ直接には見てゐない。ここでは、O. Jespersen:

Language, its Nature, Development and Origin, 1922, p. 257 (譯文は市河三喜・神保格兩先生譯「言語、その本質・發達及び起原」(昭和二年) 471—472 頁に據る。)に引用されたものに據つて記したのである。

(3) H. Sweet: The History of Language, 5. ed., 1920, p. 32.

(4) E. Pittard: Les races et l'histoire, 1924, p. 17.

(5) この種の人種學的事情と音韻變化との關係を特に強調してゐるのは J. van Ginneken である。併し、氏は餘り具體的結論を急ぎ過ぎたやうに見える。我我は、目下の所では、ただ一般問題として、身體的變化が音韻變化の上に何らかの影響を與へ得るといふことの可能性を認める程度にとどまるべきである。J. van Ginneken: La biologie de la base d'articulation (Psychologie du Langage, numéro 1—4 de 1933 du Journal de Psychologie.) 参照。

(6) A. Meillet に據れば、merovingien 時代の全時期及び carolingien 時代の少くとも大部分に於ける北部フランスは、まさにかかる二重言語状態に在つたのである。かやうな社會に於て甲乙兩言語の間に起る相互影響は、實に深く、言語體系の重要な部分にまで及び得るものである。Meillet に據ると、甲社會が乙社會から單に個々の語を借用するだけの場合には、前者は自己の未だ知らなかつた音韻を後者から借入するやうなことは無い。(引用者言ふ。これは勿論無知な一般民衆の言語について言つてゐるのであらう。知識階級の言語については此の限りではあるまい。)然るに、二重言語状態の下では、この事が容易に行はれ得る。例へば、ガロ=ロマン (gallo-romain) 語には本來 h 音は無かつたのであるが、フランク族治下のフランス人は、本來のガロ=ロマン語の外にゲルマン語をも語ることが出来、從つて後者に存する h 音には習熟してゐた。そこで、例へばゲルマン語の *hatjan* (英語 *to hate* と親縁關係ある語) を h 音つきのまま借入し、ただその語尾をラテン化して直ちに使用することが出来た。現代フランス語の *haïr* はその系統の語である。更に、當時のフランス人が「高い」といふ觀念を表現しようと欲するや、母音で始るラテン系の語形(ラテン語 *altus* の系統に屬するもの)と、h で始るゲルマン語形(ドイツ語 *hoch* や英語 *high* と親縁關係あるもの)とが、同時に心に浮んだ。その結果、つひにラテン系の語形の頭にゲルマン系の h を添へて發音するに至つた。現代フランス語の *haut* は即ちその系統の形である。又、フランス語に於ては、*il vient* に對する疑問文は *vient il?* であるが、この語序は、フランク治下の二重言語状態に於て、フランス人がガロ=ロマン語を語る際にゲルマン語の表現方法が心に浮び、ガロ=ロマン語を語るにゲルマン語の語序を以てしたことにより、生じたものと考へられるのである。かやうなわけで、ラテン語が變形してフランス語となるについては、少くとも部分的には、かかる事情が與つて力あつたものと思はれる、と Meillet は言つてゐる。A. Meillet: *Sur le bilinguisme* (Psychologie du Langage, numéro 1—4 de 1933 du Journal de Psychologie), pp. 169—171.

十一

言語變化に於ける Substrat 説とは、或言語がその本來の所有者以外の社會集團によつて採用される場合、後者の本來持つてゐた或習慣又は素質によつてその言語が若干の變形を蒙ることがある、その習慣又は素質を名付けて Substrat^(註 1) と言ひ、之によつて言語變化を説明しようとする説を Substrat 説と呼んでゐる。この Substrat の概念は、詳しく言へば、「顯在的 Substrat」と「潜在的 Substrat」との二つに分けて考へなければならぬ。

顯在的 Substrat とは、その言語を新に採用する社會の本來の言語制度そのものである。今専ら音韻のみについて考へるならば、顯在的 Substrat は、次のやうな三つの機會にその影響を現す。

第一、原形保存の場合。甲言語を母語とする人々が乙言語を學び、既に一通りは之を習得しながら、而も、その一部に未だ母語の倣を、原形のまゝ具體的に保存してゐる場合を指す。例へば、關西の人が東京の言語を學び、既に一通りは之を習得しながら、ただアクセントばかりは未だ本來の關西アクセントをそのまま使用してゐるやうな場合がこれである。それで、例へば二音節語について言ふと、關西にも $\overline{\text{アシ}}$ (足) $\overline{\text{イヌ}}$ (犬)のやうな降り型アクセントは有るのであるから、東京語を語る際、 $\overline{\text{ハシ}}$ (箸) $\overline{\text{カド}}$ (角)のやうな語を發音するには、その降り型を利用することが出来る道理である。さうすれば、それは次に説く所の「近似充當」の例となる。併しながら、多くの關西人は、東京語を語る際にも、依然關西アクセントを用ゐて $\overline{\text{ハシ}}$ (箸) $\overline{\text{カド}}$ (角)のやうに言ふ。これは、その母語のアクセントを原形のまゝ具體的に保存してゐるものであるから、即ち此處に言ふ所の「原形保存」の例である。

triaf (<breve) 等のやうに、一般に〔f〕を以て模倣されてゐる。又、ロシア語には古來〔θ〕が無い。それ故、近代ギリシア語の〔θ〕音は、Marfa (<Martha), Fjodor (<Theodor) 等のやうに、常に〔f〕を以て模倣されてゐる。

次に、日本語には〔y〕が無いので、ドイツ語の〔y〕音を模倣するには、ミュンヘン (München)・キュルペ (Külpe) のやうに、多くは〔ju〕を用ゐる。同様に、英語には、本來鼻母音音韻が無いので、フランス語の鼻母音を模倣するには、例へば pension [pã:sjõ] を〔'pa:ɲsio:ŋ〕と言ひ、vingt-et-un [vẽtœ] を〔'vænteĩ'œ:ŋ〕と言ふやうに、「口母音音韻プラス鼻子音韻」を用ゐる傾向がある。

又、古代の日本語には〔m〕〔n〕で終る音節が無かつたので、當時の日本人は、トウシミ(燈心)・シラニ(紫蘭)のやうに、支那音節の末尾の〔m〕〔n〕を〔mi〕〔ni〕で模倣するが多かつた。フィン語は古來(原始フィノウグ語以來)語頭に子音音韻群を持たなかつたので、古代ゲルマン語からの借入語に於ては、語頭の子音群がすべて單一な子音音韻で模倣されてゐる。例へば kaunis (ゴート語 skauns 古代高地ドイツ語 scōni 参照), peli (スウェーデン語 spel 古代英語動詞 spelian 参照), ruhtinas (古代高地ドイツ語 truhtin 古代英語 dryhten 参照), ranta (古代英語 strand 古代ノルド語 strǫnd 参照) 等の如し。

凡そ、我々が未知の外國語を聴く際には、E. Polivanov^(註 3)の言ふやうに、その聴覺印象を、我々自身の母國語の音韻を代表する音の集合として考へ、それを我々自身の母國語に固有の諸音韻に分析し、又我々自身の母國語に固有の音韻結合の法則に一致するやうに解釋する。それ故、全く音韻體系を異にする外國語を聴く時には、聴手は、話手の意圖する所とは全然違つたし方でその聴覺印象を解釋するが多い。

即ち、話手にとっては全く別の音韻の實現である二つの音聲が、聴手に

又、支那の官話は、今の北京地方を中心として發達しつつあつた標準語が、元代以後漸次各地の都市に移植せられ、つひに北支那及び長江流域一帯から貴州・雲南方面にわたる廣大な範圍を勢力圏内に収めるに至つたものである。従つて、官話の原型は、大體元代の北京官話に基いた中原音韻に於て之を見ることが出来るわけである。併し、然らば、現今各地に行はれてゐる官話の音韻状態は、盡く中原音韻の音韻状態から導かれ得るものであるか、といふと、必ずしもさうでない。例へば、山西・陝西方面の多くの都市の官話に於ける *s*, *ts*, *ts'* と *ʃ* *ts*, *ts'* との使ひ分けの如きは、中原音韻や現代北京官話に於ける使ひ分け方とは大いに相違して居り、その分用状態は中原音韻以前の資料(例へば韻鏡等)まで溯らなければ説明され得ないのである。これは、結局、それらの地方の民衆が官話を採用するに當り、固有の土語の特色の一部を官話の中へ導き入れたものであつて、やはり私が言ふ所の「原形保存」の例である。

第二、近似充當の場合。甲言語を母語とする人々が乙言語を學ぶに當り、乙言語の或音と同一のものが甲言語に存在しない場合、甲言語に存する近似の音價の音韻を以て之に充當することがある。例へば、日本人が英語を學ぶ場合、母語の **(r)** を以て英語の **[l]** に充て、母語の **(a)** を以て英語の **[æ]** **[ʌ]** **[ə]** 等に充てるが如き現象がこれである。かくて、米國の Wisconsin の或地方では、ドイツ語を知らない新世代の人々の語る英語にさへも、ドイツ語風の調子が聞かれる。彼等は、ドイツ語の音を以て英語を語る親たちの言語を聴き覺えたものである。^(註 2)

この種の現象が語の借入の際に屢起ることは、言ふまでもない。例へば、上代の日本語には **(χ)** **(h)** 類の音韻が無かつた。それ故、支那語に於ける **[χ]** **[h]** 類の音は、訶(カ)・呼(コ)・訓(クン)等の如く、すべて **(k)** を以て模倣されてゐる。同様に、古代高地ドイツ語には **(v)** が無かつた。それ故、後期ラテン語の **[v]** 音は、fers (<versus), fogat (<vocatus),

は略同類の音と感ぜられ、同一音韻を以て模倣されることがある。例へば、英米人にとっては [l] (音韻《l》の實現) と [r] (音韻《r》の實現) とは全く別の音韻の實現であるが、母國語に此の區別を持たない日本人にとっては、英語の [l] も [r] も共に《r》類の音と感ぜられ、その結果、lace, leader の l [l] も race, reader の r [r] も共に (レース・リーダーの如く) 同一音韻《r》を以て模倣されてゐる。

又、話手にとって本来同一音韻の實現である現實の音聲が、聽手にとっては相異なる二つの音韻として解釋されることがある。その中には、例へば、英語の同一音韻《a》が、トンネル (tunnel)・ポンチ (Punch) 等のやうに《o》で模倣されたり、バター (butter)・バケツ (bucket)・シャベル (shovel)・ブラシ (brush)・カフス (cuffs) 等のやうに《a》で模倣されたりする如く、その使ひ分けの上に殆ど法則の見出されないものも存在するが、中には又、その音韻の實現される位置の相違に應じて、相異なる形で模倣される傾向の認められるものもある。但し、これにも又二つの場合が區別される。

例へば、D. Jones の接した或シリア人^(註4)の耳には、英語に於ける ten の t と letter の t とが、相異なる音のやうに聞えたといふ。蓋し、英語の t は、強音の有る位置では比較的強く出氣 (aspirate) されるが、強音の無い位置では出氣が弱い。それ故、母國語で出氣音韻《t'》と非出氣音韻《t》とを區別してゐる此のシリア人の耳には、ten の t と letter の t とが、^(註5)あたかも相異なる音韻であるかの如く感ぜられたのである。

又、鎌倉時代に我が國に傳へられた宋元音に於ては、支那語の《h》音^(註6)が、或はカ行の形で、或はハ行の形で傳へられてゐる。その一例として、妙心寺の無着道忠禪師の著した小叢林略清規 (貞享元年自序) を見ると、支那語の《h》音は、希 (キ hi) 虛 (キ hy) 虎 (ク hu) 海 (カイ hai) 昏 (コン huən) 獻 (ケン hien) 訶 (コ ho) 火 (コ huo) 化 (クワ hua) 花

(クワ hua) 華(クワ hua) 航(カウ haŋ) 向(キヤウ hiaŋ) 香(キヤウ・キヤン hiaŋ) 興(キン hin) のやうに、大部分はカ行の形で傳へられてゐる。併し、又一方には、少數ながら、凶(ヒョウ・ヒヤウ hyoŋ) 輝(ヒ hyi) 虛(ヒ hy) 熏(ヒン hyin) 勳(ヒン hyin) 賁(ヒョウ hyaŋ) のやうに、ハ行の形で傳へられてゐる例も存在する。(虛は、場所によつて、キともヒとも讀まれてゐる。) 然らば、支那語の〔h〕は、如何なる場合にハ行の形で傳へられてゐるかといふと、それは、大體に於て、此の音韻が〔y〕類の音(殊にその〔y〕が二重母音の第一要素として現れる場合)の直前に立つ場合である。蓋し、鎌倉時代に於ける日本語のハ行頭音は、明瞭な唇音〔F〕であつて、未だ現今のやうな喉音〔h〕にはなつてゐなかつた。それ故、支那語の〔h〕音は、一般にはそれと同一視されることが困難であつた。併し、〔hyi〕〔hyin〕〔hyaŋ〕〔hyoŋ〕のやうな場合には、〔h〕は唇を細く突出して口尖で發音されるやうな傾向が強い。そこで、かやうな場合には、〔h〕は容易に日本語のハ行頭音〔F〕と同一視され得たのである。之に比すれば、〔hu〕〔huən〕〔hua〕〔huo〕のやうな場合には、〔h〕は喉の奥の方から發せられるといふ感じが強い。それ故、これらの場合には、〔h〕は寧ろカ行頭音〔K〕の方に近く聞えたものと考へられる。

右に擧げた二つの例に於ては、話手にとつて同一音韻であるものが聽手にとつて相異なる音韻と感ぜられる原因は、話手の發音に於て、同一音韻が二つの相異なる形で實現されることに存する。然るに、次に述べる二つの例では、假に話手の發音に於て同一音韻が常に同一の形で實現されるものとしても、その同一音聲が、現れる位置の相違に應じて相異なる音韻として解釋されるものである。その原因は、聽手の側の言語に於ける音韻の現れる位置の制限、或は聽手の側の言語の同一音韻が位置の相違に應じて二つ以上の相異なる形で實現される事實に存するのである。

例へば、支那語では、英語の音韻〔l〕は、直後に母音音韻を伴ふ場合に

は〔l〕で模倣されるが、然らざる場合には〔r〕で模倣される。即ち、英格蘭 (England)・倫敦 (London)・先令 (shilling)・他賴 (dollar) 等に対する彌爾敦 (Milton)・昌奈耳 (Channel Is.)・埋爾 (mile)・蒲式耳 (bushel) 等の如く。^(註 7) 蓋し、支那語の音韻制度では〔l〕は音節の末尾には立ち得ないので、英語に於ける音節末尾の〔l〕は、支那語では〔r〕を以て模倣されるのである。

次に、古代のフランス人は、ゲルマン語の音韻〔w〕を、語頭では〔gw〕を以て模倣し、語の中程では〔v〕を以て模倣した。例へば、guarder (<wardon), guerpier (<werpian), guise (<wisa) 等に対する trieue (<treuwa), amanevir (<manwian) 等の如く。蓋し、當時のフランス語では、〔w〕は單獨に用ゐられる例無く、ただ音韻結合〔kw〕〔gw〕の中に現れるのみであつた。又、〔v〕は、語頭では明瞭な摩擦を持つ唇齒音として完全に實現されたが、その他の位置で實現される場合には調音が稍弱かつた。それ故、フランス人の耳には、ゲルマン語の語の中程の〔w〕(音韻〔w〕の實現)は、あたかもそれと同じ位置に於ける自國語の音韻〔v〕の發音に似て聞えるので、それを〔v〕で模倣した。併し、ゲルマン語の語頭の〔w〕(音韻〔w〕の實現)は、自國語の音韻〔v〕の語頭に於ける發音よりは遙かに奥から出るやうに感ぜられるので、特にそれを〔gw〕で模倣した。その結果として、同じゲルマン語の音韻〔w〕が、語の中での位置の相違により、或は〔gw〕で、或は〔v〕で模倣されることとなつたのである。^(註 8) 但し、以上の説明は、W. Meyer-Lübke の見解に基いたものである。

もつとも、「近似充當」に際して働く Substrat の影響は、之を社會全體として見る時は、相當に複雑な進行過程を示すものである。例へば、古代の日本人が支那語の梗 [kaŋ] 芳 [p'üaŋ] などの音を學んだ時、學者は努めて原音を正確に習得し、且かなり忠實に之を傳誦して、平安朝後半期に

至るまでなほ (kan) (Fan) のやうな形を保存してゐた。^(註 9) 併しながら、當時の普通の日本語では、少くとも音節の末尾に (ŋ) の立つ例は無かつたので、一般民衆は早くから之を、「あきちかう野はなりにけり」(桔梗)^(註 10)「鶯のすはうごけども主も無し」^(註 11)(蘇芳苔)などのやうに、(kau) (Fau) と言ひ崩してしまひ、後世はつひに専門の學者さへも (kan) (Fan) の音を忘れて一般民衆の音に従ふこととなつた。同様に、中世英語は一度フランス語から前舌圓唇母音を學び、feoff (fɔf) people (pɔ:pl) のやうな語形を持つたが、(ɔ) は當時の普通の英語には無い音で、一般民衆には發音困難であつたため、やがて (fef) (pe:pl) のやうに言ひ崩されてしまつた。^(註 12)

但し、時には民衆の努力が Substrat に打克ち、之を征服して新しい音韻を確實に獲得するに至る場合も無いではない。例へば、ロシア語は本來 f 音韻を持たなかつたので、最初のうちは、f を含む外國語彙が完全にロシア化した場合には、その f は常に x, ɣ 又は p を以て置き換へられてゐた。併し、後には民衆は漸く f に慣れて、現今では f はロシア語の音韻として既に確立してしまつた。^(註 13)

第三、類推置換の場合。甲言語を母語とする人々が乙言語を學ぶ際、甲言語の a 音韻に相當する所に乙言語が屢 b 音韻を持つことを意識したとすると、その人々にとっては、a の代りに b を持つことが乙言語の特色であるかの如く感ぜられるに至る。そこで、彼等が乙言語を正しく語らうとする際には、自分たちの言ひ慣れてゐる a を b に言ひ換へようと努力する。かかる努力は、正しい結果を生ずる場合もあるが、とかく類推の範圍を誤り易い。^(註 14)ここに、J. Vendryes の所謂 „hyper-urbanisme” 或は „hyper-dialectisme” を生ずるのである。

例へば、昔、イタリアの百姓がローマの標準語を學ぼうと力めた時、自分の方言の長音 o に相當する所に標準語が au を持つてゐる例の多いことを知つた。そこで、標準語を正しく語らうとする時には自分の方言の長音

o を力めて au に言ひ換へたのであるが、その結果、類推が過ぎて、つひには plostrum と言ふべき所を plastrum と言ひ、coda と言ふべき所を cauda と言ひ、plodere と言ふべき所を plaudere と言ふに至つた。又、古代ギリシヤのピタゴラス學派の文獻には、*αῖσθησις*, *κίνησις*, *ἀμετάβλητος* と記すべき所に *αἰσθησις*, *κίνασις*, *ἀμετάβλητος* と記したやうな例が少くない。これは、Attika 方言の *η* に相當する所に Doria 方言が *α* を持つ場合の多いところから、何でも *η* の代りに *α* を用ゐるのを Doria 風だと漫然考へた人々が、不當の類推によつて作り出した形と解せられる。^(註 15)

古代の中部フランク (mittelfränkisch) 方言では、原始ゲルマン語の ft は一般に ht に變つて居り、その結果、他の一般高地ドイツ (hochdeutsch) 諸方言の ft に相當する所に ht を持つことが、此の方言の特色の一つとなつてゐた。例へば、after に相當する語は ahter であり、wizzôdhäftiga に相當する語は wizzetahtia であつた。然るに、かかる方言的特色を矯正しようとする努力から、ht を ft と言ひ換へた結果、suhte を sufte と言ふやうに、本來の ht をさへ ft に言ひ換へた例がある。^(註 16)

又、A. Dauzat^(註 17) に據ると、フランスの Beauce 地方では、ニガヨモギ(共通語 armoise) のことを herbe d'armoire と言ふ。而して、この形を用ゐるのは、二つの母音に挟まれた r を z に變じてゐる地域に限るのである。思ふに、この地域の人が共通語に接するや、自分たちの方言に於ける pèze (父), armoize (戸棚) のやうな形を、力めて共通語に倣つて père, armoire と言ひ改めたのであるが、それに引かれて、たまたま此の地域で armoize (戸棚) と同音になつてゐる armoise (音は armoize) までも armoire と言ひ改め、かくて herbe d'armoire といふ形を作り出すに至つたのである。かやうな誤つた類推から、本來の z を r に言ひ換へてしまつた例は、この地域では、他にも幾つか見出される。

同様な現象は我が國にも多い。例へば、佐賀縣地方では、ri は他の音の

下に在る時には大抵 r を落して i となつてゐる。(但し、eri は ei を經て更に ee となつてゐる。)例へば、アイ(蟻)・イイ(入)・ウイ(瓜)・エエ(襪)・オイ(織)・カイ(狩)・キイ(桐)・クイ(栗)・コイ(懲)・シイ(尻)・スイ(掬摸)・セエ(芹)・ソイ(剃)・チイ(塵)・ツイ(釣)・テエ(照)・トイ(鳥)・ナイ(成)・ヌイ(塗)・ノイ(糊)・ハイ(針)・フイ(降)・ヘエ(縁)・ホイ(堀)・マイ(毬)・ムイ(無理)・モイ(森)・ヤイ(鎗)・ユイ(百合)・ヨイ(寄)の如く。然るに、かやうに ri を i に訛ることの「反動として」、他方では i を ri に訛る例がある。例へばニヲリ(香)・シャウリ(醬油)・コリ(鯉)・タリ(鯛)・マカナリ(賄)の如し。但し、i を ri に訛るのは、特に習慣のある語だけであつて、之を一般に及すことは出来ない。以上は佐賀縣出身の清水平一郎氏の著である佐賀縣方言語典一斑^(註18)(明治三十六年)に據つて記したのであるが、この場合、ri→i の變化が略規則的に起つてゐるのに對して、i→ri の變化が、限られた少數の語にのみ起つてゐる點には、注意すべきである。思ふに、普遍的音韻變化としてまづ起つたものは前者であらう。かくて既に ai(蟻) toi(鳥)のやうな形を慣用してゐる人人が、新に共通語に接した際、心づいたことは、「我々の方言に於て母音音韻の直後に i が續いてゐる場合、共通語はその兩者の間に r を挿む。」といふ事實であつた。そこで、ai(蟻)を正して ari となし、toi(鳥)を正して tori となすと同時に、その關係から更に類推して、tai(鯛)をも tari となし、koi(鯉)をも kori となすに至つたものと考へられるのである。

さて、O. Jespersen に據ると、「外國語を話す時にも、人は不知不識かかる相關的發音を適用することがある。予と同國の或る人の話に、ある時何かに對して法外な値段を要求せられたのに憤慨して、“Das sind doch unblaue preise!”と云つた。否定の接頭語 un- はデンマーク語の u- に相當するし、デンマーク語で u のところにドイツ語で au が非常に屢出

てくる (haus=hus など) ので、早急の際にデンマーク語の ublu (「法外な」) のつもりで unblaue を作り出したのである。しかし、自分の言葉を聞いて、彼は直ちに自分の誤りに気がついて笑ひ出して了つたさうである。」と。^(註 19)

かやうな「類推置換」は、新に習得される言語と既有的の言語とが互に同一言語に属する二つの方言として、或は少くとも互に親縁關係ある二つの言語として意識される場合に於て、始めて起り得ることである。我々はここに不明瞭ながら音韻法則の觀念の萌芽を見ることが出来る。

以上、顯在的 Substrat に關する説明の中では、一社會集團全體が新言語を採用して所謂 bilingual の状態になる場合と、個人が他言語を學習する場合と、個人又は社會が他言語の語彙を借用する場合とを、無差別に混同して扱つて來た。蓋し、新言語又は新言語要素の採用に際して顯在的 Substrat が新來要素の上に影響を及す過程は、いづれの場合にも本質的には異なる所が無いからである。

* * *

潜在的 Substrat とは、その言語を新に採用する社會が本來持つてゐる所の潜在的素質である。それには、勿論、身體的なものもあらうし、精神的なものもあらう。いづれにしても、新に採用された言語に對するその影響は、採用と同時に現れるのではなく、既に採用されて後年月を経る間に徐々に現れて來るものである。

かくの如き潜在的素質の存在し得ることは、常識的にも想像し得る所であらうが、ここにその證據となるべき二三の實例を挙げよう。まづ、日本語のハヒフヘホの頭音は、古くは (p) ^(註 20) であつたが、平安朝時代には既に (F) ^(註 21) に變つて居り、更に江戸時代に入つては (h) ^(註 22) に變化した。ワキエヲ ^(註 23) の頭音 (w) は、平安朝の頃、(a) の前に立つ場合の外はすべて消失した。又、ク、(kwa) の音節は、京都あたりでは、江戸時代の末までも未だその

(註 24)
唇音性を保存してゐたのであるが、現今では既に《ka》になつてゐる。これによつて見れば、唇の働きを弱める傾向は、過去千數百年にわたり日本
(註 25)
語を支配しつつあつたもので、その根底には何らか持続的な原因が日本民族の身體的又は精神的素質に潜在してゐるやうに考へられるのである。

原始インドゲルマン語の p, t, k は、原始ゲルマン語では f, p, χ に變化し、前者の b, d, g は、後者では p, t, k に變化した。所謂第一音韻推移 (Die erste Lautverschiebung) がこれである。⁷又、原始ゲルマン語の p, t, k は、古代高地ドイツ諸方言では p → pf → ff (f), t → ts → ss (s), k → kχ → χχ (χ) の方向に變化を起し、原始ゲルマン語の b, d, g は、古代高地ドイツ諸方言では b → p, d → t, g → k の方向に變化を起した。^(註 26)所謂第二音韻推移 (Die zweite Lautverschiebung) がこれである。この二つの出來事は、相互に數百年を隔てて起つたにも拘らず、全體として甚だよく似た傾向を示してゐる。但し、第一音韻推移の方は、時代が甚だ古く、その變化の過程を審かにすることが困難であるから、この方のことは姑く措き、今はまづ第二音韻推移の方を主として考察して見ようと思ふ。まづ、p → pf, t → ts, k → kχ の變化の將に始らうとする時期に於ては、高地ドイツ諸方言の p, t, k は、恐らく ph, th, kh のやうに強く出氣^(註 27) (aspirieren) されたものに相違無い。又、b → p, d → t, g → k の變化の將に始らうとする時期に於ては、高地ドイツ諸方言の b, d, g は、漸次その聲帶振動を失つて、所謂 stimmlose Media の形に接近して行つたものに相違無い。(上部ドイツ諸方言の中には、殊に語頭の場合など、結局この stimmlose Media の形にとどまつて、現今でもそれ以上には進んでゐないものが少くない。)^(註 28) かやうに考へて來ると、第二音韻推移直前の高地ドイツ諸方言に於ける破裂音韻の發音は、現代のデンマルク語の狀態に髣髴たるものが有つたらうと思はれる。デンマルク語では、強母音の前の^(註 29) p, t, k は非常に強く出氣され、b, d, g, はすべて無聲に發音される。併

しながら、これと同様な傾向は、その程度に多少の差こそ有れ、實はゲルマン語領域の殆ど全體に互つて認められるものである。即ち、p, t, k は、英語・北部ドイツ語・スウェーデン語・ノルウェイ語等でもやはり幾分出氣的に發音され、その點に於て、ロマンス系のフランス語・スペイン語・イタリア語、スラヴ系のロシア語・ポーランド語等に於ける p, t, k の非出氣的發音と顯著な對立をなしてゐる。^(註 30) 又、b, d, g を無聲に發音することは、南部ドイツ語・北部ドイツ語一部・デンマルク語・フェレーエル語 (Färöisch)・アイスランド語等に擴つてゐる特色であるが、^(註 31) 有聲の b, d, g を持つ英語や北部ドイツ語に於ても、語頭の b, d, g の前半 (又は全體) を無聲に發音したり、語末の b, d, g の後半 (又は全體) を無聲に發音したりするやうな傾向は、一般に認められる所である。而して、この點に於ても、亦、非ゲルマン諸言語の完全に有聲な b, d, g との間に、顯著な對立が認められるのである。^(註 32) かやうに考へて來ると、所謂第二音韻推移は、音韻變化としてはただ高地ドイツ語に於てのみ實現されたが、その原因となるべき發音傾向は、殆ど全ゲルマン的なものである。英語・北部ドイツ語・デンマルク語・スウェーデン語・ノルウェイ語等では、p, t, k は一般には出氣的に發音されるが、sp, st, sk の場合には出氣が比較的弱く、或は全然出氣されない。^(註 33) あたかもこれと同様に、高地ドイツ語に於ても、sp, st, sk の p, t, k は推移を起してゐないのである。^(註 34) 英語・北部ドイツ語・デンマルク語・スウェーデン語・ノルウェイ語等の破裂音の發音状態に見られるこの種のゲルマン的特色は、その現代に於ける分布範圍が廣いと同時に、又、千數百年前に起つた高地ドイツ語の音韻推移の性質とも相通ずるものがある。これ、恐らくは、極めて古い時代からゲルマン民族に傳へられて來た何らかの共通素質が然らしめてゐるのではなからうか。

又、ゲルマン諸言語に於て、弱音節の母音音韻 (又は半母音音韻) がその直前に立つ強音節の母音音韻の性質に影響を與へることは、極めて古くか

(註 35)
 ら存した傾向である。例へばギリシヤ語 *ἑστί* に對應する語は古代ザクセン語・古代高地ドイツ語 *ist* 古代英語 *is* であり、ラテン語 *velis* に對應する語は古代アイスランド語 *vill* 古代英語 *wile* 古代ザクセン語・古代高地ドイツ語 *wili* であり、ギリシヤ語 *ἑθός* に對應する語は古代アイスランド語 *siðr* 古代英語・古代ザクセン語 *sidu* 古代高地ドイツ語 *situ* (原始ゲルマン語 **sedu-*) である。なほ、例へば古代高地ドイツ語に於ける *ezzan* (, *essen* ")—*izzit* (, *iſt* ")、*berg* (, *Berg* ")—*gibirgi* (, *Gebirge* ")、*erda* (, *Erde* ")—*irdisc* (, *irdisch* ") のやうな對立に注意せよ。これらはいづれも、弱音節の *i*, *ī*, *i*, *u* が、直前の強音節の *e* に影響して、その口の開きを狭からしめた結果である。同様な變化がかつてゴート語にも起つたものかどうかは不明であるが、この變化は、少くとも北部及び西部ゲルマン諸言語の全領域に互つて歴史以前に既に完成されてゐたものである。従つてその變化の起つた年代も比較的古いものと想像される。之に反して、例へば、古代アイスランド語に於て、古代ノルウェー語 *kallum* に對應する語が *køllom* となり、ゴート語 *riqis* に對應する語が *rōkkr* となり、ゴート語 *siggwan* に對應する語が *syngua* となつた變化や、古代英語に於て、ゴート語 *hāiru* に對應する語が *heoru* となり、ゴート語 *silubr* に對應する語が *sioluf* となつた變化の如きは、いづれもそれぞれの言語に特有なものである。古代英語の名詞 *dæg* に於ては、*dæg*, *dæges*, *dæge*; *dagas*, *daga*, *dagum* の如く、格語尾に含まれた母音音韻の性質に應じて語根の母音音韻が交替を示すに至つてゐるが、これ亦ただ古代英語にのみ特有な事實である。これらの諸變化は原始ゲルマン共通語がそれぞれの言語に分れて後に起つたものと思はれ、従つてその年代も比較的新しいものと想像される。所謂 *i-Umlaut* の如きは、北部及び西部ゲルマン諸言語に遍く行き互つた現象であるが、原始ゲルマン共通語には未だ起つて居らず、各言語毎に別々に發生したものである。現に、第六世紀の頃西

部ゲルマン語の一方言を以て書かれた所謂 *Malbergische Glossen* には、
i-Umlaut は未だ生じてゐない。^(註 36) 古代高地ドイツ語では、第九世紀頃には、
gast の複數形 *gesti* や、*faran* の第二・三人稱單數現在形 *feris*, *ferit* の
 やうな場合に、 $a \rightarrow e$ の例は既に現れてゐるが、 $o \rightarrow ö$, $u \rightarrow ü$ 等の變化
 は未だ起つてゐなかつた。即ち、古代高地ドイツ語に於ては、中世（及び
 近代）高地ドイツ語の *löcher*, *dünne* は未だ *lohhir*, *dunni* の形であり、
älter, *kälte* の類も未だ *altiro*, *kalti* の形であつた。それ故、古代ノルド
 語及び古代英語に於て $a \rightarrow e$, $o \rightarrow ö$, $u \rightarrow ü$ 等の變化が既に歴史以前に
 完結してゐたとしても、^(註 37) これらの變化は、結局、ノルド語・英語・ドイツ語
 等の各言語が相分れて後に、各言語毎に別々に起つたものと認めなければ
 ならない。併し、諸言語に於ける變化の方向の一致は、決して偶然のこと
 とは考へられない。即ち、かかる變化を生ぜしむべき共通の素質は、それ
 らの諸民族が未だ一つの集團をなしてゐた時代から遺傳されて來たものに
 相違無いのである。^(註 38)

以上述べて來た所の三つの實例、即ち、日本語に於ける唇音の衰頽と、
 ゲルマン語に於ける子音變化と、ゲルマン語に於ける母音同化現象とは、
 いづれも、その持續期間に長短の差こそ有れ、各民族に固有の潜在的素質
 が數百年乃至千年二千年の久しきに亙つて音韻變化の方向を指導し得るこ
 とを示すものではなからうか。^(註 39)

例へば、同一の音を發するにしても、A 素質を有する人にはそれが比
 較的容易であるが、B 素質を有する人にはそれが比較的困難である、或は、
 A 素質を有する人は發音を a 方向に近づける傾向を持つが、B 素質を有
 する人は發音を反對の b 方向に近づける傾向を持つ、といふ風な事實は、
 有り得べきことと思はれる。J. van Ginneken に據れば、ユーラフリカ
 (eurafricain) 人中の長頭型 (dolichocéphal) 諸人種に於ては、調音位置の
 前進する傾向があり、従つて、口腔の前部で作られる音が多く、後方で作

られる音は少い。又、子音よりも母音の方が優勢である。之に反して、短頭型 (brachycéphal) 諸人種に於ては、調音位置の後退する傾向があり、従つて、口腔の後部や咽喉で作られる音が多く、口腔前部で作られる音は少い。又、母音よりも子音の方が優勢である。而して、これらの特色は、いづれもそれぞれの人種の解剖學的特徴に關係してゐるものであるといふ。^(註 40)さて、この説が果してどの程度まで正當であるか、殊に氏によつて引用された具體的諸事實が果して一々これら身體的條件に原因を歸せらるべきものであるかどうかについては、大いに疑はなければなるまい。但し、一般問題として、各人種の解剖學的生理學的素質が、音韻變化の方向を定める上に、直接間接に何らかの關係を持つべきことは、想像するに難くないのである。

併しながら、この際問題となるものは、決して身體上の素質ばかりではない。抑、同一言語を語る同一民族の内部でも、身體的素質の上から言へば必ずしも全部が同一であるものとは限らず、社會的文化的に同一民族と言はれるものの中にも、二つ以上の相異なる人種系統に屬するものを含む場合が少くない。例へば、E. Pittard に據れば、所謂ゲルマン民族の大部分は、長頭型に屬し、概して身長高く、ブロンドの髪を有するものが多い。然るに、南部ドイツの民衆は、主として短頭型に屬し、概して身長低く、栗色の髪を有し、即ち Broca の所謂ケルト型に屬するものである。「最初何處から來たとも知れぬこのアラマン人(ケルト群)は、歴史の最古の時代に於て、北方人種の本隊に混入したと想像されるのである。吾々の時代の初世紀に於ては、彼等は既に北方人種に混交して居り、同一の言語を語り、同一の政治的運命の下にあつたのである。」^(註 41)(以上 Pittard の説。)それ故、所謂第二音韻推移 (Die zweite Lautverschiebung) 發生の準備期に於ける南部ドイツ人の發音が、無聲破裂音韻を出氣的に發音したり有聲破裂音韻を無聲に發音したりする點に於て、現代のイギリス人やデンマ

ルク人の發音と共通の傾向を現してゐたとしても、それを兩者の身體的條件の類似の故と見做すことは困難である。寧ろ彼等がその共通の文化的祖先（原始ゲルマン社會）から傳へて來た何らかの社會心理的素質の上の共通性に基くものと見るべきであらう。

ところで、かかる潜在的素質を有する民族が、新に他の言語を習得し、之を永續的に使用するに至つたとするならば、その潜在的素質は、時を経るにつれて、新に習得された言語の上に漸次發現し來り、その將來の變化の方向を或程度まで指導するに至るべきこと、當然のことである。もつとも、言語變化を支配する持續的傾向の中には、例へば、複雑且不規則極まる古代インドゲルマン語の活用組織が必然的にその簡易化規則化を要求されるとか、單音節語たる古代支那語が必然的に複合語の發達を要求される^(註 42)とかいふ風な工合に、その言語體系に固有な特色に對する要求から出てるものも有り、これらの要求は、全く性質を異にする言語體系を採用した曉には消滅してしまふ道理である。併しながら、すべての持續的傾向がさうなのではない。例へば、千數百年も繼續してゲルマン語を支配し、あらゆる點で性質を異にする古代ゲルマン語と現代英語とを同時に支配してゐる子音發音上の傾向の如きは、その社會に固有の根深い遺傳的素質に基くものに相違無く、その素質たるやその社會の採用してゐる言語の種類の變革とは無關係に存續し得べき筈のものである。ここに於て、かやうな潜在的 Substrat を以て若干の言語變化を説明しようとする試みが、有力な學者の間に現れてゐる。左に A. Meillet の擧げてゐる例の一つを示さう。

フランス語は、古ヘガリアの地に移植されたラテン語から生じたものであるが、他のロマンス諸言語に餘り見られない二つの顯著な特色を示してゐる。即ち、ラテン語の *u* が *ü* の音に變つてゐることと、母音に挟まれた子音が極端な變化を蒙つてゐることが是である。然るに、この二つの特色は、あたかも、ローマに征服されたガリア原住民たるゴール人の言語と

同じケルト系の言語の残存者であるブリトン諸言語 (les langues bretoniques) に現れてゐる特色と、全く同じことである。それ故、これらの特色は、ゴール人がラテン語を使用しつつある間に、自身に固有な遺傳的傾向を新言語の中に知らず識らず發現させたものと見る^(註 43)ことが出来る。然るに、フランス語に存するこれらの特色は、ゴール人がラテン語を採用する際に生じたものではなく、フランス語史の進展中に徐々に現れて來たものである。即ち、ケルト人の社會に固有の遺傳的素質が時と共に徐々に發現して來たものであつて、その點に於て、前の顯在的 Substrat の場合とは全く相違してゐる。

u が ü に變化する傾向は、フランス國內ばかりでなく、同じくゴール語の語られてゐた北イタリアの大部分にも現れてゐる。例へば、ラテン語 crūdum は、標準イタリア語では crudo (u=フランス語の ou) になつてゐるが、北イタリア地方ではフランス語と同様に crü (ü=フランス語の u) と言ふ。ところが、これらの方言はどの點から見てもフランス語とは言へないし、又、その u が ü に變化したことをフランス語の影響によるものと見做すことも困難である。畢竟、潜在的 Substrat たるゴール社會固有の遺傳的素質が、ここでも獨立に發現したものと見るより外は無いので^(註 44)ある。^(註 45)(以上は Meillet に據つて記した。)

かやうにフランス語 (或は一般にガロ=ロマン語) に於ける u → ü の變化を、ケルト人の Substrat の影響に歸せしめることは、G. J. Ascoli や H. Schuchardt によつて早くから唱へられてゐた説である。Ascoli は曰く、「長くて強音のあるラテン語の u は、ガロ=ロマン語 (galloromanisch) 領域では ü となり、又更に i ともなる。それは、ちやうどキムリ諸方言 (kymrische Mundarten) で最古の長音 u が i になるのと同じことである。而も、ガロ=ロマン語に於ける u → ü の變化は、ウムラウトや感染 (Infection) によるものではなく、獨立の且恆常的な現象として起つてゐる。

例へば、ラテン語の *duro* がガロ=ロマン語で *dür, dir* になることは、古代ケルト語の *run* (*mysterium*) がキムリ語の *rin* になるのと同様である。*ü* 又は *i* は、ラテン語の短音 *ó* が古く分解して生じた二重母音の第一部分としても現れる。例へば、ナポリ方言の *cuorne* に對するガロ=ロマン語の基本形 *cüern* の如く。しかのみならず、此の *ü* 又はそれから生じた *i* の發音が非常に閉ぢてゐる結果として、それらの前に立つ喉音 (*Gutturallaut*) が口蓋音に化してゐる。例へば、現に西部ラディーン諸方言 (*westladinische Mundarten*) に行はれてゐる *ciern, cîrn* の如く。*cierp, cîrp, corpus* 等も同様である(これについては、*osso, tiesso* から出た *iss* の形を参照せよ)。それ故、ガリア人が純粹な *u* を模倣するに當り、彼等の發音上の習慣に従つて最も容易に用ゐ得る音は *ü* であつた、といふ單なる一事實が、ラテン語の諸單語にそれ程深い變形を生ぜしめるに至つたのである。^(註 46)

然るに、この最後の部分に明かに示されてゐる通り、*Ascoli* は、ガロ=ロマン語に於ける *u* → *ü* の變化を、ガリア原住民の顯在的 *Substrat* によつて説明しようとしてゐる。假に氏の言ふ所が事實であるとせば、これ即ち近似充當の例であつて、ラテン語本來の *u* は、古くゴール人がラテン語を習得した當初に於て、既に *ü* を以て置き換へられて居るべき筈である。ところが、事實は然らず、ガロ=ロマン語に於て *u* → *ü* の變化の完成したのは、遙か後世のことであつた。例へば、*W. Meyer-Lübke* に據れば、卑俗ラテン語の *u* に相當する音は、ノルマン侵入時代の北部フランスでは、未だ *ü* にはなつてゐなかつた。その事實は、*Normandie* の地名 *Etainhus* が古代ノルド語 *Steinhus* から出て居り、同じく *Grunes* が古代ノルド語 *grunn* (‘*Klippe*’) と關係を持つこと等によつて證せられる。もつとも、北部フランスに比すれば、南部フランスでは、此の變化は一層早く起つてゐたやうである。例へば、西北部フランスで起つた詩體の

名 *rotruenge* は、古代プロヴァンス語には *retroenza* の形で現れて来る。これは、この語が借入された當時、北部フランス語では卑俗ラテン語の *u* の後舌性が未だ維持されてゐたのに對し、プロヴァンス語ではそれが既に *ü* に變化してしまつて居り、従つてその音韻體系は後舌音 *u* を缺いてゐたために、已むを得ず *o* を以て北部フランス語の後舌音 *u* を模倣したものと考えられる。併し、そのプロヴァンス語でさへも、その音韻状態を仔細に檢する時は、その *ü* が最古の時代にはやはり後舌音 *u* であつたことを示す内部的證據が見出される。のみならず、上部 Wallis を始めとして、Lyon 地方や Delphinat, Savoyen 等の地方に行はれてゐる諸方言の中には、或は現今に至るまで後舌音 *u* を保存してゐたり、或は昔の文獻によつてかつて後舌音 *u* (*ou* と綴られてゐる) の存在してゐたことの推定されたりするものが少くない。又、一口に *ü* 音と言つても、現代諸方言について細かく調べて見ると、その口蓋性の程度は地方によつて種々相違してゐるのである。これらの諸事實を綜合して考へるに、ガロ=ロマン語に於ける *u* → *ü* の變化は決してゴール人によつてラテン語の採用された當時に一時に起つたものではなく、ゴール地域に既にラテン語が一般に話されるやうになつてから後に、その中の一箇又は數箇の地點から起つて漸次一般に擴つて行つたものに相違無い。Meyer-Lübke は、大略以上のやうな論據から、右の *u* → *ü* の變化をケルト語の Substrat によるものとする説に、大いに反對してゐるのである。^(註 47)

實際、この變化の原因をガリア原住民の顯在的 Substrat によつて説明しようとしたことは、Ascoli の説の大きな缺陷であつた。併し、ガロ=ロマン語に於ける *u* → *ü* の變化の進行が極めて徐々たるものであつて、その完成が遙か後世のことであつたとしても、ただそれだけの理由から、この變化の原因が原住民の本來の素質に存するものであるとする假説を、直ちに覆し得るものではない。もし變化の原因を、ガリア原住民の潜在的

Substrat に存するものとして考へるならば、ゴール人がラテン語を習得した後、その潜在的素質が徐々に言語の上に發現し來つたものとして説明し得るが故に、前記の難點は除去されてしまふ。そこで、かかる立場からゴール語 Substrat 説を再建したのが Meillet である。曰く

「勿論そこには何か更に深いものがあるに相違ない。假令、先天的の解剖學的特徴が遺傳されないとしても、後天的の習慣の遺傳はあらう事は、経験の示すところである。しかるに言語的慣用なるものは最も高度に於て後天的な習慣の總體としての性格を持つてゐる。新しい言語を學ぶ時にも、言主はこのためにその古い遺傳性を失ふ事はない。生得の言語にあらはれてゐた傾向はまた更に新しく習得された言語にもあらはれて來るであらう。故にラテン語が全く傾向を異にする他の言語、そして特にゴール語を驅逐してその跡を襲つた地域に於て、殊に深刻な變移を蒙つた事も自ら我々に諒解のゆくことである。例へば、人の知る様に、ケルト語の特質の一つは、母音に挟まれた子音を變化せしめて近接する母音に順應せしめ、更にはこれを消去しさへもする傾向の強いことである。ところが、ガロ＝ロマン語の地域以外、殊にフランス語以外にあつては、いづこにおいてもラテン語における母音間の子音はフランス語における程激しく變化し、また消去された事はない。lepore(m) は lièvre「兎」となり、amatam は aimée「愛されたる」(女性形)になつてゐる。我々はフランス語におこつたその最も性格的な變化の中には、ただにゴール地方におけるラテン語の發音され方に由來するもののみならず、またゴール語を話して來た言主の後天的習慣の遺傳に由るもののあるのを認めざるを得ない。かういふ形式の假説を設けるならば、屢基質説に對して向けられた反駁も直ちに解消し去るであらう。ガロ＝ロマンの地域及びアルザスにおける u から ü への轉移も、ゴール語の直接的復活ではないかも知れない。しかし或種の後天的習性が遠く遺傳されて來た結果であるには相違ない。」と。^(註 48)

第四編 音韻變化の諸原因

そもそも、顯在的 Substrat は、新言語を採用する社會が從來持つてゐた言語制度そのものである。之に反して、潜在的 Substrat は、その社會が言語を取り替へた場合、その取り替への前後に於ける言語の相違にも拘らず、依然として不變に存續する所の素質である。即ち、顯在的 Substrat が言語制度そのものであるのに對し、潜在的 Substrat は言語制度を超越した或物である。

併しながら、また或點から見れば、顯在的 Substrat と潜在的 Substrat とは、互に密接な交渉を有するものである。凡そ、人類の社會生活に於て、人と制度とは相互に影響しあふ。制度は人の作つたものであるが、人はまたその屬する社會の制度によつて心身に影響を蒙るのである。故に、一の社會が或言語を使用すること久しきに及べば、その言語がその社會本來のものであると否とに拘らず、その社會の民衆はその言語制度を通じて物の見方考へ方を訓練せられ、知らず識らず心理的傾向の上に或種の素質を獲得するに至る。(發音運動を支配する趣味傾向の如きもこの中に含まれる。) かくして得られた素質は、本來その言語制度と切つても切れない關係を持つものであるが、言語制度そのものではない。かくて、時勢が變つて、その社會が更に新しい言語制度を外から採用するに至つた場合には、舊來の言語制度によつて與へられてゐた心理的傾向は、潜在的 Substrat として新言語に働きかけるやうになる。それ故、顯在的 Substrat と潜在的 Substrat とは、或點から見れば全然相異なるもののやうでありながら、又或點から見れば密接な關係を持ち、時には容易に區別し難い場合さへも存するのである。これ、蓋し、人と制度、心理的傾向と言語の間に存する緊密な相互關係に基く。然らば、從來多くの學者がこの兩者を混同して扱つて來たのも一面無理も無いことであつた。

- 註 (1) 素地・基質などと譯される。
- (2) L. Bloomfield: *An Introduction to the Study of Language* (舊版), p. 219.
- (3) E. Polivanov: *La perception des sons d'une langue étrangère* (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 4, 1931.), p. 80.
- (4) a speaker of Urmian Syriac.
- (5) D. Jones: *On Phonemes* (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 4, 1931.), p. 77.
- (6) 詳しくは拙稿「諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」(「言語研究」第二輯所載, 昭和十四年) 58—63 頁を参照せられたし。
- (7) 實例は辭源から拾つた。
- (8) W. Meyer-Lübke: *Historische Grammatik der französischen Sprache*, I, 4. und 5. durchgesehene Auflage, 1934, S. 126.
- (9) 大矢透博士著「周代古音考」(大正三年) 117 頁以下。
同「韻鏡考」(大正十三年) 45 頁以下。
- (10) 古今和歌集卷第十物名, 紀友則「秋近う野はなりにけり白露の置ける草葉も色變り行く」(桔梗の花)
拾遺和歌集卷第七物名, 讀人知らず「あだ人のまがき近うな花植ゑそ匂ひもあへず折り盡しけり」(桔梗)
- (11) 拾遺和歌集卷第七物名, 祐見「鶯の巢は動けども主も無し風にまかせていづち往ぬらん」(蘇芳荇)
- (12) O. Jespersen: *A Modern English Grammar*, I, 3. ed., 1922, p. 79.
- (13) R. Jakobson: *Prinzipien der historischen Phonologie* (Travaux du Cercle Linguistique de Prague 4, 1931.), S. 254. この場合には、恐らく、ロシア語が本來 *v* 音 (即ち *f* に對する有聲音) を持つてゐたといふ事實が、*f* 音の獲得を容易ならしめたものであらう。
- (14) (15) J. Vendryes: *Le langage, introduction linguistique à l'histoire*, 1921, p. 59.
- (16) H. Naumann: *Althochdeutsche Grammatik*, 2. Aufl., 1923, S. 129.
- (17) A. Dauzat: *La géographie linguistique*, 1922, p. 61.
- (18) 同書 19—23 頁, 91 頁, 145—146 頁, 147 頁, 151 頁, 155—156 頁。
- (19) O. Jespersen: *Language, its Nature, Development and Origin*, 1922, p. 294. 譯文は市河三喜・神保格兩先生譯「言語, その本質・發達及び起原」(昭和二年) 545 頁に據る。
- (20) 上田萬年博士「P 音考」(明治三十六年刊「國語のため」第二所收)。
- (21) 安藤正次先生著「古代國語の研究」(大正十三年) 162—188 頁。
橋本進吉先生「波行子音の變遷について」(昭和三年刊「岡倉先生記念論文集」所收)

第四編 音韻變化の諸原因

吉澤義則先生著「國語史概説」(昭和六年) 40—42 頁。

橋本進吉先生講述「國語史の研究」(昭和十年八月信濃木崎夏期大學に於ける御講義の筆記, 昭和十一年刊) 83 頁以下。

(22) 「音韻體系」編第六章註 1 に挙げた諸文獻を参照せられたし。

(23) 室町時代に於けるオ(ヲ)の音は、耶蘇會式のローマ字綴では vo と綴られて居り、従つてその發音は〔wo〕に近かつたかと思はれる。そこで、平安朝初期までは區別されてゐたオ《o》とヲ《wo》とがその中期の頃同一音になつたとすれば、その結果は《o》の方に統一されたものか《wo》の方に統一されたものかが問題になるわけである。併し、この變化が、《wi》→《i》, 《we》→《e》の變化と相前後して起つたことから考へれば、これらは必ず皆同一傾向に屬するものと見らるべく、従つて、《wo》→《o》といふ變化の結果《o》《wo》が共に《o》の方に統一されたものと考え方が穩かである。室町時代に於ける〔wo〕の〔w〕も、果して音韻制度の上で要求されてゐる要素であつたかどうかは疑問であり、寧ろ音節《o》が、發音を明晰ならしめる欲求から、當時いくらか〔wo〕に近く發音される傾向を示してゐた程度のもものではなからうか。

(24) 新村出先生「音韻史上より見たる『カ』『ク』の混同(明治三十九年稿, 「國學院雜誌」第十二卷第十一號及び第十二號, 「東方言語史叢考」に再收)。

(25) 日本本土の言語のみならず、琉球語にもこの傾向が見られる。

伊波普猷先生「P 音考」(明治四十年稿, 「古琉球」所收)。

新村出先生「琉球語の波行音の變遷」(「東方言語史叢考」所收)。

(26) H. Paul: Deutsche Grammatik, Band I, 1916, S. 101 ff.

Naumann 前掲書 (註 16) S. 39 ff., 130 ff., 146 ff. u. 156 f.

(27) E. Sievers: Grundzüge der Phonetik, 4. Aufl., 1893, S. 261 f.

(28) H. Reis: Die deutschen Mundarten, 2. Aufl., 1920, S. 44 ff. u. 122 ff.

(29) H. Sweet: On Danish Pronunciation, 1873—4 (Collected Papers of H. S. arranged by H. C. Wyld, 1913.), p. 356.

O. Jespersen: Lehrbuch der Phonetik, 3. Aufl., 1920, S. 103 f. u. 106 f.

J. Forchhammer: Die Grundlage der Phonetik, 1924, S. 178 f.

(30) H. Sweet: A Primer of Phonetics, 3. ed., 1906, p. 57.

Jespersen 前掲書 (註 29) S. 104 f.

(31) J. Storm: Englische Philologie, I, 1892, S. 236.

Sievers 前掲書 (註 27), S. 127 に據れば、かやうな „stimmlose Lenis” は、Westmoreland 等イギリスの方言にも見出されるといふ。

(32) H. Sweet: Sounds and Forms of Spoken Swedish, 1877—9 (Collected Papers of H. S. arranged by H. C. Wyld, 1913.), p. 376.

Sweet 前掲書 (註 30) pp. 58 and 62.

Jespersen 前掲書 (註 29) S. 107 f.

- M. Grammont: *Traité de phonétique*, 1933, p. 168.
- (33) Sweet 前掲論文 (註 29) p. 356.
 同氏前掲論文 (註 32) p. 376.
 Storm 前掲書 (註 31) S. 67.
 Jespersen 前掲書 (註 29) S. 104.
 Grammont 前掲書 (註 32) pp. 169—170.
- (34) Sievers 前掲書 (註 27) S. 262.
 因みに, sp, st, sk の p, t, k は, 第一音韻推移の際にも變化を受けなかつた。英語 stand ドイツ語 stehen スウェーデン語 stå ギート語 standan ラテン語 stare ギリシ語 εστην ロシア語 stoiate.
- (35) K. Brugmann: *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*, anastatischer Neudruck, 1922, S. 237.
 R. Loewe: *Germanische Sprachwissenschaft*, I, 3. Aufl., 1922, S. 40 ff.
- (36) Naumann 前掲書 (註 16) S. 12 u. 18.
- (37) 古代アイスランド語の例。ketell (ギート語 katils) sókia (ギート語 sōkjan) fylla (ギート語 fulljan) 等。
 古代英語の例。settan (ギート語 satjan) sékan (ギート語 sōkjan) wyllen (古代高地ドイツ語 wullin) 等。
- (38) 所謂 i-Umlaut を惹起した i, i, i の直前に立つ子音は, ギート語及びクリム=ギート語 (Krimgotisch) 以外のゲルマン諸方言がまだ相互に關係を保つてゐた時代に, 既に口蓋化されてゐたのだ, と考へる説もある (Loewe 前掲書 (註 35) S. 42.)。發音の一般の傾向としてはさもあつたらう。併し, さればとて, 普通の子音音韻とは區別された獨立の口蓋的音韻が分化してゐたものと考へる必要は無い。現代のドイツ諸方言の中には, Öhm (Oheim), Emes (Ameise), Erwet (Arbeit) のやうに, 原始ゲルマン語の ai の系統を引く音によつて Umlaut の惹起されてゐる場合さへも有るのである (Reis 前掲書 (註 28) S. 66.)。
- (39) もつとも, この種の素質は, 必ずしも永久不變なものとは考へられない。例へば, 高地アレマン方言 (Hochalemannisch) は, 第二音韻推移によつて, p, t, k が Affricata 化 (或は更に摩擦音化) して以來, 出氣的破裂音を知らざること既に久しい。何故なら, 第二音韻推移によつて本來の d から生じて來た t は, 未だ非出氣的 Tenuis の状態に在るからである。一方, b → p, g → k の推移は, アレマン方言では, ただ一時その傾向を文獻の上に見せてゐるのみであつて, 完全に遂行されるには至らなかつた。それ故, 高地アレマン方言は, 千年以來, ただ非出氣的 Tenuis と stimmlose Media とを知るのみであつて, 英語・低地ドイツ語・デンマーク語・ノルウェイ語・スウェーデン語の場合のやうな出氣的 Tenuis を知らないのである。

- (40) J. van Ginneken: La biologie de la base d'articulation (Psychologie du Langage, numéro 1—4 de 1933 du Journal de Psychologie.), pp. 306—307.
- (41) E. Pittard: Les races et l'histoire, 1924, p. 99. 但し譯文は古在學氏譯「人種學的に見たる民族發達史」(第二分冊, 昭和十二年) 152 頁に據る。
- (42) 音韻の方面に例を求めるならば, 例へば, 古代のゲルマン諸言語では, 語根は多くの場合は語の頭の方の部分であつて, 語の終の方の弱音節は大抵は接辭や曲折語尾であつた。かやうなわけで, 語の終の方の音節は, 意義上餘り重要な部分でなかつたため, その部分が次第に弱まつたり消失したりして行く傾向を妨げるものは何も無かつた。この場合, 語の末尾の部分の極端にまで弱めて行くといふ傾向は, ゲルマン語の語の構造上の特色と不可分の關係に立つものであつて, 文法上の性質を異にする他言語には通用しないわけである。
- (43) A. Meillet: Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, 7. éd., 1934, p. 25.
- (44) A. Meillet: Les langues dans l'Europe nouvelle, 1928, pp. 87—88.
- (45) Meillet は「潜在的 Substrat」などといふ言葉は用ゐてゐないけれど, その説く所の趣意は, 私が此の語を以て表す所と全く同じである。
- (46) G. J. Ascoli: Ueber die ethnologischen Gründe der Umgestaltung der Sprachen, S. 282. 私が見たのは抜刷である。これが何年の何といふ雑誌又は論文集の抜刷なのであるか, 残念ながら私には分らない。此の論文には, なほ, ガロ=ロマン語に於て, *ca* が *ca* に變化し, *é* が *ei*, *oi* に變化し, 又母音に挟まれた *d* が弱まつて消失したこと等を挙げ, これらの現象を何れもゴール語の特質に關係あることとしてゐる。
- (47) W. Meyer-Lübke: Einführung in das Studium der romanischen Sprachwissenschaft, 3. Aufl., 1920, S. 227 ff. 氏はなほ, 卑俗ラテン語の *factu*, *nocte*, *octo* がフランス語の *fait*, *nuit*, *huit* に變化したことにつき, その原因をケルト語の Substrat に歸せしめようとする説に對して, その論據の薄弱であることを主張してゐる (S. 232 f.) が, ここには省略する。
- (48) A. Meillet: La méthode comparative en linguistique historique, 1925, pp. 79—80. 譯文は泉井久之助氏譯「史的言語學に於ける比較の方法」(昭和九年) 112—114 頁に據る。

十二

本篇を終ふるに當り、今まで述べた諸問題を綜合して、それぞれに正しい位置を與へなければならぬ。^(註 1)我々は、前に表現といふ目的を中心として音韻變化を觀察し、その原因となるものを左のやうに分類した。

A. 表現の目的に關係有るもの

I. 表現手段を簡易ならしめる欲求

1. 發音を容易ならしめる欲求
2. 記憶の負擔を軽減する欲求

II. 表現手段を有效ならしめる欲求

1. 發音を明瞭明晰ならしめる欲求
2. 言語單位の自己統一を明瞭明晰ならしめる欲求
3. 種々なる表現效果を目指す欲求

B. 表現の目的に關係無きもの

I. 言語活動以外の隣接領域に起つた變化の影響

II. 身體的又は精神的素質の變化

併しながら、問題を表現といふ目的にのみ局限せず、廣く人生一般を考へるならば、そこには又別種の分類が可能となる。即ち、A 及び B_I は「人間の働き」に關する問題であり、B_{II} は「人間そのもの」の變化である。B_{II} に言ふ所の「身體的又は精神的素質」とは、即ち前章に述べた「潜在的 Substrat」であり、言はば民族性とも言ふべきもので、これは容易に變化するものではない。ただ、種々なる自然的社會的事情の影響により、又その民族自體の不斷の努力によつて、極めて徐々に變化し得るのみである。かかる身體的精神的素質に基いて、「人間の働き」即ち A-B_I の諸活動が現れて来る。これらは、即ち、一定の民族性が、與へられた環境（自然及び社會）に對して如何に働きかけ、又環境からの影響に對して如何に

反應するか、といふことを示すものに外ならない。

抑、社會制度はもと人によつて作られるものであるが、既に成立した社會制度は、環境の一部として我々に對立するものである。民族生活は、その自然的及び社會的環境によつて自ら影響され變質を蒙るけれど、決してただ機械的に外界からの影響に左右されるのみではない。民族の生活力は、絶えずその環境に働きかけて、之を利用し、又は之を變形して自己の利用に便ならしめんとする。民族と環境との間のかかる相互作用は、自らその時々に対応した時代思潮を生み出す。この時代思潮は、畢竟その民族性がその時代々々の環境に順應した形に外ならないのである。音韻史について考へれば、發音を容易ならしめる欲求、記憶の負擔を軽減する欲求、發音を明瞭明晰ならしめる欲求、言語單位の自己統一を明瞭明晰ならしめる欲求、種々なる表現効果を目指す欲求等の如きは、何れも、既存の言語制度を變形して之を自己の利用に一層便ならしめんとする民族生活力の現れである。それらの諸欲求が、各如何なる方向に如何なる強さを以て働き且實現されるかは、それぞれの民族性、又それぞれの時代思潮によつて定まるものである。

又、上に Br の中に言ふ所の「言語活動以外の隣接諸領域」は、等しくその民族の生活力の現れである點に於て、言語活動とその根原を同じうしてゐる。これらの隣接領域からの影響は、言語本來の目的の上から見れば、言はば偶然的な介入者たるに過ぎない。併し、もしその隣接領域に於ける變化がそれ自體必要已むを得ざるものならば、生活全體を圓滿に進行させるために、言語制度も亦それに順應して變化せざるを得なくなるであらう。

さて、私は既に第八章に於て、音韻變化を惹起する「因」と「縁」とについて述べた。その「因」とは民族の生活力の發現たる諸欲求であるが、その際、同一の欲求も、環境(自然的又は社會的)の諸條件の相違するに従つて、いろいろ異なる形で實現される。その各條件が即ち「縁」なのであ

る。それ故、「因」は主體たる民族の生活意欲に屬するものであり、「縁」は之に對立する所の環境に屬するものである。ここに環境と稱するものの中には、既存の言語制度は勿論のこと、我々自身の發音器官の物理的生理的性質さへも入るのである。我々の發音器官の性質は、自分自身に與へられた素質の一部ではあるが、我々の意志の外にそれ自體存在する所の客體に屬してゐる。又、その生理上の自然的傾向の如きも、我々の意欲からは獨立した必然性に従つて動いて行くものである。従つて、これらは、その民族の現在の生活意欲の發動に際しては、寧ろ環境の一部として之に對立するものである。例へば、ラテン語の *caballus* が *cavallus* に變化した事件 ($b \rightarrow v$) に際し、その「因」となつたものは「發音を容易ならしめる欲求」で、これは古代イタリア人の生活意欲に基くものであるが、その「縁」となつたものは、 b が二つの母音音韻の間に挟まれてゐたといふ事情である。この「縁」は、更に二つの方面から考へられる。即ち、(一)二つの母音の間に挟まれた b が摩擦音化し易いといふことは生理上の自然的傾向であるが、(二) *caballus* の b 音韻は、ラテン語の既存の言語制度によつて、あたかも二つの母音音韻の中間に置かれてゐたのである。かかる生理上の自然的傾向や、既存の言語制度の上の事實は、すべて我々の環境に屬する「縁」であるが、たとひ音韻變化を起し得る「縁」が既に存する場合でも、自己の生活意欲を充すためにその「縁」を把捉する「因」が働かなければ、音韻變化は決して實現されるものではない。母音に挟まれた b が摩擦音化し易いといふ事情そのものは、自然的一般的傾向であつて、何れの時代の何れの言語にも通ずる事實である。併し、「因」の働かない所には音韻變化は起らない。かかる自然的傾向に順應して發音容易化の欲求を實現しようとした帝政時代のローマ人や中世の上部ドイツ人の言語では $b \rightarrow v$ の變化が起つたけれど、生活意欲がかやうな道を選択しなかつた諸民族の言語(例へば標準日本語や標準英語の如き)ではこの種の變

化は未だ起つてゐないのである。なほ又、たとひその欲求は存在するとしても、その時代その社會の思潮が一般に保守的であつて、舊來の制度を變革することを好まない場合には、音韻變化は起り難い。この種の事情については、なほ次節以下に詳論することとしよう。

* * *

最後に考へたいのは、音韻史上の如何なる時期に急速な變化が起るか、といふことである。換言すれば、音韻變化を促進し又は抑止する諸原因についての考察である。

それにつき、O. Jespersen は左のやうに論じてゐる。「若し或特殊な時期に或言語上の變化（發音上、形態上、意味上、或は凡てを一緒にした變化）が特別に多いといふことを發見すると、自然の勢として、我々はその當時の社會的狀態がどうであつたかと注意し、出来ることなら斯やうな變化を促した事情を發見しようとする。そこで予は特に音韻變化の際作用したらしい條件が二種あると考へてゐる。第一に、長く續いた大戦争などがあつた時、多數の親達は家にゐなかつたらうし、或は、大疫病の時などには殺されてしまつたかも知れぬので、親達及び一般に成人の影響は普通より尠かつたかも知れない。（中略）第二に、全社會員が強い獨立の感情に燃え立つてゐて、力強い學校組織或は文學的傳統をも含める色々の社會的束縛から脱しようとする故に、言語の變化に對する普通の拘束を感じる（註2）こといつもより少いといふ様な時期もあるかも知れない。」

之を都會と田舎との關係に引きあてて考へると、まづ、音韻變化を抑止する所の「力強い學校組織或は文學的傳統を含める色々の社會的束縛」の如きは、殆ど都會の專有である。都會人は、自覺的又は半自覺的に自己の言葉遣ひを反省し、又他人から批評される機會に富んでゐる。之に反して、田舎人は、概して言葉遣ひには無頓着である。殊に農村では、兩親共に野らへ出て、子供が獨り放擲されるため、言はば平時に於ても大戦争の場合

に近い状態に在るものと言つてよい。これは、恐らく日本ばかりの事情ではなからう。かやうな點から考へると、音韻變化の進行に對して、都會の事情は寧ろ抑止的であり、田舎の事情は寧ろ促進的なるべき道理である。既に第八章で引いた A. Dauzat の言葉の中にも、近代の北部フランスに於ける都會と田舎との對立について、これと略同趣意の見解が述べられてゐた。

併しながら、Jespersen の擧げてゐる第二の條件については、問題が一層複雑である。即ち、傳統を輕視する獨立進取の感情が都會の方に強いかに田舎の方に強いかは、場合によつて違ふ。概して都會は文化進展の先頭に立つものであり、維新以來の東京などは地方都邑に比して確かに進取的な氣風に富んでゐたと言つてよからうが、戰國時代の京都の氣風などは恐らく寧ろ退嬰的な方であり、革新の氣運は地方の小都邑から起つたのである。一體、大戦争が音韻變化を促進するといふのならば、我が國では戰國時代こそ最も變化に好都合な時期であつたわけである。従つて、ジズ・ヂズの混同とかアウ・オウの混同とかいふ風な、中世と近世とを劃する重要な音韻變化は戰國時代の眞最中に起つてゐさうなものであるのに、事實は然らず、標準語ではこれらの變化は江戸時代の初に起つたものであり、平和が既にその緒に就いた慶長初年に於てすら未だ古い區別が忘れられてゐなかつたといふことは、當時の文獻の記載によつて立證される。これは一見理に背いてゐるやうであるが、戰國時代の京都は既に全國の社會的中心にあらず、時勢の進展に對しては京都は寧ろ受動的な地位に置かれて居り、革新的勢力は東方から起つて京都に入つたものであること、又京都では地方都邑に比して古い傳統が尊重されてゐたこと等を思ひ合せるならば、必ずしも不可解のことではない。事實、これらの變化は、東方では早くから起つてゐたのである。なほ、我が國に於て、言語の上で西國が東國より概して保守的であることは、既に學者の注意を惹いてゐる所であるが、これは

(註 3)

(註 4)

- ・住民の素質や氣風によるものであるか、或はその背後に何か社會經濟上の理由でも存するのであるか、研究を要する所である。

次に、例へば田舎の人が都會の言語に憧れるやうに、すべて自己の屬する社會の言語制度以上に他の言語制度を尊重する時は、自然その半面として自己の屬する社會の言語規範を輕んずる傾向を生じ、その權威を失墜せしめ、之を崩壊へと導くに至る。例へば、伊波普猷先生に據ると、室町時代以後琉球と内地との交通が頻繁になつたので、日本文學が漸次琉球の上流社會にも行はれるやうになつた。その事實は、「おもろ」や金石文などの言葉の日本化されたのを見ても知ることが出来る。又、慶長以後琉球語が等しく内地語の影響を受けたことは、第十八世紀の初頃に出來た琉球古語の辭書「混效驗集」の序文を見ても分る。即ち、當時の人は、九十一年前の内裏言葉で書かれた「ようどれのひのもん」(尙寧王の墓碑)や「おもろ」の言葉を、「みせせる」の言葉(古代の言葉)として研究するやうになつてゐたのである。かくて、伊波先生は、近代琉球語の語彙や音韻の上に起つた急速な變化の原因を、主として内地語の影響に歸しておいでになるのである。^(註5)

その他、相當多數の民衆が他地方から有力な社會層の中へ入り込む時は、その社會の既存の言語規範を弛緩もしくは崩壊せしめることとなる。例へば、徳川氏開府當初の江戸に於ては、土着の土民の外、武家には三河・遠江出身の旗本御家人や諸國の大名の臣があり、町人には伊勢・三河・東海道筋から移住したもの、又江戸附近小田原あたりから集つたものも有つたといふから、その言語狀態の不統一は想像するに餘りがある。^(註6) かやうな雜然たる不統一狀態の中から、^(註7) 「より善き統一」を求めて新しい規範が生れ出て來るのである。かかる時代に於て言語に急速な變化の起り易いことは當然である。

又、A. Meillet に據ると、一の言語がその本來の所有者以外の人民に

よつて語られるやうになる場合には、新にその言語を採用する人民本來の Substrat の働きにより、その言語は概して急速な變化を起す。例へばポリネシア (la Polynésie) の言語は、大洋の中の島々に散在してゐるにも拘らず、かなりよく統一してゐる。これは、それを語る人民が同一だからである。インドゲルマン語の領域の中でも、リトアニア (la Lituanie) に於ては人民が久しい間同一だつたらしく、従つてその言語も若干の點に於て非常に古風な特徴を保存してゐる。之に反して、イラン語 (l'iranien) の場合には、征服者の言語が廣大な被征服地に擴つたので、急速な變化が起つた。即ち、西曆紀元初頭のイラン諸方言は、十世紀後のロマンス諸言語に比すべき程度にまで變化してゐたのである。^(註 8) これらは、いづれも言語變化一般について言はれることであるが、その一部たる音韻變化に對しても、勿論適用される所である。

之を要するに、或土地或時代の言語に就いて、その變化が急速又は緩慢であることの理由を考へるに當つては、事情は概して極めて複雑なのであるから、概括的な議論に満足すること無く、可能なるべき諸原因のすべてを念頭において、綿密な考察を加へなければならない。

註 (1) 第二章参照。一般的に言へば、表現の働きをなすものは言語活動のみではない。顔付、身振、信號等も亦表現の働きを有する。併し、その種のものが音韻變化の原因として參與するのは、主として、それが言葉の發音に伴つて現れ言語活動の一部として働く場合に限られてゐる。

(2) O. Jespersen: *Language, its Nature, Development and Origin*, 1922, p. 260. 譯文は市河三喜・神保格兩先生譯「言語、その本質・發達及び起原」(昭和二年) 477—478 頁に據つた。

(3) 第八章参照。

(4) 東條操先生著「國語の方言區劃」(昭和二年) 23—26 頁参照。

(5) 伊波普猷先生「P 音考」(明治四十年稿, 「古琉球」第三版 423—425 頁) に據る。

(6) 保科孝一先生「江戸言葉に就て」(「東亞之光」第四卷第十二號, 第五卷第一號所載, 明治四十二年, 四十三年) 参照。

(7) 「音韻の二重性格」編参照。

(8) A. Meillet: *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 7. éd., 1934, pp. 24—25.